はじめに

多くの教師は、憲法と教育基本法の教育理念に沿って日々、生徒のために努力してきた。それにもかかわらず、学校教育において受験競争の激化や管理主義の弊害がいっそう顕著になってきており、「公立中学校はこれでよいのか」などという声さえ聞かれる。学校の教育力の回復、改善が求められている。

臨教審以来、「教育改革」が言われ、新様式の高校発足や「観点別学習評価」の重視など教育における変化がめまぐるしいが、むしろ新しい困難や混乱が引き起こされており、本当の教育改革のためにはどうやっていったら良いか、その展望が求められている。

おりから一九八九年に国連で採択された「子どもの権利に関する条約」への世論の関心が高まっており、教育に関してもこの条約の批推・施行に期待する声が強い。教職員の間でもこの条約の理念に賛同する声は強く、全日本教職員組合（全教）をはじめ多くの教職員組織も条約の批推促進のため活動してきた。

ところが、この条約に沿って「校則」の見直しや「体罰」・管理主義教育一掃への直接的積極的な動きが見られる学校は、残念ながらまだ点在するくらいでしかない。そして、教師の一部からは次のような声も出ている。

「子どもの権利を全面的に認めると生徒を放任に導いていっそう非行の方向に走らせる」「子どもの自由・権利の保障と言うけれど、いまの子どもには権利を行使する能力が育っていない」「生徒たちは受験競争に追われており市民的権利の行使どころではない」「教師自身の権利が保障されていない現状では、子どもの権利保障どころではない」「いまでも教師は多忙で四苦八苦している。子どもの権利を拡大してこれ以上問題を抱えるのはかなわない」。

このような状況のなかで、私たちは次のように考える。

従来、多くの教師が、憲法・教育基本法の理念に沿って、一人ひとりの生徒を大切にし、学力を回復・保障し、生徒の自主活動と自治を育てることを追求してきた。いま、その努力を引き継ぎ発展させるためにこそ、学校において子どもの権利条約の定める子どもの権利を実現してゆくことが必要なのである。

いまなにより子どものために必要なことは、子ども自身の意見表明や権利の行使・決定、これに関する親の指示・指導と参加を学校に取り入れ、従来言われていた「子どもは学校の主人公である」という考え方を、さらに一歩前進させることである。このことは、学校における子どもの生活を伸びやかなものにし、子どもの観点を汲み入れて教師の教育実践をさらに豊かなものにすることになる。

このことによって、学校において子ども（生徒）・親と教職員の信頼関係を回復・発展させることができる。今日の学校が抱えている諸困難、すなわち、生徒の問題行動や発達の歪み、選別的受験競争、管理主義、教師の多忙化とそのもとにある教育条件・労働条件の劣悪さなどは、教師だけの問題ではなく、誰よりも生徒と親の問題である。これらの問題は、生徒集団・親集団と教師集団との相互の信頼に基づく協力と共同によって解決してゆかなければならない。

憲法・教育基本法の理念を現在において発展的に実現してゆく本当の教育改革は、学校に基礎をおいて成立するこのような互いの権利を認めあった子ども・青年、親、教職員その他の人びとの協力・共同の取り組みの全国的地域的な連合によって可能になってゆくと考えられる。

いま必要なことは、このような考えに立って、子どもの権利を実現する学校づくりへの大きな流れを学校の内部、学校教師集団の内部からつくり出すことである。

その原動力は、全国各地において取り組まれてきた学校づくりの諸実践のなかに現存する。

本書の第一部に著した学校づくりの諸実践は、この課題に応えようとする学校づくりである。これらのなかには、自由に向かって育ちつつある生徒の姿、子どもの権利の保障に向かって努力している学校教師の熱意や創意工夫が数多く表されている。教師の号令に指示されるのでなく生徒が自治的に運営する体育祭や臨海学舎、修学旅行、学校生活を改善し要求を発展的に実現してゆく生徒会活動、生徒が自分たちで高校や職業を調べ交流しあう進路学習、生徒が自主的に取り組みだした集団学習、等々がそれである。

私たちはこのような学校づくりから、「子どもの権利に基づく学校づくり」、すなわち、学校における子どもの市民的自由、管理運営への生徒参加・親参加が保障され、権利や参加と結びついた学習の保障される学校づくりへと進んでゆきたい。同時に、目指す学校の姿は、真理・民主主義・平和・勤労・健康を価値とする学校、学ぶ喜びと文化にあふれた学校、人権と自治と自立と協同を目指す学校、地域社会や産業社会と結びついた発展性を備えた学校……等々と、実践の進展とともに豊かにしてゆきたい。けれども、その際、生徒のための教師の働きかけが生徒によって生徒のものとして実を結ぶためには、学校における子どもの権利の保障が不可欠になっているのである。

しかし、率直に言って、本書のいずれの学校においても、子ども（生徒）の市民的自由を全面的に実現するのは、まだまだ今後の課題である。たとえば、「中学校の制服を廃止せよ」との批判があり、これは受け入れて実現してゆかねばならないと考える。だが、生徒に必要な学習と活動全体の改善改革の試みのなかに適切に位置づけて、学校を大混乱や無秩序に陥れることなくそうしてゆく道を探しているのである。

本書の第二部では、第一章で、「教育改革」と言われるいまの時代における、子どもの権利に基づく学校づく

りの上述のような意義とそれに取り組む私たちの基本的な立場を論述した。つぎに、第二章では学校づくりの実践と研究が今後やや長期的に関わってゆくと思われるいくつかの重要問題について述べ、第三章では学校づくりの当面の諸課題について述べた。

本書は、大阪教職員組合（大教組）が設立した大阪教育文化センターの教育研究委員会学校づくり部会参加者による共著である。執筆は言うまでもなく各個人の責任によっているが、部会での交流・検討・研究を経て発表するものである。これについては、実践と研究を支えて下さった多くの教職員や教職員組合、教育文化センターの関係者の方々に負うところが大きい。記して感謝の意を表する。また、快く出版を引き受けて下さった湯浅俊彦かもがわ出版編集長および編集の労をとって下さった矢田智子氏に感謝申し上げる。

最後に、私たちは、学校づくりの経験を問題点や課題も含めて全国各地の多くの教師と交流し共有し、互いの実践をさらに豊かなものにしてゆきたい。また、教育に関わり、あるいは関心をよせるその他の人びとの批判と助言も得たい。私たちは、このような願いを込めて本書を著した。読者のご批判とご教示を心からお願いする。

一九九四年三月七日

執筆者一同を代表して

北川　邦一

目次＊いま中学校で自由と自治を育てる

はじめに

第Ⅰ部　自由と自治を育てる

第一章　「決定権」を生徒の手に――高槻市立第一中学校　山本　武志　……15

1　信頼関係を築こう　16

「こんな学校早くかわりたい！」／生徒に「決定権」を／「ぼくらの行事は、ぼくらがつくる」

2　凄まじい「荒れ」に潜むものは？　23

落ち着いた時期の落とし穴／「ぶっ殺してやる！　土下座してあやまれ！」／「なぜ？　なぜ？　どうしたらいいんだ……？」／「やっとわかった！　大きな原因」／じっくり話し込む／保護者もがんばる／生徒の手による学習会

3　学校は楽しい！　37

靴の色の自由化／要求実現活動／新たな困難に抗して

4　二度の「荒れ」克服で見えたもの　48

学校再建の鍵は？／ふたつの管理主義／おわりに

第二章　ホップ・ステップ・ジャンプの自主活動――松原市立松原中学校　津本 芳光 ……53
1 急速な地域変化のなかで　53
「荒れ」と「揺れ」のなかで／三つの小学校からの入学／制服がなくて入学式を欠席
2 「自分たちの修学旅行なんだ」――三年間を見通した集団づくり　57
何を大切にして、どんな集団を育てるか／ホップ　リーダーを育てる／ステップ　保護者説明会も生徒の手で／ジャンプ　「涙が出るほど笑ったよ」
3 「分析→方針化→行動→総括」　73
アメ・ガム追放／いじめ追放宣言／学年を越えて取り組む体育大会・文化祭／生徒を主人公に

第三章　心のバーの向こうには――堺市立津久野中学校　武 慎太郎 ……81
1 管理主義の破綻　81
行き詰まった指導／自分さえよければ／流れを変えよう
2 「なかま」と「めあて」　85
「ひとりでは何もでけへんねんで」／おやつ闘争／涙と太鼓の応援合戦／新時代にエールを
3 自分の手で扉を開く　94
真夏の高校訪問／小学校へ出張ガイダンス／進路だより『心のバーの向こうには…』／なぜ学ぶのか／最後の「授業」／おわりに――「日の丸」「君が代」のこと

第四章　どうでもいい子はひとりもいない――東大阪市立玉川中学校　松井 登 ……109
1 熱意だけでは救えない　109
「低学力」「いじめ」「生活の乱れ」／「荒れ」の裾野は広がった／「体罰や管理主義はダメ」とは誰でも言えるが……／卒業生たちの背中が語るもの
2 新たな決意　115
「荒れ」は引き継がれていた／信頼しあう関係づくり／規律ある学校生活／館内放送のない臨海
3 認めあい、支えあいながら歩む　122
「みんな大事な人間だ」／叱るだけではタバコはなくならない／『道しるべ』／学力を保障する／父母は教育のパートナー／親の会／おわりに――さらに深い信頼を

第五章　子どもに〝信頼〟と〝希望〟を――吹田市立北山田小学校　志村　誠……141
1「体力づくり」は心づくり、体づくり　141
「体力づくり研究学校」
2 心も体もいきいきと――学級の実践から　144
生活リズムを自分でつくる／にぎやかな校庭
3 しっかり取り組んだから優しくなれる　152
リレー大会／「失敗したのにみんな優しかってん」／おわりに――将来への希望を
教育観再考　東村　元嗣……160
生徒と呼吸を合わす／私語は欲求不満のあらわれ／信頼関係を築く／生徒の「やる気」を考える
第II部　「教育改革」の時代の学校づくり　北川　邦一……169
第一章　子どもの権利に基づく学校づくり……171

1 学校教育の現状と改革の課題　171
（一）憲法・教育基本法のもとでの学校教育の成果と課題／（二）今日の学校における学習と教育の問題点
2 学校づくり　176
（一）学校の教育力の改善／（二）現代日本の「学校づくり」／（三）学校づくりの理論と実践
3 子どもの権利条約と学校づくり　182
（一）子どもの権利条約と教育改革／（二）子どもの権利に基づく学校づくり／（三）主体的学習の指導援助への授業の転換
4 子どもの権利に基づく学校づくりの意義　188
第二章　臨教審・中教審「教育改革」下の学校の諸問題……191
1 選別主義、競争主義の教育　191
（一）受験競争の過熱、偏差値偏重／（二）評価の多元化、「新しい学力観」／（三）業者テスト追放、高校選抜制度の多様化／（四）臨教審・中教審等による「改革」の問題点と真の改革の課題
2 学習と教育の諸問題　199
（一）新学力観・新学習指導要領等の問題点／（二）教育条件の抜本的改善の必要

3　国家機関による子どもの権利制限　202
（一）子どもの権利制限を正当化する政府見解／（二）最高裁による人権制限・子どもの権利制限
4　学校の荒れと管理主義　206
（一）生徒の問題行動・学校の荒れ／（二）生徒の家庭的問題／（三）管理主義
第三章　生徒の自由と自治を育てる学校づくり――その当面の諸課題……213
1　学習指導と学力保障　215
2　生徒の自主活動と自治の保障と指導　222
（一）生徒の自主活動の指導／（二）生徒の人権の保障と人権意識の育成／（三）子どもの最善の利益・意見表明の尊重、権利の承認／（四）生徒会の自治の保障・指導
3　進路指導・進路学習　230
4　学校の管理運営の民主化と教職員集団づくり　232
中学校に信頼を――出版に寄せて　237

第Ⅰ部

自由と自治を育てる

第一章「決定権」を生徒の手に

——高槻市立第一中学校——

山本 武志（やまもと・たけし）

八〇年代前半に起きた学校の「荒れ」は、青年教師たちを中心に生徒に「自治決定権」を保障して克服した。カバンの色の自由化、生徒の自主運営による二日連続の体育祭……。しかし、八七年、凄まじい対教師暴力が激発した。生徒指導のどこに問題があったのだろうか？

高槻市は、大阪市と京都市のほぼ中間に位置し、両市のベッドタウンとして人口が急増している。一九七〇年には中学校は市立六校、私立一校であったが、七〇年代・八〇年代と人口増加がつづき、八〇年代後半には市の人口が四十万人弱となり、現在では市内の中学校は市立中学が一九校、私立中学が二校を数えるにいたっている。

高槻市立第一中学校（以下「一中」）は市の中心地にあり、市内で最も古い中学で、八〇年代後半は生徒数約八百五十人、二〇学級の中規模校であった（現在は、生徒数、クラス数共に減ってきている）。

JRや阪急電鉄の高槻駅に近く、校区内には繁華街や大型店舗、コンビニエンス・ストアなどを多く抱えてい

る。また、新興住宅地・アパート・文化住宅と古くからの屋敷（旧家）が混在し、階層分化が進みつつある地域である。

一中では、一九八一年から一九九〇年までの一〇年の間に、非常に困難な状況（大きく荒れた状態）を二度にわたって経験した。

1　信頼関係を築こう

「こんな学校早くかわりたい！」

一九八一年から八四年までの四年間は、一回目の非常に困難な時期であった。多くの学校で「非行のデパート」という言葉が使われたりするが、本校もその例外ではなかった。

バイクで死亡事故が起こったり、タバコの吸いがらが毎日四百本以上発見されたり、シンナーの吸引も吹き荒れ、授業のエスケープや飲酒、不純異性交遊など、殺人以外はなんでも起こると言われたほどであった。

テスト中に監督の教師を無視して大騒ぎをするクラス、午後の学活が始まって教室へ行くと三分の二以上の生徒が教室にいないクラス、教室の後方にある黒板にあいた穴から煙が出てきたクラス、天井から椅子がぶら下がっているクラスなど、とても学校という体裁をなさない状態であった。このような状態に対して教師の指導は後追いで、しかも丸投げまかせのバラバラな状態であった。

多くの教師は、転勤を心待ちにし、転勤希望が増大した。その結果、教員構成は新任の若い教師が三分の二以上を占め、ほとんどが「転勤待ちの経験教師」と「経験のない新任教師」とになっていた。もちろん、奮闘している教師もいたが、「生徒を集団として見る」視点がなく、個人プレー的で、力のある文字どおり体罰的な教師の指導だけが通るという状態であった。

この背景には、当時の高槻市教職員組合執行部の方針による「反主任制」闘争における「主任の受け皿廃止」論によって引き起こされた①教職員集団の分解・崩壊状態、②悪しき分業主義による教師間における無責任体制、これらによって一貫した生徒指導体制が事実上機能しないということがあった。

当時一中には、二十人近い青年教職員が在職していた。そのなかでも、「転勤したい」という声がたくさん出ていたが、「転勤する前になんでも言おう」「言うだけいって、どうしようもないのなら出ていこう」といった声が出て、青年教師たちの学習会が何度も開かれた。

学習会を重ねるうちに、ただ愚痴を言うだけでなく、一人ひとりが学校の状況を分析したり研究会での成果を発表したりするようになり、「一中をなんとかしよう、そのために青年部が団結してがんばろう」という機運が盛り上がった。何回かの合宿も行った。青年部の合宿で問題になったのは、荒れた状態の立て直しの基本的な視点、学校体制の問題、生徒をどう見るか、などであった。各地の先進的な実践や非行克服についての文献を学習し、多くの青年教職員を中心として、学校改革の原案がつくられた。そして、一九八四年の冬、学校立て直しのための校内研究会がもたれるにいたった。

この校内研究会では、次の三つの確認をすることができた。

①校務分掌の見直しを図って、各教師・学年担任団・係のつながりを強化し、指導体制を強化・確立する。

②生徒会を活発にしていく。

③自主的な研修を積み重ねて教師の力量アップを図る。

1993年の時間割

	月	火	水	木	金	土
1	○	○	○	○	○	○
2	○	○	○	○	○	○
3	○	○	○	○	○	○
4	○	○	○	○	○	＊5
5	＊1	○	○	○	○	
6		○		＊3	＊4	

1986年当時の時間割

	月	火	水	木	金	土
1	○	○	○	○	○	○
2	○	○	○	○	○	○
3	○	○	○	○	○	○
4	○	○	○	○	○	＊5
5	＊1	○	＊3	○	○	
6	＊2	○			＊4	

○　……教科の授業
＊1……道徳
＊2……必修クラブ・班活動
＊3……特別活動
＊4……生徒会専門委員会
＊5……班長会

生徒に「決定権」を

一九五八年の指導要領改定以来、全国的に見ても、ほとんどの行事が教師主導に切り替わってしまい、生徒会主催の委員会活動も少なくなり、開店休業になってしまった。しかも、六九年の改定で「必修クラブ」、七七年改定で「ゆとりの時間」が導入され、教科外活動での生徒の自主的な活動の場がほとんどなくなった。

このようななかで生徒の自治活動はズタズタにされてしまっていた。そこで一中では、前記三つの確認事項のなかでとくに生徒会を活発にしていくことを中心にし、生徒の自治活動を全部一元化する方向にもっていった。つまり「必修クラブ」や「ゆとりの時間」を、すべて生徒会の時間にもち込んだのである。具体的には上の表のように、金曜日の六時間目を生徒会専門委員会の時間、月曜日の六時間目に必修クラブ班活動、土曜日の四時間目に班長会という具合に、教科外の時間を集団づくりの時間に改正していった。これらの変更については、管理職を中心として疑問視する声もあったが、青年教師たちの学習会を通して理解が広がり、教職員組合の分会交渉

や職員会議の場で確認していくことができた。

そして一九八五年度生徒会方針の決定により、学校行事の大部分と委員会活動を生徒の自治活動に引き戻すことができた。

一九八五年度生徒会指導方針

生徒の自治能力を高めることを根本目標に、①生徒総会の開催、②行事を生徒の手で、③規則の見直し、④各専門委員会の週一回定期開催、⑤班づくりの推進

同時に、生徒自身に自治の力を高める場面を保障することでも検討を行った。その結果、自治活動の五つの段階、すなわち原案、討論、決定、実行、総括のなかで、私たち教師側が生徒たちに活動させるときにやらせてこなかったこと、それが「決定」だ、ということがわかった。生徒に決定させると大変なことになるという心配もあって、一中では生徒総会が一五年間一度も開かれていなかった。しかし、本当に生徒の自治を育てるのであれば、勇気を持って生徒総会を開催して、生徒に「決定権」を保障しなければならない。生徒総会の開催については、職員会議でも論議になったが、ていねいな指導を通して開催することに決定した。

規則も生徒の手に戻そうと、規則改正の取り組みにも着手した。生徒たちはうまくやっていけば規則が変えられると、問題生徒（ツッパリの生徒）が大挙して生活改善委員会（他校では風紀委員会）に入ってきた。なんでもかんでも無茶苦茶に変えて、好き放題にしようと考えていたが、規則についての市内全校の生徒手帳を集めて調査したりするなかで生徒たちの意識も変わってきた。最初は無謀な形での全面改正を考えていたのだが、「何のために規則があるのか」と話しあいをしていくなかで、現実的に規則をどう変えようかという提案に変わって

1992年９月、体育祭でのクラス全員による大縄跳び。

いった。

こうして、この年（八五年度）の規則改正では、自分たちの手で規則違反ゼロを達成して規則を変えようと取り組み、最終的にはカバンの色は自由という、カバンの改正（規則改正）をやり遂げることができた。

「ぼくらの行事は、ぼくらがつくる」

さきの職員会議の論議のなかでも、行事も生徒の手に返そうと、いままで学校行事としていたものを生徒会行事にすることを確認しあっており、生徒総会開催や規則改正と共に、いろいろな行事もどんどん見直されていった。

とくに体育祭は、それまでツッパリグループの応援合戦が中心で、体育祭の時期を境に生徒の間で学年を越えて、力のピラミッドが確立されていく状態であった。それまでの数年間は、教師側で応援合戦の中止を職員会議で決定しても、生徒議会にツッパリグループが乱入し、職員会議決定を無視して応援合戦を強行するなどのことが起こっていた。

しかしこの年は、生徒会で生徒に「どんな体育祭にしたいか」という要求を出させながら、体育祭の意義や誰のための体育祭か、他校とは一味違う体育祭はどのようなものかなどを話しあった。議論のなかでは、新しい種目や、応援中心にするか競技中心にするかなどを考えた。これらの話しあいの結果、「体育祭は生徒みんなのもの、競技中心」となり、生徒会は、さまざまな新しい種目（たとえば、クラス全員による大縄跳び、クラス全員の大ムカデ競争など）を提案し、さらにこれらの新しい種目を行うために二部制の体育祭（二日間で体育祭を行う）を提案したのであった。

それについては、職員の間でも非常に大きな議論となった。「一日でも大変なのに、二日もできるのか？」という意見が多かったが、「生徒の前向きな部分を受けて立とう」と切り替えることができた。当然のことながら、生徒たちにとっては、自分たちがつくった体育祭だという意識が高まり、練習から予行、当日の進行まで、すべて生徒たちだけでやり切ることができた。たとえば、それまで体育の先生が行っていた生徒の指揮を、この年は生徒会長が全部行った。それ以降、九一年までこのような二部制（二日制）の体育祭をつづけることができた（現在は、学校週五日制の影響で、体育祭は一日になってしまった）。

そのほか文化祭や三年生を送る会、駅伝大会、球技大会、水泳大会などすべて生徒に任せていくなかで、生徒たちは大きく変化し、全校的な困難な状態（「荒れ」の状態）は、収まっていったのである。

その当時の生徒たちの声を紹介しよう。

「一五年間も開かれなかった生徒総会が開かれるということは、やっと先生たちとの信頼関係ができるようになったのだなあと思っています」。

「いろんな行事を生徒のものにしていこうという執行部の人たちの気持ちがよくわかる」。

「生徒の力を先生たちに見せていきたい」。

生活改善委員長の生徒は、その前年度までチェーンを体にまいて学校に来ていたのだが、彼が学年末の集会のときに、次のように発言した。

「カバンの色の自由というのは、先生と生徒が本当に信頼しあっている象徴なのだと思う。いま、先生たちは十分僕たちを信頼し、期待してくれているのです。だから何とかやり切ろう」。

そして彼は提案のなかでも

「いままでの規則は先生の手によってつくり上げてきたものです。他の学校では規則をどんどん厳しくしていくところもありますが、そうなっていくほど生徒と先生が信頼しあっていないということです。私たちはそうなりたくありません。規則見直しをしていくなかで、規則違反ゼロを自分たちの力で実現して、先生と生徒の信頼関係を固めて自分たちの学校をつくっていこう」。

と呼びかけたのだった。

このような取り組みの結果、八五年度は生徒の自治能力を高め、生徒会活動を活性化することで、学校の立て直しに成功した。この立て直しの原動力になった三年生が卒業し、新たに一年生を迎えて、八六年度がスタートしたのである。

現在では八〇年代前半の取り組みを経験した教師はほとんど残っていないが、八〇年代前半の取り組みについては語り継がれ、その精神はいまも受け継がれている。この間のくわしい記述については、当時在籍していた多くの先生方からご協力をいただいた。

2　凄まじい「荒れ」に潜むものは？

八五年の改革は、全教師が一致して取り組んだ生徒会活動の活性化、生徒の自主活動・自治活動による学校改革であった。「荒れ」も収まり学校も落ち着き、結果が見えてきたこともあって教師集団も生徒の自主活動・自治活動の重視という一致点で団結できていた。もちろん異論も多くあったが、いがみあいや大きな論争にはならなかった。一部の教師から、毎年のように「生徒総会のための討論で、部落問題等の特設学活の時間がたりない」「行事が多すぎて、部落問題や障害児、在日朝鮮人問題の特設学活が十分にできない」という声は出ていたが、全体のものにはならなかった（実際は、それぞれの特設学活の時間は保障されていた）。

組合の分会と親睦会（一中では職員クラブという）主催で、定期テストのときには「ソフトボール大会」「バレーボール大会」「バドミントン大会」「写生講習とスケッチ大会」なども行っていた。これらの行事を行うなかで、お互いの主張をごり押ししあうこともなく、組合活動でも役員選挙のときには論議があったものの、普段は大きな論争もなく、分会活動の大半は親睦を伴うものであった。

落ち着いた時期の落とし穴

一九八六年に入学してきた一年生は、小学校時代から多くの問題行動を繰り返しており、とくにひとつの小学校では、教師をノイローゼにしてしまったり、六年生の時に授業を集団でボイコットしたり、暴力事件が多発したりという状態であった。一方、前年度の学校改革の中心的な教師の多くが転出し、あとでも述べるようにこの学年の学級担任の半数が転任教師で、前年度の改革の本意を受け継ぐことが難しい状況であった。

しかしながら学校全体としては、前年度からの継続として、生徒会活動の充実や自治活動の重視をはじめ、前年度総括を踏まえた全校集団づくりの基礎としての「全校一斉班づくり」や、班づくり・班活動の活性化のために「必修クラブ班長会」が提案承認されていた。

「必修クラブ」や「ゆとりの時間」について、ここにいたるまでには管理職の執拗な反対があった。管理職は常に「きちんとクラブ活動（必修クラブ）を全校的に実施せよ。していないのは一中だけだ」などとクレームをつけた。しかし生徒会活動の前進が目に見え、学校の状況も落ち着きだしていること、また各担任の要求、指導要領の「必修クラブ」の運用についての研究、これらをもとに職員会議での討論の結果、管理職もほとんど反論できずに承認された。

学校は、一見した状態では落ち着いていた。数々の行事も生徒主体で行えたし、生徒総会に向けての論議の時間も保障されていた。

ところで当時から、市教育委員会の方針もあって、市内の人事交流がさかんに言われ、この年も先に述べたとおり、七人の転勤教師が一中に着任した。当時の各学年の担任は次のとおりであった。

一年（八クラス）…転任者四名（うち一名は小学校から）
二年（八クラス）…転任者三名、教職二年目が一名

三年（八クラス）…転任二年目が三人、教職二年目が一名

このように担任陣に新転任が非常に多いなかで、職員会議や校内研究会、各学年の学年会議で、生徒会活動方針や全校一斉班づくり・班長会指導・朝学習や昼食指導などについて統一的な推進を図った。

一方、体罰を多用する教師やその他さまざまな問題も出てきていた（たとえば、放課後の清掃のときに箒でふざけていて蛍光灯を割った生徒を数発殴りつけた教師や、学活の時間にほとんど教室に行かず、学級委員や班長を使ったリモコン指導をしていた教師もいた）。もちろんほとんどの生徒たちは、そのようななかでもがんばっていたが、殴られたり、執拗に責めたてられた生徒をはじめとして教師に対する不信感を増幅させていった生徒たちも少なからずいたのである。しかしながら、表面的には落ち着いており、また多くの転任教師や新任教師の着任というなかで、そのことは表面に出ないままに終わっていたのである。

こうして一学期も終わりに近づいた頃、卒業生の発言をもとにした「差別事件」がでっち上げられた。それは、〝卒業生の集い〟での本校卒業生の発言を捕らえたものであった。その卒業生の三年生時の担当教師による事実確認により、この発言が差別でも何でもないことがわかり、夏休み中の職員会議で何度も論議がされ、多くの教師は「差別ではない」との認識で一致できた。しかし、一部の教師は「差別事件」化することに固執し、一学期末から二学期始めの職員会議では、大きな論議になったのである。結局、全校一致して「差別事件」とすることはできず、管理職と係の段階で処理することになった。

だが、このことが原因となって、それまでまがりなりにも存在していた教職員間の実践上の一致に亀裂を生むことになってしまった。

「ぶっ殺してやる！　土下座してあやまれ！」

一九八六年と八七年当初は、ごく普通の学校であり、いくつかの小さな問題行動はあったが、大きな問題はなく推移した。しかし……。

一九八七年六月一七日（水曜日）、昼休みが終わり五時間目の開始のチャイムが鳴ったあとで廊下にいた二年生の男子生徒に対し、ひとりの男性教師が「チャイムが鳴ったから教室に入れ！」と注意した。すると、その生徒が突然逆上し、教師の胸ぐらをつかみ廊下の壁に押しつけ、「ぶっ殺してやる！」「なんやその言い方は！」「土下座して謝れ！」と暴言を吐き殴りかかってきた。数人の教師で生徒を何とか取り押さえ、別室へ入れて対応したが興奮は収まらず、部屋中の椅子や机を投げ飛ばし、涙を流しながら「ぶっ殺してやる！」「土下座して謝れ！」を繰り返した。そして、ついにその教師が膝をついてしまった。

この事件を境に、二、三年生のツッパリグループ（二十名以上）が、「やった！　教師を全部土下座させてやれ！」とばかりに「ぶっ殺してやる！」「土下座して謝れ！」とわめきながら、教師を個々に狙い撃ちしてきた。理由など何でもよかった。教師から注意を受ければ、それが引き金になる。ニコニコとしながら注意をした教師に対して「笑いながらいうな！」と突っかかってきた生徒もいた。また、「おまえ、〇〇（生徒）の担任やろ！」といって土下座を迫ったりしてきた。幸いなことに、土下座した教師は後にも先にも最初のひとりだけだった。

七月に入ると、これら二十人以上の生徒がそれぞれ他クラスの授業に入り込んで妨害を繰り返すようになり、教師に椅子を投げたり殴れたりした。女性教師が足や頭に怪我をしたり眼鏡を割られたり、とにかく身の危険を感じる毎日が始まった。

八七年の一学期は、このように突然起こった激しい対教師暴力中心の大きな「荒れ」の前に、ほとんど後追い的な指導、個々の教師による個別指導のみで終わってしまった。

このままでは、どうにもならない……。多くの教師がそんな思いをもって夏休みに入った。

「なぜ？　なぜ？　どうしたらいいんだ……？」

日々の教育実践や生活指導、教科の指導に追われているときにはできないことでも、長期休みのときはできることがある。八七年の夏休みは、その意味で重要な夏休みであった。

また、幸運なことに当時の一中には、八五年改革の中心を担った教師も少ないながら在職していた。この状態をなんとかしようと有志の教師が集まり、何度かの学習会や合宿をもった。中心となったのは、八五年改革の中心を担ったメンバーであった。八五年改革を経験していない教師はそこから学習を始め、生徒の自治活動・自主活動についての共通認識を持ったうえで、いま（八七年当時）の状況について考えた。

激しい教師不信についての原因は、この時点ではまだわからない状態であったが、ともかく身を守ることから始めようと次の五点の確認をし、夏の校内研究会・職員会議で論議検討することになった。

①教師と生徒の身の安全を保障しよう。

②とにかく教師が安全に授業できるようにしよう。

③生徒に五〇分授業を保障しよう。

④基本的には、八五年の生徒会活動を活性化しての学校立て直しの方向で進もう。

⑤父母・地域との協力を追求しよう。

その後、八月一七日に臨時の職員会議、八月末に校内研究会と何回かの会議のなかで、学校正常化への取り組みについて話しあっていった。

これらの話しあいのなかで次のような意見が出された。

「おれも〇〇（当時一番の問題生徒・二年生男子）が怖い。本気でやりあえば、彼を殺してしまう結果になるか、逆にこちらが殺されるかだ」。

「彼らと多数対ひとりで対応できるのか？　周りを取り囲まれて、身の危険だってある。現にそのようなことになった教師もいる」。

「いくら中学生とはいえ、相手が十人以上でかかってくれば、どうなるのか？　われわれの身の安全はどうなるのだ？」

以上のような意見が、当時最も力が強いと見られていた教師たちからも相次ぎ、全教師が真摯に考えることができた。そして、「子どもの可能性を信じて、自立を促し、自治を育てる」視点を持つ、という確認の下に前記五点を具体化する形でいくつかの確認をすることができたのであった。

▨八七年九月以降の取り組みでの確認点

・体罰否定…暴力を否定する。教師や生徒の身の安全を守るためには、不可欠のこと。

・五〇分授業の保障（全教師のベル立ち…チャイムが鳴ったら全教師がすぐ立って教室へ。廊下に出ている生徒を教室へ入れる）。

・空き時間教師による巡回・立ち番など（教師が安全に授業できるようにする。エスケープ生徒を授業に戻す。どうしてもだめなときは、じっくりと話し込む）。

・共感的態度で接するが、不正は見逃さず「悪いことは悪い」という毅然とした態度を失わない（指導が通

るかどうかは別にして、とにかく「悪い」と言い切り悪事を認めない）。

・家庭との連絡を密にする（家庭訪問の重視）。

・父母・ＰＴＡとの協力体制をつくる（臨時総会、学級・学年懇談会を通じて、本当の姿を知ってもらう。そして、協力体制、具体的に何ができるかを考える）。

・生徒指導について、月一回の定例会をもち、総括をしながら訂正を加える。

・荒れた状態のなかでも行事は縮小せず、前向きに取り組ませる努力をつづける。そして「表面上の行事の成功より、行事への取り組みを通して生徒の自治の力を育てる」ことに力点を置く。

・子どもの人格を尊重し、全人格を否定するような注意や見捨てるような言動をしない（他人の迷惑だからだめ、という視点ではなく「おまえのため、おまえ自身の人生を大切にしろ」という視点で迫る）。

・常に子どもを育てる視点に立ち、問題行動については、背景理解に努めるようにする。

これらに関して、一致をみるまで長い時間を要したが、真剣な討論と問題行動の深刻さが重なり決定することができた。

「やっとわかった！　大きな原因」

決めたことを実行するのは、決めたとき以上に個々の教師のがんばりが必要である。教師のベル立ち・巡回・立ち番、どれをとってみても難しいことが考えられた。そこで、九月の始業式で全生徒に向けて、はっきりと宣言した。

「五〇分授業を保障するため、先生たちは、チャイムが鳴ったらすぐに教室へ行きます。ほかの先生は、廊下

を巡回してみなさんが教室にはいるように注意します」。

また、チャイムが鳴ったとき、職員室では声かけ係（生徒指導主事の先生）がみんなを促して出発する。このようなことも行った。

巡回は、教師数人がグループをつくって行った。各グループには必ず一年から三年の教師が入り、「一中の生徒のことは、学年がちがっても全教職員で取り組み、すべての教師がすべての生徒のことを真剣に考えている」ということを生徒たちにわかってもらえるようにした。

当初、学年の異なる教師から注意を受けると、「うるさい。おまえら学年もちがうのになに言うてんねん！」などと言っていたツッパリも、日が過ぎるとそのようなことは言わなくなってきた。教師もひとりで、殴りかかろうとするような十数人の生徒を相手にすることには躊躇したが、最低五、六人で回っているとみんなで注意ができ、生徒のほうも注意に耳を傾けるようになっていった。

父母との協力体制については、ＰＴＡ常任委員会と臨時総会をもって、まず学校のようすを隠すことなく知ってもらった。

トイレや非常階段などは、毎日何十本ものタバコの吸いがらが発見され異様な匂いがしていたが、ここも保護者に見てもらった。さらに、学年の保護者会の場でも課題や対応策を話しあった。現状のあまりのひどさに驚いた保護者も多く、教師批判もいくつか出された。しかし保護者のなかには本校の卒業生も多く、また教師たちの「子どもの可能性を信じて、自立を促し、自治を育てる」ことについては、理解を示してくれる父母がほとんどであった。保護者から出された、「協力できることは何でもしますので、言ってください」という言葉は本当にありがたいものであった（実際、次の年には、さまざまな形の父母との協力体制がつくられた）。

このような取り組みは、それまでの「期待族（トラブルを期待していた層）」を着実に落ち着かせていった。

二、三年のツッパリグループは、問題行動を繰り返していたが、裾野はだんだん狭まってきていた。

裾野が狭くなると、個々の問題生徒との話し込みもしやすくなり、個別指導がわずかだができるようになってくる。問題生徒との話し込みや個別指導によって、凄まじい教師不信・対教師暴力の原因もつかめるようになった。話し込みや個別指導中に聞いた彼らの言葉は、非常に重いものがあった。

「先公は汚い。一年のときはさんざん殴っておいて、二年三年になって俺たちが強くなるとぜんぜん手も出さねえじゃないか」。

「おまえら一年のときどないしたんじゃ！　たかが蛍光灯一本割っただけで、一一発も殴りやがって！」

（殴られた生徒ではなく、それを見ていた生徒から発せられた）。

「一年の頃はガミガミ言うてたくせに、いまじゃ注意もようせえへんやないけ！」

「教師なんて信用でけへん！　一年のときと言うことがちがうやないけ！」

このような子どもたちとの話し込みのなかから、次のような問題点がわかってきたのであった。

・学校が荒れていないときの安易な体罰の横行
・生徒がわかっていようといまいとにかかわらず進められる授業
・いじめや争いがあってもそんなことは無視して進められる学級経営
・生徒の声に耳を傾けず、冷たく事務的に行われる指導

八六年から八七年は、八五年の学校立て直しの総括を経て、「全校一斉班づくり」「班長会指導（必修クラブ班長会）」などの統一的指導を推進した時期であった。しかし、学校が落ち着いてくると、それまでの指導目標を

考えず、民主的な班づくり・集団づくりを進めているような体裁を装いながら、次のような事態を生じさせていたのであった。

①体罰を加えて班活動を指導する。
②学級委員が学活の司会をしていてうまくいかないといってその生徒を追いつめる。
③自分はその場にいないで「リモコン指導」し、生徒たちだけで班会議等をさせる（会議の結果が担任の意にそぐわないときは、班長や委員を執拗に叱責していた）。
④班長会議を教師の下請け機関化する。
⑤何ごとにつけても無難に終わらせる、事務でも行うかのように形式的・機械的に冷たく行われていく教育活動。

こういった「冷たい事務的管理主義」が大きな問題点であることがわかってきたのである。それ以後、毎月の総括の会議では、「冷たい事務的管理主義」を廃して一人ひとりを大切にする、子どもの心に迫る指導を重視することの大切さが確認されていった。

生徒懇会や各専門委員会においても、前向きな意見が中心になるようになり、少しずつではあるが着実に回復の徴候が見えてきた。こうして、一九八七年度は終わりを迎えた。

じっくり話し込む

三年生は卒業していったものの、三年生と共に問題行動を繰り返していた二年生は、一九八八年四月、三年生

になった。問題生徒の数が多すぎてクラス分けに苦慮したが、四月八日の始業式を迎えた。

この年も、三年生を中心に荒れたスタートであった。クラス分けが気にいらないといって、クラス発表の紙をビリビリに破ったり、班長会をしているクラスに入り込んで椅子や机を担任教師に向かって投げつけたり、体育館での土足を注意した教師に殴りかかったり……。しかし、教師集団は、前年度の確認（八八年度の確認でもあった。）とおり、一致した取り組みを行っていった。

そして、生徒の自治の指導を徹底的に強めていった。体育祭、文化祭をはじめ行事も縮小しない方針を貫き、生徒たち自身に運営させ、多様な要求活動にも取り組んだ。

校内研究会や職員会議では、前年度同様、体罰をやめることと冷たい（事務的）管理主義を廃して、一人ひとりの生徒（個）を大切にしよう、という基本を確認しつつ、巡回や立ち番を従来の「教師の身の安全を保障する」ためのものから、「生徒とじっくり話し込む」巡回・立ち番に切り替えていった。

空き時間には、タバコの煙がいっぱいのトイレでたむろしている問題生徒といろいろと話し込んだ。大変しんどく、身の安全が保障されてくれれば「授業のほうがずっとまし」という教師がほとんどであった。しかし、三年生担当の教師のなかで一番年配の女性教師が「巡回するより、ずーと廊下でいたらどうかしら」と言い、自ら空き時間には廊下に机を出し、小テストの採点をしたり教材研究をするようになった。ほかの教師たちもこれにならった。生徒たちは、「先生が廊下にいる」と廊下も教室のような雰囲気となった。こうして生徒たちは「先生も何かやっているなあ」と感じるようになり、だんだんと話し込みも深まっていった。

保護者もがんばる

この年の三年生の学年会では、前年度を受けて父母との協力体制を積極的につくっていこうと確認し、各クラ

スがそれぞれ独自の取り組みを始めた。

あるクラスの担任は、一中へ転勤してすぐにこの三年生の担任をもったので、始業式後の一週間で全員の家庭訪問を行った。さらに、五月の家庭訪問期間と夏休み、一年に三回のクラス全員の家庭訪問をやり遂げたのであった。彼は、その後も父母との協力関係を家庭訪問を軸につくり上げていった。

また、あるクラスでは二学期に入ってから「クラスや学校の状況を知りたい」という父母の願いと「知ってほしい」という担任の願いが合致して、「二週間連続、フルタイム授業参観」を行った。毎日、一限目から六限目まで、二週間連続の授業参観であった。教師も大変だが、父母たちにとっても大変な取り組みであった。この取り組みを通して協力体制がつくられ、父母たちが自主的に当番を決めてグループをつくって参観した。しかも、自分の子どものクラスだけでなく、学年全体のことも見てくれた。他クラスを参観するときは、教室には入らず、廊下でようすを見てくれたのである。また同時に、父母たちは教師たちが空き時間に巡回したり、廊下・トイレで生徒と話し込んでいる場面を目の当りにした。こうしてこの取り組みは、お互いの信頼をつくるうえで大きな役割を果たしたのである。

このような多様な取り組みは、各担任の個性に応じてさまざまな形で追求された。クラスによって取り組みの形態はちがったが、誰もがそれを非難することなく、学年会議で交流しあうことができた。

生徒の手による学習会

九月の体育祭と一〇月の文化祭が終わると大きな行事もなくなり、三年生にとっては、自らの進路を考える時期になる。この時期、ややもすると一人ひとりがバラバラになり、進路問題についてもひとりで悩んだり、不安になったりすることが多い。

「せっかくさまざまな行事への取り組みで得たクラスの団結の力を無駄にしたくない」「せっかくみんながまとまれたのにバラバラになりたくない」。このような気持ちから、三年三組では班長会でクラス学習会について、文化祭終了後からずっと検討されてきた。だが二者懇談会（保護者と教師）・三者懇談会（生徒とその保護者、教師）、中間・期末テストなどのため、結局二学期中には本格的に取り組めずに終わってしまっていた。しかし、二学期の最後の班長会で、「文化祭・体育祭の教訓を生かし、クラスの連帯と協力で一人ひとりの進路を切り開こう」ということが確認され、具体的なクラス学習会へ向けての準備ができ、三学期からスタートできる体制が整ったのである。

学習会は日々の行事に左右されない早朝に行うことを決定し、具体的には次のようにした。

①班長会が中心となって、朝八時に登校し、四〇分間の助けあい学習（プリント）をする。

②八時登校の確認・点検は班長が行う。

③各班で曜日ごとに分担して責任を持つ。

また、クラス学習会の目標は、次の二点に設定した。

①クラス全員が八時に登校してクラス学習会に参加するようになる。

②この取り組みを通じて、クラスの団結をさらに強め、それぞれの進路希望の実現に向け、クラスの雰囲気を自覚的に気迫をもって真剣にかつ暖かく学習に取り組んでゆけるものにしていく。

班長会が中心となって、冬休み中に掲示物をつくり教室に張って雰囲気を盛り上げた。そして、三学期の当初から本格的にクラス学習会がスタートした。

一月半ばからは私立高校の入試も近づいてくるので、「学習を夜型から朝型に切り替える」こともこの学習会を通じて行うようになった。

曜日ごとで教科を決め、各班の生徒たちで責任を持って係を決め、教科担当の先生にプリントをお願いする。朝の四〇分でプリントを仕上げ、自分で答え合わせをする。わからないところは友だち同士で教えあう。このようなことがごく自然にできるようになっていった。一月の中頃には、このクラスでは八時登校の生徒が三十人以上にもなり、他のクラスの生徒も混じるようになってきた。

学年学級委員会でもこの「クラス学習会」のことが話題になり、このような肩に力の入らない自然な取り組みは、他のクラスにも広まる気配を見せはじめた。

先生、知ってますか？　三組では毎朝勉強会をしているそうです。朝八時に来て、プリントをやっています。なぜ一組ではしないんですか？　〇〇君（一組の生徒）なんかこの勉強会に来てるんですよ。

これは、クラス学習会を見た他クラスの生徒が班ノートに書いたものである。このような雰囲気は、三組以外のクラスで、どんどん広がっていった。そして学級委員会で、三組の取り組みを紹介し、三年生の各クラスとも「クラス学習会」をするようになったのである。そして二月に入ると、それまで突っ張り通してきた生徒たちも、クラス学習会に参加してくるようになった。

クラス学習会をすることになって、最初の日、正直言って何人きてくれるか不安だった。ぼくは班長だから、早く来たけど八時にくるのが班長会だけ（八人）だったらどうしようかと思ったけど、教室に入ってみるとたくさんいたのでびっくりした。少し遅れてくるやつもいたので、最終的にはかなりの数になったと思う。これからずっとつづけられたらいいなあとおもいます。

あとから学習会をすることになったクラスの生徒の声である。

二月中旬、私立高校の入試が終わり、この学習会に参加する私立高校専願の生徒が少し減ってきた。しかし、友だちが参加しているので自分も参加するという人が多くいて、最終的には参加者があまり減らなかったのは、大変すばらしいことであった。

「これをいつまでつづけるのか？」については、クラスによって状況はさまざまだった。卒業式や公立高校の入試が迫り、一人ひとりの気持ちも落ち着かなくなってきた。しかし、「ひとりでやる勉強も大切だが、駅伝大会のように一人ひとりの力をひとつにして個人の力を伸ばし、クラス全員の団結と進路希望実現のためにみんなで取り組むのも必要」という班長会の声により、あるクラスでは結局卒業式前日（三月一三日）までこの「クラス学習会」をつづけることができた（大阪府の公立高校の入試は、三月一七日である）。

また、この取り組みは、「地元集中受験運動」のように特定の価値観を生徒に押しつけ、地元外の高校を受ける生徒を非難したりすることもなかった。したがって、みんなが胸を張って励ましあいながら学習できたので、ほとんどの生徒たちに支持されたと言える。

こうして八八年度は、二年間の大きな困難な時期を乗り越えて終わることができた。

3　学校は楽しい！

一九八九年度の三年生は、それまでの二年間に大きな「荒れ」を経験し、その克服の過程で、教職員や父母の

取り組みを見てきた学年であった。この学年が三年生になって、二度目の「荒れ」が収まったこの年、学校が落ち着いたことだけで終わらせず、「新たな伝統をめざして翔け一中生」というスローガンを掲げて、生徒会活動のさらなる前進と、生徒を民主的に育て自治の力を高めて前向きに育てることを目指していった。

その取り組みのひとつが、八九年度の「二度目の規則改正」であり、九〇年度の「要求実現活動」であった。

▨生徒会指導方針（一九八九年度、職員会議で承認された教師側の指導方針）［抜粋］

（1）指導目標

民主的な学校を創造する自治的集団を育てる。

（2）指導方針

①時間をかけても組織過程の筋道をきちんと踏みながら活動を組んでいくようにする。

②「行事をこなす」だけにならないように、行事への取り組みを学級づくり・班づくりと結びつけて進めていく。

③特活指導と連絡をとり、各学級の自治活動のうち「班長会」指導と「討論」指導にとくに力を入れて取り組むようにする。

④役員会、生徒議会、学年学級委員会、各専門委員会など各会議前に、教師は必ずリーダーへの指導を行い、よく準備して会議にのぞむようにする。

⑤三年生の正しい指導性が引き出せるような形で取り組みを進める。

⑥全校的な活動において、学級担任だけでなく全教師の指導配置と指導内容について担当者は指示し全教師で生徒会指導を進める具体的手だてを講じる。また、必要に応じて校内研修会をもつ。

（3）今年度の重点指導内容

①生徒会の基礎組織である学級における班づくり、学級づくりの全校的推進をはかる。…（略）…

②……相互批判、相互援助のできる学級づくりを目指す。

③④…（略）…

⑤行事への取り組みを充実したものとしていくため、内容の検討に力を入れる。そのためにも各委員会が定期的に開催されるように指導を進めていく。

⑥自主クラブ活動の民主化と活発化を図るため、クラブ問題委員会の定期開催を目指す。クラブ予算の配分についても、生徒自身の手で検討させていく。

⑦…（略）…

⑧役員会、生徒議会、学年学級委員会、各専門委員会の定期開催をさらに定着させ、充実したものにしていくため、生徒会指導委員会をできるだけ開催していく。

（4）生徒会指導係運営方針

①生徒会指導委員会（教師の会議）

生徒会代表、学年生徒会、各専門委員会代表の計一五名で構成し、月一回をめどに必要に応じて開催し、生徒会指導方針の具体化と各専門委員会の活動交流と全校的調整を行い、統一した方針を持って生徒会指導を進めていく。

②生徒会係会議（教師の会議）

生徒会代表、学年生徒会で構成し、週一回定例で開催する。全校的な行事の取り組みの指導方針、総括の検討および週ごとの各学年の取り組みを調整し、毎週の具体的な方針の検討と取り組みを進める。

▨生徒会執行部議案書（一九八九年度）［生徒全員に配布、これをもとに討議する］

生徒総会

（1）生徒総会とは

全校生徒が出席し生徒会の最高のところで、生徒会のすべてをここで決めます。また出席した人の三分の二以上か、クラス代表の三分の二以上が賛成したことは決定となります。

（2）今年の生徒総会の意義

1．生徒総会が開けるということ

①私たち自身が私たちの要求を各クラスでまとめて私たち自身でそれを実現していくことのできる場である。またこのことは自分たちの学校をつくっていくことでもある。

②多くの学校ではこの生徒総会が開かれていない。それは学校の先生たちから本来なら生徒のものである生徒会をまだまだ任されきれていない状態だからである。一中では五年前にやっと開けるようになり、以後生徒会の自治の実現を目指している。そのためにもこの場を生徒にとって有意義に使えるようにしていかなければならない。

2．今年で五回目の生徒総会になる

①五年前に生徒総会を開くことが実現し、そのときには生徒たちの間でいろいろな行事をつくり出していくことが中心だった。そして生徒によるたくさんの行事をつくり出し実行することもできた。

②昨年からは一つひとつの行事そのものについての検討ではなくて、いままでにつくり出された行事をいかに充実させていくかを中心に検討している。

3．今年の生徒総会で規則改正に向けての今後の新たな取り組みの第一歩を築きたい。

①一年目の生徒総会で規則見直しの取り組みが大きく進み、規則の一部改正も実現できた。しかし去年は十分な取り組みを進めることができず何も実現できなかった。

②自分たちで改正した規則が十分に守られていない現在、このままでは何も改正できないまま進んでしまうので、今年には最低何かひとつでも改正できるような取り組みをし、今後の規則全体の見直しを進める第一歩を築きたい。

（3）各クラスでとくにしっかり討論してもらいたいところ

体育祭・文化祭を充実したものとしていくために各クラスで積極的な提案や修正案をよく検討して出して下さい。

・体育祭……種目や競技方法について

・文化祭……各学年の形式などについて

規則改正をしていくうえで必要なことは、いろいろな行事を生徒の手でやり切り、日々の生活においても生徒で決めたことを守りきることです。

そこで執行部としては次の五つの提案をします。

○五つの提案

1．生徒総会をみんなの積極的な討論で盛り上げ生徒の手で成功させていく。

2．体育祭・文化祭をはじめ、学校のいろいろな行事を生徒の手でやりきる。

3．ベル着・生徒集会の整列を自分たちでやる。

4．自分たちの生活態度を見直し改める。

5．全校美化運動で学校全体をきれいにする。

（4）生徒会の決定事項（決めること）

◎学校祭の方針の決定

◎クラブ予算の決定方法

◎規則改正に向けての方針

◎各委員会の方針の決定

発言用紙の書き方

○安易に決めないで下さい。クラスによってはすぐ多数決で決めてしまうところもありますが、多数決は活発に討論した結果、意見が出つくしたときにクラスの了解を得るためにして下さい（決定は六月一五日・木曜日頃にして下さい）。

○議案書に賛成でもしっかりとした理由を出して下さい（おもしろい、楽しいからはダメ）。

○反対の場合は理由と修正案を出して下さい。修正案がなければダメです。

生徒総会に向けての討論の日程

5月26日（金）第一回生徒議会（執行部から議案書提出）

6月1日（木）ＨＲ（議案書読みあわせ、質問に答える）

6月6日（火）ＨＲ（議案書を討論する）

6月8日（木）ＨＲ（議案書を討論する）

6月9日（金）第二回生徒議会（クラスの意見を集める）

6月12日（月）ＨＲ（各クラスからの意見に対しての執行部からの見解を生徒会ニュースをもとにクラスで討論→クラスとして議案書に対して賛成・反対の理由を考える）

第三回生徒議会（各クラスでの討論の結果について考える）

6月15日（木）ＨＲ（討論→態度決定）

第四回生徒議会

6月20日（火）ＨＲ（最終クラス態度決定・確認）

第五回生徒議会（意見書提出、生徒総会の打ちあわせ）

6月22日（木）生徒総会

靴の色の自由化

二度目の規則改正は、ここ数年来の課題であった。しかし学校が大きく荒れた状態ではなかなか取り組むことができなかった。

そこで、八九年度の前期生活改善委員会を中心に点検活動を行い規則改正の取り組みを進めたが、残念ながら時間切れとなり、後期の生徒会に引き継がれることになった。この年の後期の生徒会では「靴の色の自由化」を前期に引き継ぎ取り組むのかどうか問題になった。各クラスで話しあい、生徒議会でも真剣な討論がなされた結果、取り組みを再開することが決定された。

まず各クラスでは、前期のような失敗（前期は時間切れとなって実現できなかった。）を繰り返さないために「なぜ前期はできなかったのか？」「後期はどう取り組むのか？」の二点について話しあい、各クラスの意見書を生徒議会に持ちより提出した。その後、各クラスに現行の規則（当時の規則）がよくわかるように写真を張り

1993年６月の前期生徒総会のようす。

出すなどして準備期間をおいたのち、後期執行部を中心に取り組みを開始した。

そして、八五年度同様、「規則違反ゼロ」の取り組みを通して、生徒の自主的な取り組みとして実現できた。

このように生徒自身が取り組むことを決定し、具体的な取り組みをしていったことで、八五年の「カバンの色の自由化」のときと同様に学校の主人公として自治意識が高まり、生徒と教師の信頼関係回復の問題として前向きに取り組むことができたのは大きな成果であった。

学校が荒れてどうしようもなくなり、指導の後退として生徒の好き勝手を認めるような「規則改正」ではなく、生徒が自分たちで規則改正（靴の色の自由化）の意味を考える、自主的な取り組みとして実現できたのであった。

要求実現活動

一九九〇年度の前期の生徒会では、生徒会による要求実現活動に取り組んだ。

各クラスからの要求を生徒会が集約し、これらを生徒議会やクラス会、生徒総会で討論し、生徒自身の手によっ

生徒会ニュース＊No.4＊6/19(火)

生徒総会まで　あと　２日!!

昨日の、第5回生徒議会において、新たな修正案と、修正案を、取り消すクラスが出てきましたので、以下のように、報告します。

＊修正案・要望の確認（修正案を引くクラス）
1-4：③⑤⑦⑧　2-4：⑪　2-5：④⑤

＊（新たに出された修正案）→

修正案　(3)年(5)組
―週番活動―
各クラスの生活改善委員が注意して全校的なものとする。〈理由〉そんなことをしなくても委員が注意する。

―美化委員―(3)年(5)組
点検はするけど！優秀クラスは、つくらない。
〈理由〉・優秀クラスになっても何っ意味もない。
・何の得にもならない。
・つくっても教室はきれいにならない。
・なれるもんがない。

修正案　(3)年(7)組
美化＆そうじ優秀クラスについて…
そうじが、出来るところは、それでよくて、できないクラスができるようにするのが美化委員の仕事であって、優秀クラスなど決めなくてよい。
・(理)優秀または、そうじしないクラスの差をつけたりするのは、いいかもしれないけど、美化委員の目的は、学校全体を、きれいにすることだ。そこで、そのことは、別に、まず各クラスの点検を、そして、できているクラスは、それで良いが、できていないクラスは、そうじの時に、気をつけて、その、そうじの人数、まとめて協力させるというのをしたらいい。

（執行部からの見解）

◦各クラスがバラバラに、とりくんだだけでは、学年の中だけではなく、学年をこえた交流もほとんどできず全校的なものとするためには全校としての目標をしっかりともち、すべてのクラスがその目標の実現へむけ、一致になってとりくんでいくことが大切である。このことによって他のクラスのすぐれた点をもとる事ができ、とりくみを高めていくことができます。

◦執行部としては、すべてのクラスが『そうじ優秀クラス』となることが当然であり、そのような学校になることを生徒の手で実現していこうという提案を出しています。そのためには昨年度のベル着点検のように、各クラス励まし合えるような頑張ったクラスについてはみんなで評価をし、努力の必要なクラスについては、実現できるようにまわりのクラスが応援していく事が必要です。執行部としては、みんなで元気って、きれいな学校づくりに、意欲をもって元気よくとりくんでいこう！と明るい提案をしています。

1990年６月19日付の生徒会ニュース。生徒たちの要求実現活動のようすがわかる。

て実現したのである。

はじめのうちは、劣悪な教育条件下では突拍子もないと考えられる要求を出すクラスもあった。「スクールバスを走らせて」「食堂をつくって」「全教室に冷房を」「プールを五〇メートルにして」。また「毎日の勉強をもっと少なくして」「秋休みをつくって」など学習指導要領の本質的な問題を鋭くつく要求もあった。これらの要求について、各クラスで討論していった。常識的に考えて無理なものやいまの教育行政の状況から難しいものなども、クラスや生徒議会の討論のなかで一年生の生徒たちにもわかってきた。

こうして討論を重ねていくうちに、本当に切実な要求が全生徒から出されるようになった。そのなかから要求を整理して、クラスとしての代表的な要求をいくつか出すことになった。そして、多くのクラスから出されていた最も切実な要求（この活動は六、七月に取り組んだこともあって）であるウォーター・クーラーの修理と設置、購買で販売しているパンや飲み物の種類の見直しという成果がはっきりとした形でいくつかあがってきたのである。

このように要求実現活動は、生徒たちの、学校の主人公としての自治意識をさらに高めたのだった。こうして一中は「荒れ」の時代を冬にたとえるなら、厳しい冬を乗り越えて、春を迎えることができた。

一九八九年後期に行われた全校アンケート調査の結果、実に九割の生徒が「学校を楽しい」と感じ、また三人に一人は「大変楽しい」と感じていることがわかった。

▨一中生の意識状況（一九九〇）

B．学校生活に関して

☆楽しみ……学校は楽しい！

一〇人中九人の一中生は学校を楽しいと感じている。また三人に一人は大変楽しいと思える学校生活を送っている。その反面、あまり楽しくないと感じている一中生も約一〇％存在している。楽しくない層は学年が上がるにつれて減少している。また、楽しい理由としては同性の友達がいるというのが最も多く、他の理由を大きく引き離している。一年で三九％、二年で四二％、三年では実に六四％の生徒が同性の友達がおり、そのことが理由で学校が楽しいと思っている。これは思春期に入り、以前の物理的な交遊関係から精神的な交遊関係への変化を、学年が上昇するにつれて遂げている証左だろう。一、二年では、クラブ活動も学校生活を楽しくさせている理由としてあげている割合が高い。……反対に楽しくない人の理由のトップはテストで次いで授業がくる。三人に一人は、半分以上の教科がよく解らないと答えている。学校生活の大半は授業であり、それが理解できないとなれば学校生活そのものがおもしろくなくなる。授業理解をいかに進めるかが大きな課題である。…（略）…

（『一中生の自治活動・高槻市立第一中学校生徒指導部発行』生徒意識調査より）

新たな困難に抗して

一中の生徒会活動については、九三年度の現在まで基本的には八五年から継続した同じスタイルでつづいている。しかし九〇年以降、新たな状況の変化が生じている。それらについて見てみよう。

一九九二年から部分的にとはいえ実施された「学校五日制」の影響でいくつかの変化が起こった。

まず、管理職や行政当局からの「授業時数確保」の声が異常に強くなってきたことである。管理職は「体育祭を二日もやっているのは、一中だけだ。標準授業時数確保のため行事を見直せ」と強く迫り、管理職とこれに同調する教師が一体となった攻撃のなかで、一九九二年度から体育祭は一日となってしまった。また、駅伝大会も

いままで一、二年生合同の生徒会行事であったが一、二年生分離、そして一年生のみの実施となってしまった。このような生徒の要求と反する形で行事の見直しがなされたことは残念である。

少なくとも、五日制に伴って行事を見直さざるをえないのならば、生徒の意見も十分に反映すべきであったが、残念なことにその方向にはならなかった（現在、管理職を中心に文化祭を一日で行う、ということがささやかれ、「三年生を送る会」や「映画会」などの生徒会行事も見直すことを考えているようすである）。

また、学校規模が縮小されてきたことによる生徒会機構の改革も必要になってきている。かつてのような一学年八から一〇クラスではなく、現在では一学年五クラスになったので、教職員の数も大幅に減少した。このため、生徒会係の教師の数も減らさざるをえなくなり、かつては各学年二名であったが、現在では一名になった。これに伴い、毎週行っている生徒会係会議も〝学年の生徒会係＋文化、美化、体育、生活（風紀）の各委員会担当教師〟で行うようになった。

4　二度の「荒れ」克服で見えたもの

学校再建の鍵は？

一九八〇年代の初め、全国的に見れば「非行・問題行動」を克服した例として次のふたつのケースがあった。

ひとつは、生徒会に注目して、生徒会を中心に自主的な活動をどんどん推進していって生徒自らの力で学校を立て直していく、いわば民主的な実践による学校立て直し。

そしてもうひとつは、それとは逆に管理的な指導をより徹底するやり方。その結果、問題を起こした子は学校へ来ない（来させない）。そして、学校は一見落ち着いていく。もちろんこの場合、不登校や陰湿化した「いじめ」などのような新たな問題を生んでくるが、表面的に学校の「荒れた」状態はなくなってくる。

本校の場合、前者の方法（生徒会を中心とした学校立て直し）で学校の立て直しを図り、一定の成功を得ることができた。このような方法で学校の立て直しができた背景には、教科外活動の時間をすべて生徒会活動（一中の場合、生徒の自主活動・自治活動）に吸収・一元化できた点が大きかった。その結果、全校クラブ、ゆとりの時間などすべて生徒会活動の時間として、集団づくりの時間にすることができた。

それとともに生徒総会を実施して生徒に決定権を持たせ、さまざまな行事や規則改正の取り組みも生徒の手に委ねたことである。

これは現在では「子どもの権利条約」の精神、意見表明権や生徒による決定の保障に通じ、今後の学校運営にも最も重要なことと言えよう。

ふたつの管理主義

一九八七年六月に突然起こった「対教師暴力」をはじめとする大きな二度目の「荒れ」に対して、当初は後追い的個別指導のみであった。しかし、夏休みの校内研究会や職員会議を経て、まず最初は「身の安全と生徒の教育権の保障…五〇分授業の保障」「家庭との連絡、父母・地域との協力体制」「八五年の生徒会活動の活性化による学校の立て直し」からスタートした。

問題行動の多発する状況下でこれらの取り組みはかなり苦しいものであった。しかし基本的には八五年改革の方向が確認できたことは大きな前進であった。生徒総会も行い、行事も縮小せず生徒会の手で行われた。これらの取り組みの進展によって「期待族」は減っていき、問題生徒との個別の話し込みもじっくりとできるようになっ

ていった。

この間の問題生徒との話し込みのなかで、私たち教職員は、「事務的管理主義」が生徒たちを大きく傷つけていることを知ることができた。八五年以降進めてきたさまざまな行事や規則改正の取り組みでも、教師の姿勢いかんでは結果だけを追い求めたり、表向きの形式だけを整えようとする指導になったりするし、また子どもを育てることを中心にした指導になったりもする。班づくり、班長会指導についても、班という小集団を通じて民主的な集団をつくり上げていく有効な方法ともなりえるが、他方では軍隊における班組織のように子どもを管理・統制し、楽に子どもたちを動かしていこうとする冷たい事務的管理主義の方法としても大いに役立てることができるのである。すなわち大切なことは、指導の方法による一致ではなく、指導目標（どんな子どもを育てるか）による一致が大切で、方法における一致（形式の一致）では新たな管理主義を生むということを私たちは知っておく必要がある。

また、八八年の取り組みでは、学校・学年・教師の一致した取り組みと各教師の自由な実践の保障（みんなが合意できるところでの一致と何でも思い切ってやってみる試み）の大切さを身をもって学ぶことができたのである。

しかし、いまもまだ解決していない大きな問題、それは解放教育管理主義であると言える。特定の価値観（解放理論）に絶対服従を強要して、あらゆる問題を差別問題に一元化し、それに反対するものはつるしあげ糾弾する。「地元集中受験運動」のような特定の運動を教育に持ち込み、それへの屈服を迫る。地元高校を受験しない生徒のつるしあげの手段として使われる「進路公開」などはその例である。また、生徒たちの何でもない発言を取り上げ「差別だ」として、学校への介入を図る手法はいまだに後を絶たない。今後の大きな課題である。

おわりに

学校五日制に伴い、各地で「授業時数確保」が声高に叫ばれ、そのために生徒の自主活動や自治活動を縮小しようとする動きがある。

また一方で「新学力観」の押しつけとそれに基づく教科外活動（ボランティア活動など）が、行政サイドから強力に押し進められようとしている。

このようななかで、生徒たちが自らの力で話しあい、仲間と共に問題を解決することができる、そのような力を身につけるためにも生徒たちの自主活動や自治活動を保障することがいまほど大切なときはない。

現在の指導要領と学校五日制が相矛盾し、「新学力観」による態度主義、忠誠心競争が煽られるなかで、生徒たちにとって本当に必要な力をどのように保障していくか？　これを常に考える必要があると言える。とくに現在の文教政策下では、常にこれらの意識的な取り組みが必要であろう。

また、ときとして陥る誤りは、教職員の「一致した取り組み」と「各個人の自由な実践の保障」の関係である。大切なことは「みんなが合意できるところを一致点にしよう。全体で合意できないことを無理やり一致点にしない」という原則である。管理職や一部教師による「一致した取り組み」という美名のもとに、強制が行われることのないよう常に注意することも大切である。

確かに、「学校は変化する」「したがってものごとをあまり硬直的に考えないことも大切」だが、「基本点はしっかり守る」ことは、非常に大切なことで、かつ原則的なことと言えるであろう。

第二章　ホップ・ステップ・ジャンプの自主活動

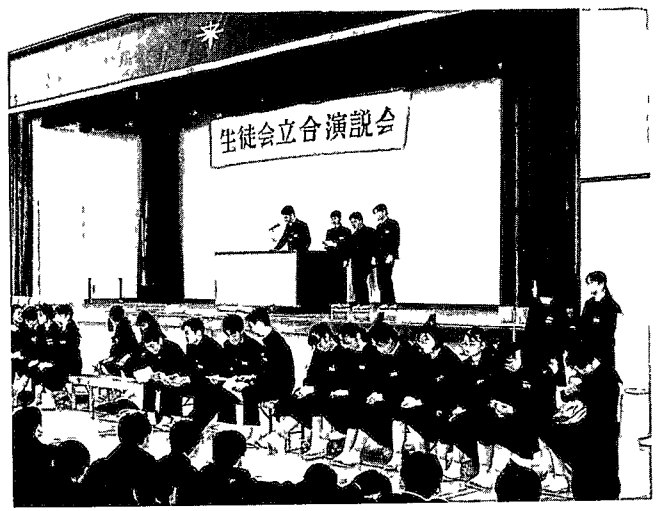
――松原市立松原中学校――

津本　芳光（つもと・よしみつ）

集団活動がおもしろい。教師も指導していて楽しい。生徒たちは、身の周りで起こった問題を自分たちの頭で考え、自分たちの手で解決するとき育つのである。一年の野外活動と校外学習、二年春の校外学習と冬のスキー合宿、三年の修学旅行、生徒たちは自主的な集団活動のなかで飛躍的に成長していく。

1　急速な地域変化のなかで

松原市立松原中学校（以下「松原中」）は、松原市の中心地に位置し、松原市のなかでも歴史のある学校である。以前は教育に熱心な地域でもあり、落ち着いた学校であった。しかし、高度経済成長期に見られた農村部の都市化とそれに伴う人口の急速な膨張のなかで、この落ち着いた教育環境も一変してしまった。大阪の衛星都市



の人口増加（ドーナツ化現象）によって、地域の姿は大きく変わっていったのである。とくに、松原市は大阪市に隣接しているということもあり、通勤の便利さから勤労市民が定住する街というよりも、経済的にゆとりができればもう少し住環境の良いところに引っ越していくという通過性の街に変貌していった。

農地がどんどん売られ、建て売り住宅が無計画に所狭しと建てられるようになった。学校も一九七〇年代中頃には、人口急増によってプレハブ校舎があちこちに建ち、運動場の面積一人分が画用紙一枚という小学校も生まれた。このように小・中学校とも急速に過密化し、中学校は、千二百人から千六百人の大規模校に膨れ上がっていったのである。無計画・無秩序な都市開発によって地域環境は破壊され、それと並行して地域の教育力も大きく低下していった。

一方、松原市では、市の予算の三分の一が同和予算という偏った行政が行われるなかで一般行政が停滞し、子どもたちは劣悪な教育条件のなかで学習しなければならなかった。たとえば、同和校にはプールが二つもあるのに一般校にはひとつもない、同和校は三五人学級なのに一般校はすし詰め状態といったことが生じていたのである。しかし、七〇年代半ばから市政の立て直しが進められ、教育行政においても劣悪な教育環境の改善や過密校解消のための新設校建設が進められ、分離が行われていった。

このような急速な地域・教育環境の変化のなかで、非行の波は松原市にも押し寄せ、教師の必死の努力にもかかわらずとどまるところを知らなかった。松原中もその影響を受けたことはいうまでもない。

「荒れ」と「揺れ」のなかで

その当時、非行克服の流れは、生徒の自主的な立ち上がりを促そうという取り組みと、教師主導の管理的な教育のふたつに別れていたが、松原市の落ち着いている学校はどちらかと言えば後者に属していたと思う。松原中

では、六～八年ほどにわたる非行の波を克服するために、若い教師を中心にクラブ活動の育成を通して学校の活性化を図ろうとしていたようだ。しかし、クラブ活動の育成は、自主的な力を育てるという反面、運営の仕方によっては管理的になりやすく、学校の「荒れ」を解決する本質的な力にはならない。生徒会などの取り組みも行事を消化するだけの活動になっていた。

したがって、私が赴任した一九九一年頃の松原中は、「荒れ」と「揺れ」を繰り返していた時期だった。「揺れ」というは、学校が荒れ狂ったときとはちがって大きなトラブルは少なくなったものの、教師の出方や対応の仕方によって「対教師暴力」や「突発的な問題」が繰り返される状況を考えればよい。

三年生の男子はバリバリの変形服、女子はミニスカートで化粧をしている生徒もおり、他校生とのトラブルや単車窃盗から無免許運転、校内喫煙、男女問題などさまざまなことがあった。教師の努力にもかかわらず、学校の雰囲気や流れを変えることができなかった。そして、次の新三年生も同じ状況を受け継いでいった。無断下校した生徒が、単車で二結（二人乗り）をして学校の周りを爆走し、止めに入った先生をはねるという事件もあった。また、卒業式には刺繍入りの短ラン（着丈が短く襟の高い学生服）やセーラー服を着てくる生徒もいた。九三年度の三年生は、そんな上級生を見ながら一、二年生時を送ってきたのである。

三つの小学校からの入学

松原中の校区には、松原小学校、松原西小学校、河合小学校の三つの小学校があり、毎年ほぼ同数の生徒が入学してくる。長い間学校が荒れていたということもあり、地域のなかには学校不信が強く、小学校から中学校に進学するとき、学力的に言えば上位の子どもたちが私立中学校を選ぶケースが多くなっている。そのうえ、大学進学に有利といわれるために私立中学校を選ぶことも多く、私たち公立中学校の教師にとって大きな悩みの種に

なっているのである。

そして、新一年生が入学してきたあとで、毎年教師を悩ませるのが、三つの小学校から入学してくることの弊害と「いじめ」の問題である。たとえば、ちょっとしたことから起こる出身校間のトラブル。小学校のときにあった「いじめ」の拡大、他校出身の生徒に特定の生徒の悪口を言う、他校出身の生徒の力を借りて仕返しをするなどが一学期には頻繁に起こるのである。

制服がなくて入学式を欠席

新一年生を受け入れるにあたり、どこの中学校でも春休み前の「クラス分けテスト」を利用して、小学校・中学校の教師の交流会をもち、生徒に関する情報交換を行っている。さらに松原中では、入学前年の二学期に各小学校の六年生を対象に、生徒会主催で生徒レベルでの小中交流会を九二年度から始めている。それは「中学校に入ったら学校が荒れているので先輩がこわい」というような中学校に対する誤解をなくすために始められたものであり、放課後の時間を利用してクラブ活動の見学や中学校での生徒会の取り組みの紹介などをしている。それと同時に、各小学校の児童会から学校での生活のようすを報告してもらうことで、小学校同士の交流も行えるようにしている（この取り組みは小学校からも歓迎され定着をみせている）。

松原中に赴任した私は、学年所属が一年生と決まり、学校のようすはまったくわからなかったが、経験から生徒指導と生徒会を担当することになった。まず最初は、新入生の受け入れの体制づくりから始めた。さきの小中の交流会で話された資料をもとにクラス分けの最終調整をしたが、問題事象が大変多く驚きを禁じえなかった。内容は「置き引き」「単車窃盗」「タバコ」から「いじめ」に「不登校問題」まで多種多様にとんでいた。授業中に生徒が飛び出し、小学校段階ですでに授業が成立しないということも起こっていたのである。

さて、いよいよ期待と希望に満ちあふれた入学式がやってきた。ところが、入学式に親共々出席していない生徒がいる。二〇年にわたる教師生活のなかで、こんなことはまったく初めての経験だった。式が終わったのち、さっそく家庭訪問を行った。家に行くと本人はいるが、親はどこにいったかわからない。本人によれば、制服がなくて入学式に出席できなかったという。このように地域的にもさまざまな問題を抱える校区である。

2「自分たちの修学旅行なんだ」——三年間を見通した集団づくり

何を大切にして、どんな集団を育てるか

学校のなかに集団の秩序と民主的な「自治」を育てていくのが「集団づくり」で、その活動を通して民主的な人格形成を目指すというのが「自主活動」の大きな目的である。「自治を育てる」というのは、自治的な仕組みを体験させるというだけのものではない。その仕組みを生かして、集団と個人の利益を統一させながら、学校という大きな集団を形成していく力を身につけさせていくことである。自主活動とは、教師がお膳立てをしたプログラムを生徒が形だけこなす活動ではなく、生徒が主体的に「学校運営に参加」し、「いきいきとした楽しい学校」をつくっていく喜びや感動を育てていくことである。さらに、退廃的な文化が横行しているなかで、一人ひとりの声を大切にしながら内面的な喜びや満足感を体験させ、人間関係をも深めていく喜びを経験させることが自主活動の大きなねらいである。

上級生が荒れており、そして一年生もたくさん問題を抱えているなかで、何よりも重視し心を配ったのは、どんな生徒集団をどう育てていくかということであった。荒れた生徒を前にしたとき、生徒の方が数が多いわけだ

から、教師の力による対応だけで押さえられるものではない。したがって、学年で起こった問題や自分たちの身の周りで起こった問題を、生徒自身の頭で考え、自分の手でしっかりと解決させることを抜きに生徒指導は考えられなかった。自分たちの頭で考え、自分たちの力で解決することにより、生徒のなかに自浄作用を起こしていくことが大切であった。

生徒指導の方針としては

①自主的な生徒会活動を育て、自分たちの力で問題が解決できるようにさせる。

②三年間を見通した集団づくりを進めていく。

③三年になって生徒指導でしんどい思いをするより、一、二年の自主活動でしんどい思いをしよう！

を掲げ、学年の教師みんなで学年づくりをしようと意思統一した。もちろん、学校全体の生徒指導の方針はこういった学年の方針を網羅したものになっているが、学年の生徒会を育てるという観点はまだなかった。この一年生での学年生徒会活動を皮切りに「学年生徒会の育成」も生徒会活動の大きな柱になっていった。その根底には、生徒指導部を中心に学校の流れを変えよう、生徒会を育てようという協力体制ができていたことも大きかった。

松原市の各中学校では、一年で一泊二日の野外学習（林間学舎）と秋の校外学習、二年では春の校外学習と二泊三日のスキー合宿、最終学年の三年では修学旅行というように三年間の大きな行事がほぼ定着している。私たちはこの学年ごとの大きな行事に焦点を当てて、集団づくりを進めてきた。

左記の表を見てわかるように、三年間でこれだけの取り組みをする。果たしてこれだけのことが本当にやれるのかと思われるだろうが、生徒の力がついてくると本当にいろいろな取り組みができるようになる。学年生徒会のメンバーが分担してリーダーシップを発揮することにより、活動範囲は拡がっていくのである。

三年間の行事と取り組み例

月	1年次	2年次	3年次
4	学年生徒会づくり	学年生徒会づくり	学年生徒会づくり
	学級・学年目標づくり	学級・学年目標づくり	学級・学年目標づくり
5	野外活動の取り組み	校外学習の取り組み	「ノーチャイムデー」の取り組み
	アメ・ガム追放の取り組み	授業定着の取り組み	生徒による修学旅行保護者説明会
			授業定着の取り組み
			修学旅行の取り組み
6	美化週間の取り組み	いじめについてのアンケート	いじめについてのアンケート
	授業定着の取り組み	「流れを変えよう」学年集会	修学旅行総括集会
	第1回英検・数検の取り組み	第1回英検・数検の取り組み	
		授業定着の取り組み	授業定着の取り組み
7	球技大会	球技大会	球技大会
	文化祭の取り組みスタート	文化祭の取り組みスタート	文化祭・体育大会の取り組み
8	平和登校	平和登校	平和登校
	生徒会合宿	生徒会合宿	生徒会合宿
9	文化祭	文化祭	文化祭
	授業定着の取り組み	授業定着の取り組み	授業定着の取り組み
	教師対各クラス対抗バレーボール大会	体育大会の取り組み	体育大会の取り組み
	体育大会の取り組み		
10	体育大会	体育大会	体育大会
	校外学習の取り組み	朝学習の取り組み	授業定着の取り組み
	中間テストに向けて	中間テストに向けて	中間テストに向けて
	空き缶集めクリーン作戦	空き缶集めクリーン作戦	空き缶集めクリーン作戦
11	合唱コンクール	スキー合宿の取り組みスタート	進路二者懇・三者懇
	後期生徒会役選	後期生徒会役選	後期生徒会役選
	第2回英検・数検	朝学習・授業定着の取り組み	卒業文集の取り組み
	朝学習・授業定着の取り組み	第2回英検・数検	助け合い学習の取り組み
12	いじめについてのアンケート	スキー合宿の取り組み	
		朝学習の取り組み	
1	いじめについてのクラス討論	スキー合宿の取り組み・生徒の手による保護者説明会	助け合い学習の取り組み
	「いじめ追放宣言」集会	授業集中の取り組み	
2	授業・自習時間のルールづくり	スキー合宿総括集会	お別れ会の取り組み
	第3回英検・数検	卒業式の取り組みスタート	卒業式に向けて
	辞書引き大会		
3	球技大会	球技大会	
	卒業式	卒業式	卒業式
	クラスのまとめ	クラスのまとめ	

ホップ　リーダーを育てる

一年生では、何もかもが初めてであるため、生徒会づくりや学年づくりは、さまざまなことを教えながら自主的な生徒会活動の模倣に重点をおいて基礎を学ばせた。

入学してすぐ、一学期の中頃に行われる野外学習の取り組みを始めた。準備期間が短いので十分な体制づくりはできないが、それでも最大限生徒たちに任せられるところは生徒たちの力で取り組ませた。しかし、日程が迫っていると生徒の力でさせなければと思っていても、つい教師が口を出し手を出してしまい、結果的にはそれの方が楽なために、生徒会づくり、集団づくりのつまずきになってしまうことが多い。

この野外学習では、リーダー育成の観点から、特別にリーダーを募らず、学年生徒会というリーダー組織で取り組みをさせた。学年生徒会の構成は、生徒会本部の学年代表、学級委員、専門部の学年代表で組織する。このなかで、各専門委員会の動かし方や会議のもち方、ルールの決め方、集団で生活をするときの運営の仕方を学ばせていくのである。もちろん、教師がついて一緒に準備をしていくのであるが、たくさんの仲間を移動させるわけだから、集合の仕方や点呼の取り方などをしっかり学ばせることが大切である。そのためには、その練習を事前の学習でしっかりさせ、マニュアルをつくって準備をさせることも大切である。出発の前日には事前指導ばかりでなく、集合練習を体育館で二時間ほどかけて行う。そのようすを紹介しよう。

学年代表が前に出て「いまから出発集会を行います。みなさんは学級委員を先頭に朝礼の隊形に並んで下さい。四五秒以内に集合を終えて下さい。できなければできるまでやりますのでみんな真剣に取り組んで下さい。それでは、よーいドン」。並び終わって人員点呼が終わるのを確認して「それでは、学校を出発します。担任の先生が立っている所にバスの座席順に並んで下さい」「バスが現地に到着しました。入村式を行いますので学級委員を先頭に入村式の隊形に整列して下さい」「次に部屋ごとに集合してもらいます。室長は……に移動して下さい。

ほかの人は、室長の所に整列をして下さい。よーいドン」と日程を追って集合練習を進めていく。これらを、生徒だけでやるのである。本番に手際よく進めていくためには、事前にリハーサルをしっかりやっておかないとできない。「夜の集い」や「キャンプファイヤー」などはリーダーだけで進行の練習をしておく。こうして取り組まれた野外学習は、生徒会の力によって成功を収め、その自信は次の取り組みに必ず生かされていくのである。

ところで、大きな行事をするときに気をつけなければならないことは、「学力の定着」の取り組みを並行して行うことである。行事があるときというのは、生徒の方も気持ちが浮ついてくるためにいろいろと問題が起こりやすくなる。教師は事後指導に追われ、精神的にも肉体的にもしんどくなってくるのである。だから、どんなときでも「学力は大切」という意識を生徒に持たせることによって、浮ついた気分を一掃していくことが大切である。「チャイム着席の取り組み」「忘れ物をなくす取り組み」「授業集中の取り組み」や「英検・数検テスト」など、学力そのものを高める取り組みも同時に行った。

次の大きな取り組みは「秋の校外学習」である。この校外学習では「班行動での自由なオリエンテーリング」をメインに「明日香クリーン作戦」に取り組んだ。「自由なオリエンテーリング」というのは、二年後の修学旅行で高山市内を「自由に班で見学する」ことによって「楽しい思い出をつくる」というねらいがあるので、「班で自由に行きたい？　それとも、クラスで並んで行った方がよいかな？」と言って生徒に選択をさせた。結論として「班で自由に行く」ことになるのがはっきりしているので、一年生の時から三年生の修学旅行に焦点を合わせて取り組ませていくわけである。

このときはオリエンテーリングの仕方は別として、計画の段階からできるだけ生徒の手で準備をさせていく。これは、二年生でのスキー合宿、さらに三年生での修学旅行の取り組みに発展していくからである。そして、この取り組みは絶対といって良いほど成功させ、楽しかったというものにしていかなければならない。行くときか

ら先生に怒鳴られ、帰ってきたら、また先生に文句を言われるのではだめなのである。そのためには校外学習の場所も成功の見通しを立てられるものにしていくことが大切である。

この「明日香クリーン作戦」の「クリーン」というのは、生徒会で取り組んでいる「空き缶拾い校区クリーン作戦」にちなんで、日本の歴史をたどりながら、そのいにしえの村をきれいにしようというものである。これがこの取り組みのねらいのひとつでもある。そして、この空き缶のうちアルミ缶は持ち帰り、生徒会の「空き缶拾い」で老人ホームに寄贈する車椅子を買う一部にあてている。この取り組みは、生徒が目的意識を持って取り組むことができるし、必ず現地の人に喜ばれ、通りすがりの人からも「ご苦労さん」などと声をかけられるので、すべて良い評価につながっていくのである。帰ってからの閉会集会では、それをしっかりと評価してあげた。

もうひとつのねらいは「班での自由なオリエンテーリング」で、まる一日班で自由に行動させることである。これは、二年生の校外学習での「班での自由なオリエンテーリング」と三年生の修学旅行での「自由行動」につながっていくので、自分たちで取り組んだからこれだけ楽しいことができた、というようにもっていくことが大切である。

ステップ　保護者説明会も生徒の手で

二年生では、一年生で学んできた自主活動の基礎を実際に実践する段階に入る。春の校外学習では、先生の手を借りなくても、自分たちで責任をもった行動がとれるのだという実感をつかませることを大切にする。それを、実際に体験させるために「大阪市内のオリエンテーリング」に取り組ませた。

これは、学校を出発点として班で自由行動をとりながら、大阪城を中心に大阪市内を散策し、学校まで戻って来るという取り組みである。学校を出発した時点から生徒たちはまったくの自由になるので、ちょっとした悪さ

をしようと思えばどこでも簡単にできる。しかしそこは生徒を信じるわけである。そして、生徒たちも信じてもらえた喜びを実感できるのである。この取り組みをやり終えたリーダーたちは安心感とともに満足感に満たされていく。

しかし、「自由」であるがために必ず失敗もつきまとう。このときも自動販売機でジュースを買って飲む、途中でお菓子を食べる、カメラをもって来て隠れて写真をとるなどということが何件か起こった。

ここでそれをどう解決するかをリーダーに問題提起をしたのである。教師はリーダーの総括会議に出て意見は言っても、問題を起こした生徒の指導は一切行ってはいけない。なぜなら、生徒が取り組んでいるのだから、問題解決は生徒に任せていくべきである。

このときのリーダーの総括会議では、リーダー組織である学年生徒会のなかに気の緩みがあったのではということになり、学年集会や生徒会新聞を通して自己批判をしていくことになった。リーダーの一部の仲間が、校外学習の取り組みをしている最中に、自転車通学をして指導される、授業中に教師に注意されるなどの問題があったからである。そして、次の「学年の流れを変えよう」というアピールが出されて取り組みは終わったのである。

▨学年の流れをみんなの力で変えよう！

私たち学年生徒会では、「学年の流れをみんなの力で変えよう」ということで今日の学年集会までほとんど毎日残って、校外学習の反省や今の学年の雰囲気などについて、どうするか話し合ってきました。

校外学習では、十数人の違反者が出たことについて私たちはその原因を真剣に考えました。違反をした人に問題があることは言うまでもありませんが、一方で授業定着の取り組みをしながら、「校外学習が失敗だった」という結論を出さざるをえなかったことについて、その責任は、中心となった学年生徒会にあることが

わかりました。学年生徒会が今の学年の雰囲気をつくっていたのです。

……学年生徒会の呼びかけに対して、横を向いている人たちが前を向いてくれるようになるため、その人たちのことを真剣に考える気持ちと、同じ方向を向かせようとする一二〇％の努力が必要なことが長い話し合いでわかりました。だからルール違反をした人にも反省してもらうけれど、まず、何よりもその学年の中心となる学年生徒会がしっかり反省しなければと考え、今回の取り組みになりました。そして、学年生徒会のひとりずつに反省文を書いてもらいました。学年生徒会と班長は今回の校外学習は思いきった取り組みだということを知っていたけど、他の人にまで、この主旨を徹底することができなかった。

それは授業定着の取り組みのなかであらわれました。この取り組みの一番先頭に立たなければならない学級委員が、多くのクラスで先頭に立てていなかったのです。逆に取り組みの足を引っ張る人さえいました。どんな取り組みをしても前に進むはずがありません。学年生徒会が団結できていなかったのです。

…（略）…

私たちは一年生のときに、みんなで「いじめ追放宣言」（後述…筆者）をつくりました。

これは、学校の中で一人ひとりが大切にされ、明るく、楽しく学習できる環境をつくろうと取り組んだものです。その結果、「いじめ」についての取り組みはみんなの協力の中で大きく前進し、急速に減りつつあります。しかし、まだ完全になくなっていません。でも、みんなが力を合わせればきっとなくなると思います。そして、この後にある大きな行事といえばスキー合宿、修学旅行です。これを、今回の二の舞にならないようにするためには、今から学年の土台をしっかりつくり上げておかなければなりません。それは、学年生徒会の力だけではできません。

学年全体がこの雰囲気をよくしていこうと協力してくれなければ、これからやっていこうとすることが実行できません。もし、実行できたら、みんなの力でやり遂げたという満足感が一人ひとりに残って、一生の思い出に残るようなスキー合宿、修学旅行になると思います。スキー合宿、修学旅行を自分たちの力で成功させるためにも、みんなの協力と団結が大切です。みんなで力を合わせてがんばりましょう。

生徒の要求に基づいて取り組みを進めたとき、その取り組みに生徒の自覚が伴わなければ断固として拒否をするということも必要になる。たとえば、学年末も押し迫った頃、生徒会から球技大会をしたいという声が出た。「よし、やろう！」と準備に入ったが、学年の雰囲気が浮ついている。そのとき「いまの学年のようすでは、必ずトラブルが生じるし、ケガ人が出てもおかしくない。先生らはそれを承知で球技大会をすることはできない」と学年生徒会に提案した。リーダーたちは、「これは、大変だ！」と「学年生徒会新聞」をつくり、クラスを回り問題点を明らかにしてみんなの協力を訴えたのである。そして、球技大会も自分たちの力で成功させていった。

なんといっても集団づくりのおもしろさとその到達点のバロメーターになるのは、二年生後半のスキー合宿である。このスキー合宿を名実ともに成功させることによって、三年生の最終段階に移行していくことができるし、学年の集団づくりを仕上げの段階へと進めていくステップになる。

このスキー合宿の取り組みは新たなリーダーを募り、学年生徒会とあわせて「実行委員会」（実行委員会の組織図は六七頁参照）を組織し、三か月前からスタートする。「やる気」のある生徒なら誰でも実行委員になれるし、仲の良いもの同士でも構わない。みんな応募してくれるのだろうかという心配をよそに、九二年度の実行委員会には、五十数名の立候補があり大所帯になった。これに、各クラスの室長（宿泊先の各部屋の室長）とチームリーダー（スキー講習を受けるときの班のリーダー）を入れると総勢百三十～百四十名のリーダー組織である。学年の生徒が二七〇名だから、方針が出ればすぐこの半数以上が動くのである。

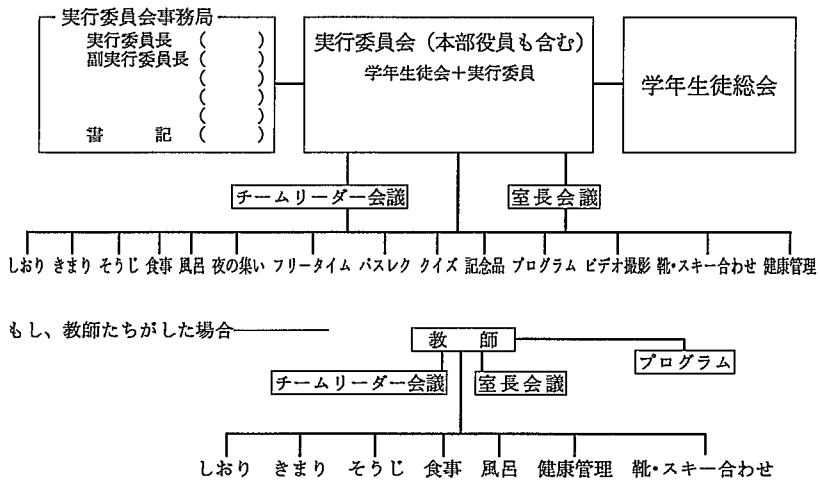
事務局は実行委員のなかから互選し、スキー合宿についてのすべての計画・立案をする。できればこのなかに生活指導上心配な生徒も入れておき、意識的にみんなの前に出る機会を多くする。このスキー合宿は、取り組めば必ず「良かった」「楽しかった」「もう二、三日あればなぁ」とみんなが言ってくれるので自信につながっていく。取り組みの準備段階でしんどかったことも、やって良かったというように変わっていくのである。無理な課題を背負わせて、理屈づけをするよりも、みんなで協力して楽しくやれて、成功したという方が集団づくりのうえではるかに良いのは言うまでもない。

実行委員会をさらに左の図のように一四のグループに分け、それぞれに事務局のメンバーを配置して、指導グループとしての自覚を持たせるようにした。また実行委員会では、教師が取り組むスキー合宿と実行委員会で取り組むスキー合宿ではどれだけ内容がちがうかという論議もし、学年生徒総会にかけて自分たちでやることを決定していった。

スキー合宿の当日は、私たち教師に代わって実行委員が全体の指揮をとっていくので、毎日の学校生活のなかでも実行委員をリーダーとして登場させていく。たとえば、毎日八時三〇分から五分間「朝学習」をやっているが、この点検活動を実行委員を中心に行ったり、「授業定着」の取り組みを事務局の指導のもとに取り組んだりした。

また、風紀委員会を中心に持ち物やルールについてクラスで話しあわせたところ、おやつや小遣い、カメラ、ムースやカーラー、ドライヤーの問題が出てきた。実行委員のなかには自分の要求だけを通そうと思って入ってきている生徒もいる。リーダーのなかには、そういう実行委員に対して絶えず気を遣っている生徒もいる。そこでその都度、リーダーには勇気を持つこと、失敗してもよいから全力を尽くすことを呼びかけた。このような論議の過程を経て、批判の目を育て、なれあいやあいまいさを許さない雰囲気を実行委員会のなかにつくっていく

スキー合宿実行委員会の全体図（事務局案）



のである。

最後まで論議になったのは「おやつ」と「カメラ」であった。みんながルールを守られるかどうか、お菓子を食べる時間などの自主管理ができるかどうか、実行委員の指示にみんなが協力できるかどうかを見ていこうということになった。それができなければ修学旅行のおやつやカメラ、小遣いも再考しなければならないし、「自主管理」がやれなければ来年の修学旅行は、自分たちの手で取り組むことができなくなるのである。結局、カメラは、使う時間を決めれば有効に使えるということで持っていってもよいことになった。しかし、おやつは、この取り組みをしている最中にガムの包み紙が見つかったり、下校途中に買い食いをしていることがあったりして、最終的には、修学旅行のことも考えて「自主的に辞退をしよう」ということになったのである。

もちろん、これらのことを決定するときは「学年生徒総会」を開いて決めていく。スキー合宿では三回の「学年生徒総会」を開いて最終の実施要綱を決定していった。このなかでがんばり切った実行委員の何人かは、三年生

の修学旅行のリーダーや学年のリーダーとして登場してきた。

九二年度のスキー合宿で、もうひとつ重要なポイントだったのは、スキー合宿の保護者説明会を生徒の手で行ったことである。自分たちで考え、方針を出し、取り組んできたのだから実行委員会で説明を行うのは当然なことであるということと、自分たちの取り組みに責任を持たせるということから、これに踏み切った。しかし、生徒たちにとって初めてのことなので「え！　ほんとにやるの？」から「自分らでやってきたんやからやろうや」までいろいろな意見が出された。前日には、司会は誰がし、報告は誰がするかなど細部にわって実行委員会でリハーサルを行った。当日、不十分ながらも生徒たちが一生懸命説明する姿を見て、一番安心をしたのは親たちではなかっただろうか。生徒たちは真剣に、保護者はにこやかにといった雰囲気で無事終わった。生徒たちも犬役をやり終えて、さらに自信をつけていったと思う。そしてスキー合宿当日、すべての運営を自分たちでやり切り、大成功を収めたことは言うまでもない。

六七頁の図は、スキー合宿実行委員会の組織図であるが、このように教師が取り組むよりも生徒で取り組んだ方がずっと楽しいものができるということを、具体的に示してあげることも大切である。

ジャンプ　「涙が出るほど笑ったよ」

三年生では、中学校の自主活動の総まとめとしての修学旅行に取り組む。スキー合宿と同様「修学旅行実行委員会」（これの組織図はスキー合宿実行委員会の組織図を参考）を組織する。事務局は九名で構成され、委員長は一名にこだわる必要はなく互選で二名を選んだ。そして、この修学旅行での目的として「信州の自然と文化にふれることを通して、豊かな人間をめざそう！」を掲げ、具体的には

「新しいクラスで友情を深めよう」。
「一人ひとりが自分自身に責任を持ち、自覚を持って行動する」。
「最高学年としての自覚と誇りを持てる修学旅行にする」。

そして、自分たちの手で整然とやり切るために次の三つの柱を立てた。

①館内放送は、一切使わない。
②小遣いは自由にする。
③班を中心にした自由行動を多く取り入れる。

これを、やり切るには本当に生徒一人ひとりの自覚が必要であった。なぜなら、宿舎は一般客もおり、むやみに館内放送を使うわけにもいかず、そのうえ、最後の高山市内はまったくの自由行動で、問題を起こすことも考えられるからである。これもスキー合宿同様、実行委員会の指示のもとに協力できるかを見たうえで、決定していくことになった。

そのために、事前に一日の学校生活を自覚的に送るための取り組みも行った。それは、「ノーチャイムデー」という取り組みで、他学年の協力も得て延べ三回行った。学校での一日の生活を、一切チャイムを使わず過ごすのである。全校生徒の協力がなければできないことは言うまでもなく、全教職員の協力もなければできない。

この取り組みは、事務局を中心に他学年の協力も得てやり切った。前日には、校門に立つ人は誰、一年の教室の担当は誰、二年は誰、一〇分間休みは、昼休みはというように実行委員会で綿密に打ち合わせを行った。当日の朝は、一五分前に集合してそれぞれの持ち場につき、教室では、各自時計を持っているので学級委員、班長が

指示をして協力をし、事務局を中心にテキパキとした行動で三回とも成功させることができた。これが成功したとき、教師だけでなく実行委員会のメンバーも、修学旅行は絶対に成功するという確信を持てたことは言うまでもない。

いよいよ修学旅行の当日がやってきた。早朝の出発集会から生徒の手で進められていった。バスのなかでの生活から、食事・宿舎での生活までほぼ予定どおりに進み、さらに、食事の準備からお風呂と買い物、室長会議等もすべて順調に進んでいった。そして、何といっても圧巻だったのは、二日目の「ひだホテルプラザ」に到着してからの行動だった。すぐに予定されていた室長会議で時間の遅れによる変更を説明したのち、お風呂と買い物、夕食までを生徒たちは自覚的に動いた。当初予定していた「夜の集い」も、神業的な夕食の後片付けと機敏な行動で時間の確保ができ、楽しいひとときを送ることができた。教師の劇「シンデレラ」も見ものであった。

1993年５月の修学旅行、高山市内。

次の朝、食事の世話をして下さったチーフの方が私のそばに来て、「こんな中学生の子もいるんだなと思って感心をしました」とほめてくれたのである。

旅行を終えて学校に戻っての解散集会まで、生徒たちは本当によくがんばった。旅行業者の人も「館内放送を

使わずに宿舎での生活ができるのか心配しましたが、本当にすばらしい修学旅行を見せていただきました」と言ってくれた。

このように、自主活動を通じて、三年間で学校を何とかしようという取り組みが実を結んでいったのである。いまでは、変形服での指導をすることもなく、アメ・ガムで生徒を指導したり、「いじめ」の問題で指導をしたりということもほとんどない。そのとき、そのときに場当たり的な取り組みをするのではなく、生徒の発達段階に応じてそれなりの手を打つことによって（三年間を見通して集団づくりを進めていくことによって）「荒れ」を克服し、生徒が主人公になって活動できる学校づくりができるのである。生徒や教師の声を紹介しよう。

私たち三年生は、二年生の時から修学旅行に向けての取り組みを始めました。そして、学級委員をはじめ、実行委員会を作って準備をしてきました。第一回の実行委員会では、中心になって動く事務局を決めました。本格的に修学旅行に向けて取り組み出したのは三年生になってからですが、約二か月間三年生全員がいろんなことに取り組みました。

一番大きな取り組みは、全校生徒に協力してもらった「ノーチャイムデー」でした。修学旅行での「宿舎では館内放送を一切使わない」ようにするために、他学年や先生方にも協力をしていただいて、その予行を三回にわけて取り組みました。他学年では、始めは協力してくれない人もいましたが、集会などで取り組みを話すとみんなも協力してくれるようになりました。

保護者説明会も、先生たちの力を借りずに、実行委員と事務局だけでやり切りました。また、全員が修学旅行に参加できるように、学校へ来ていない人への難しい取り組みにもがんばってきました。三年生の修学旅行は、実行委員会の力とみんなの協力で本当に大成功に終えることができました。（修学旅行の総括集会

より）

§

修学旅行に行く前から、実行委員の人とか遅くまで残って取り組みを進めていてくれたので、当日はだいたいテキパキとできてよかった。これも実行委員さんたちのお陰だと思った。バスに乗る時間が多かったけど、バス内でカラオケとかできたので退屈しなかった。修学旅行に行ったなかで一番おもしろかったのは〝よるの集い〟。歌を唱った人はみんなすごく上手で驚いた。先生たちの出し物の〝劇〟は、とてもおもしろかった。日頃想像できないようなことをしてくれた。女装している先生は、結構似合っていた。あんな風な先生の姿を見れるのは、最初で最後だと思った。楽しい思い出になってよかった。（生徒A）

§

すごく楽しいことばかりで、特に〝夜の集い〟は最高。もう、あのシンデレラがメッチャ最高やった。涙が出るくらい笑ったよ。みんなもすごく盛り上がっていたしー！　マジ、絶対忘れられへん！　もう、夢にも出てきそう。またなんかの機会にやってほしいなぁ。

オリエンテーリングもちゃんと班で行動出来てよかった。川の水もきれいだし、山の景色もよかった。買い物は、時間が少なかったような気がしたけど……。いろんなお店があって、どこに入ってもこれがほしい、あれがほしいというものばっかり。買い物に時間がかかってしまったけど、楽しかった！　もう一度、行きたい。（生徒B）

§

よくやったなー！　大成功だ。実行委員会が中心になって「親むけ説明会」をやるなんて、私の長い教師生活でも初めて見せてもらった。すばらしい！　特に事務局の諸君、どんな質問にも間をおかずにテキパキと答えていたのは、事前に「これは、自分たちの修学旅行なんだ」との自覚と認識、そして研究がしっかりできていたことのあらわれだろう。お母さんたちがどんどん質問を出して下さったことにも感謝しなけりゃ。

実行委員以外の一般生徒諸君のなかには、少しだけまだ協力的でない人がいるかも知れない。でも、大多数の諸君はもうすでに実行委員を支えて、その指示に従い尊重して行動することが、楽しくて意義深い修学旅行を生むのだと考え、行動しだしている。毎日の学校生活のなかでありありと伺える。修学旅行まで後二週間。実行委員会とそれを支える全三年生諸君の活動に心からのエールを送ろう。（C先生）

3「分析→方針化→行動→総括」

自主活動というのは、年間の生徒会行事をこなすのが大きな目的ではなく、生徒の要求の掘り起こしからそれを組織化することによって、自分たちの身の周りに起こってくる問題を解決し、自分たちの力で集団づくりを進めていくことである。そして、その運営は生徒の手で進められるようにもっていくことが大切である。そして、その道筋と手立てを学ばせなければならない。しっかり時間をかけて「分析→方針化→行動→総括」を繰り返し行うことにより、問題解決の力をつけさせていくことである。

とくに、学校が荒れている場合の多くは、生徒が学校不信に陥っていることが多く、その場合にはなおさら「自分たちで学校をつくる」という気持ちを育てていくことが大切である。

アメ・ガム追放

一年生に入学して間もない五月の中頃、野外学習と前後して学校でアメやガムを食べていた生徒が五十人ほどいることがわかった。もちろん、野外学習のときも持って行っており、なかには授業中に食べている生徒もいた。クラブ活動などで先輩から教えてもらっているのである。あまりに関係していた生徒の人数が多いということもあって、教師からのワンサイドの指導はやめることにした。生徒のなかに「アメぐらい食べてもどうってことない」「そんなこと注意してもしかたがない」という雰囲気があるなかで、教師が指導するだけでは「モグラたたき」と同じである。

学年生徒会で話しあった結果、その雰囲気を学年から一掃するためにクラス討議をし、クラス決議を上げることで「何が良くて、何が悪いのか」を考えていこうということになった。そして、それを全体で確認するために最終的に学年集会をもってクラス決議を発表し、学年としての「決議」も上げていった。結局、これらの取り組みは、いくつかの話しあいを通してそのまちがいをみんなに考えさせ、生徒のなかに自浄作用を起こすことがねらいである。その結果、それ以後この問題での指導はほとんどなくなった。

▨一年二組のクラス決議

二組は、話しあいの始め、配ってもらったプリントを読んで感想を述べてもらいました。そのなかには「持ち物点検をした方がいい」という意見が出てきましたが、ほとんどは「不要物は持って来てはいけない」という意見でした。私達のクラスには持って来ている人はいなかったけど、授業中立ち歩くということがときどきあります。これは、不要物を持って来るのと同じように、自分さえよければいいという人の迷惑を考えない行動だと思います。ひとりがやりだすとみんなも安心してやりだし、学校全体がだめになってしまいます。そんなことにならないように、出た意見をクラスの決議にしたいと思います。

・不要物を持って来ている人を見かけたら注意する。

・注意されたらきちんと聞く。聞いてくれない場合は先生に相談し、注意してもらう。

いじめ追放宣言

前に書いたように、三つの小学校から生徒が集まっているということもあり、一学期はとくに頻繁に「いじめ」の問題が起こってくる。一学期の間に、道徳・学活の時間を利用して「いじめについて」の学習を四時間ほど取り組んだ。しかし道徳の時間で話をしたからといっていじめはなくなるものではないし、また口で言ってなくなるのなら苦労はない。とくに最近のいじめは陰湿化し、そのやり方も巧妙になってきており、教師の目にもわかりにくくなってきている。そういう意味でも、学年のリーダーたちが学年・クラス分析をしっかりできるようにしておくことが重要になってくる。つまり「クラスや学年のなかに、いじめはないだろうか」とリーダーたちに聞いたとき、クラスの出来事が小さなことでもリーダーによって報告される雰囲気をつくっていくことが大切なのである。

一年の二学期の半ばを過ぎた頃、学年生徒会で話しあいをしていたとき、あるクラスの学級委員から「先生、うちのクラスにまたいじめが出てきてんで」という報告があった。学年生徒会では、いつも学年やクラスの状況分析をさせるが、この分析によって、生徒のなかにある小さな要求や困っていること、取り組んでいかなければならないことを引き出していくのである。

たとえば一年の一学期の始めに、一年生が上級生から暴力を受けるという事件があった。すぐ学年生徒会を開

いてどうするかを話しあい、生徒集会で全校に訴えようと決まった。一年生の学年代表が「一年生には不十分なところがたくさんあります。そこは、松原中の先輩として僕たち一年生を正しく指導していって下さい。楽しく来られる学校にして下さい」と訴え文を読み上げた。それ以後、上級生からの暴力はなくなっていった。

このいじめの問題が出てきたときも「何か取り組みを考えようか」と言ったところ、「もう少し待って、一度みんなに話してみるから。それでもやめなかったら何か取り組みを考えよう」ということになった。リーダーは、いじめの問題に取り組むことによって、いじめている生徒からの仕返しを恐れていたようである。機が熟するまで待つことにし、一か月ほどようすを見ることにした。一一月の終わり頃になって、やっとその学級委員から「いじめをやめそうにないから学年で取り組みをしてほしい」と言ってきた。

そこで、まずアンケートをとり、それに基づいて方針を出すことになった。アンケートの結果はなんと「いじめたことがある」が二四・五％、「いじめられたことがある」が二五・六％、「いじめを見たことがある」というのは予想以上に多く四一・六％もいた。そして、何よりも驚いたのは、そのうちの七五％の仲間が見て見ぬふりをしているという事実である。学年生徒会で討議をした結果、クラス討議、クラス決議を経て「学年集会で『いじめ追放宣言』の採択をしよう」と決まった。こうして約二か月にわたる取り組みのなかで整然とした学年集会をもち、「いじめ追放宣言」を採択した。

この宣言文をつくるにあたり、クラスで「いじめについて」話しあわせ、そこで出てきた意見を持ちよって学年生徒会で討議にかけた。この宣言文は「いじめとはなにか」「いじめている人にとっていじめとは」「いじめられている人にとっていじめとは」「いじめを見ている人にとっていじめとは」の四つの視点から延べ一二時間にわたって討論をし、それをまとめたものである。これを再度クラス討議にかけ、クラスでの承認も得ていくのである。

松中から「いじめ」をなくそう

私達が松原中学校に入学してから様々な出来事がありました。その中でもとりわけ私達の心を悩ませたのは「いじめ」の問題です。豊中市では、「いじめ」のために、中学3年生の女生徒が殺されるという悲惨な事件も起こりました。2学期に入って、1年生の中でも「いじめ」の問題が表面に出てくるようになり、そのことで学年集会がもたれたりもしました。しかし、「いじめ」はなくなりませんでした。学年生徒会では、このことを重視して、学年として「いじめ追放宣言集会」を持つことを決め、取り組みを進めて来ました。

◆「いじめ」とは

☆いじめをしている人にとって「いじめ」とは

いじめている人はみんな自覚がなく、自分さえよければいいという身勝手で利己的な人です。そして、力の強い人にいじめられている人は、逆に自分より力の弱い人（何をしても反抗しない人）に八つ当りなどをしている。従って、「いじめ」をしている人は人権をまったく無視している行為で、それを放っておくと暴力で支配される学校になる。

☆いじめられている人にとって「いじめ」とは

いじめられている人は真剣に学校へ来るのが嫌になり、登校拒否を起こす。そして、いじめられている自分が嫌になり、自分自身の存在も否定するようになり、自殺する人も出て来る。

また、いじめられている人は、誰も止めに入ってくれないことが多いから、自分だけが孤立しているように思い、回りの人がすべて敵に見えて来る。そして、不安な毎日を送っている。

☆いじめを見ている人にとって「いじめ」とは

ほとんどの人は、自分に関係がないと思っていて、それを見ていても止めないので、学校の中に何をしても良いという雰囲気を作り出し、間違いを批判できない流れを作り出している。そのため、「いじめ」は増えていくことになる。そうなると自分もいつかはいじめられるのではないかと不安になってくる。しかし、間違いを批判できないということはすでに自分も力によって支配されていることになる。

☆「いじめ」とは

・力の強い者が力の弱い者を暴力で支配している姿である。
・人を人とは思わない行為である。
・勇気がなく、物事の善悪の判断のできない、自分勝手な人の行為である。
・楽しく、明るく遊び学べる雰囲気を破壊する行為である。

◆宣　言

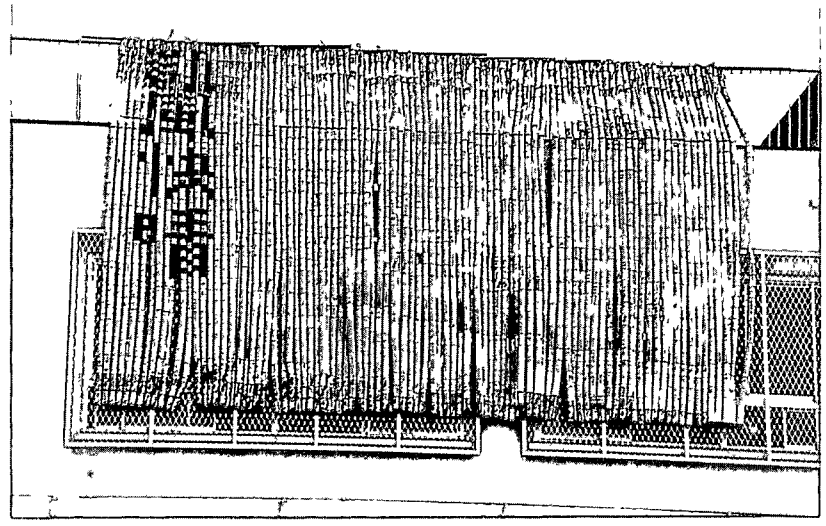
「みんなが平和で快適で充実した学校生活を送れるように次の宣言をします。」

1。松中生一人一人は平等であり、大切にされなければならない。
2。一人一人が意見をもち、自由にものが言える雰囲気を作らなければならない。
3。私達は、自分勝手で他人に迷惑をかける行為は許さない。
4。その人の性格、身体的特徴、能力などいかなることによっても他の人を傷つけてはならない。
5。「いじめ」をされたり、「いじめ」を見た人は、勇気をもってそのことを訴える権利がある。
6。弱い人の立場に立って物事を考えよう。
7。一生懸命頑張っている人が報われる学年・クラスをつくろう。

以上のことを、楽しく明るい学校生活を送るために、私達一人一人が真剣に努力することをここに決意します。

1992年1月31日
松原市立松原中学校　1年学年生徒会

1992年に学年集会で採択された「いじめ追放宣言」。



1993年９月の文化祭で３年生がつくった空き缶による「富嶽三十六景―凱風快晴」。

最初にクラス討議をするとき、リーダーは勇気がいる。とくに、いじめっ子のいるクラスがそうである。しかし、繰り返し討議を進めていくうちに、「いじめはいけない」という世論形成ができてくる。それと並行して「いじめ１１０番」という投書箱も設置し、生徒会で相談日を設置するという取り組みも行った。

その結果、この学年が二年生になると「いじめられたことがある」が一〇・三％、「いじめたことがある」が八・〇％、「いじめを見たことがある」が一五・三％と大幅に減少し、三年生ではさらに減少したことは言うまでもない。

学年を越えて取り組む体育大会・文化祭

学校・生徒会行事のなかで三学年共通しての大きな取り組みは、体育大会と文化祭である。とくに最近は、多忙化のなかで失われつつある文化的な行事を取り戻し、文化の息吹を学校のなかにしっかりと根付かせるためにも、文化祭を生徒会の自主的な取り組みと結合させて定着させたいものである。これまでの文化祭は生徒の「ウケ」をねらうものが多く、体育大会も「ツッパリスタイル」で応援を競うというものであったが、全校生徒会を中心に改革が進められ、内容的にもすばらしいものができるようになった。

文化祭は、前年からテーマをもとに学年を学年全体の構成劇（劇＋合唱）と展示・製作グループにわけ、学年全体の取り組みとした。前年（九二年度）は、構成劇「走れメロス」とフィールドワークの学習で学んだ「障害者問題」の展示発表を行った。このとき、学年生徒会ではクラス劇にするか、学年全体での構成劇と展示発表にするか意見がふたつに大きく分かれ、クラス討議にもかけ、再度持ちよったが結果は同じだった。それで学年生徒会では〝ディベート〟でどちらにするか激論を交わし、後者に決定をした。

九三年度は、構成劇「卒業写真」と「応援の振り付け」の発表、そして、空き缶による壁画・葛飾北斎「富嶽三十六景―凱風快晴」と展示「高校訪問による高校紹介」の四つの部門で取り組み、文化祭の形式も本部生徒会の指導のもと全学年で一日かけて行い、改革も一歩前進した。とくに学年構成劇「卒業写真」は、担当の教師と生徒の必死の取り組みで感動を呼ぶものになり、下級生からも「三年になったら、私たちもあんな劇をやりたい」という声がたくさん出るほどであった。空き缶壁画も、一週間で空き缶三六〇〇個を集め、短期間ですばらしい作品をつくりあげた。また、展示は夏休みから高校訪問し、その結果をまとめて発表した。

このふたつの行事の特徴は、三つの学年の協力・共同があってこそ初めて成り立つもので、これに取り組み、成功させることは三学年の縦の秩序をつくったり、学年を越えての「指導」「被指導」の関係を育てることになり、いい意味で学校づくりに生かすことができるのである。

生徒を主人公に

私たちが教育活動を進めていくうえで、何よりも大切にしなければならないことは教職員集団での合意である。

とくに、教育内容の画一化と押しつけが厳しくなってきている今日にあって「子どもを主人公にした学校づくり」は二重の意味で重要性を増してくる。

ひとつは、「教育の自由」である。生徒の自由な発想とその活動の保障は、現場に「教育の自由」とそれを豊かに実践できる教師の民主的な権利が保障されていることである。それがないかぎりは「生徒を主人公に」というのは、「絵に描いたモチ」になる。ふたつめは、教職員の合意形成である。取り組みを始めた当初、「自主活動とかいうのは苦手ですねん」と言っていた先生が、生徒の取り組んでいるようすを見て「生徒たちの力はすごいですね」という評価に変わっていくのである。教育観のちがいや立場でのちがいを越えて「合意」を生み出すことができるのが「自主活動」である。学校が「荒れ」ている、「揺れ」ている状態から大きく脱却をして再生をしていく姿を目にしたとき、教師も変わらざるをえないし、その精神は継承されていく。

九二年度のスキー合宿は「自分たちの手ですべてを実行」したが、今年は一歩進んで「館内放送も使わない」で「自分たちの手で」やり切った。このように学校全体の取り組みになっていったとき、学校を再生していく力は着実に育っていくのである。

第三章　心のバーの向こうには

――堺市立津久野中学校――

武　慎太郎（たけし・しんたろう）

管理主義的な指導では「荒れ」はなくならない。破綻を招くだけである。ではどう取り組めばよいのだろう？　生徒たちに大切なのは「なかま」と「めあて」。「おやつ闘争」をきっかけに、自治活動と進路学習が始まった。

心のバーの前には／新しい私／
心のバーの向こうには／何かを越えた私がいる　（佐藤祐子『走り高跳び』より）

1　管理主義の破綻

堺市立津久野中学校（以下「津久野中」）はマンモス校上野芝中学校からの最後の分離校である。校区は比較的豊かな住宅街と下町的雰囲気の町の両方を含み、戦災にあっていない旧村と団地、新興住宅街からなる。

創立当時は、問題行動も皆無に近い学校であったそうであるが、創立四年目（一九八九年度）、一気に膿が吹き出すかのように当時の三年生がつぎつぎと問題行動を起こし、対教師暴力など学校の秩序破壊がつづいた。それにならって一年生も学年全体が騒然とし、二学期後半からはクラスによっては授業の成立しない状態がつづいた。つまり三年生と一年生がいわゆる「荒れ」の状態になった。当時の二年生は比較的おとなしく、問題行動もさほど目立たなかった。

翌一九九〇年四月、私はこの津久野中に赴任してきて、第二学年（第六期生）に配属された。教師たちは一年間の「荒れ」を経験したあとで、なんとかおとなしい新三年生に希望をつなぎ、学校を再建しようとの意欲に満ちていた。ところがこの三年生も最上級生になったとたんに崩れ出した。新二年生は、もちろん前年からの問題を抱えたまま進級してきている。

この報告はその後二年間、第二学年（七クラス、二五四人）の教師集団が中心になって模索してきた実践の記録である。

行き詰まった指導

津久野中ではいわゆる「変形服」を着たいという生徒が異常に多く、教師たちは大変苦労していた。指導は細かく、また厳しく、小さな服装違反も見逃さず、変形服で登校した場合ただちに着替えに帰すか、保護者に連絡して来てもらっていた。服装のみならず名札、カバンの類まで「今日は第一カバンで来い、第二カバンで登校するな」「かざりは一切つけるな」などと厳しくチェックする。しかし生徒たちはそれに反抗する。

とくに三年生の教師たちによる厳しい服装・頭髪指導は、この学年から立て直さなければ、という気概に満ちたものでその点でとても共感を呼ぶものではあった。けれども、その指導方法には限界も見え隠れしていた。たとえば、名札をつけてこなかった生徒を職員室に呼びつけ、あらかじめ用意してあった紙片にマジックで名前を書き込み、ホッチキスで制服の胸に留める。その間、生徒たちはギャアギャアわめいたり先生に対して暴言を吐いたり、食ってかかったりしている。しかしそれらの言葉には注意をしないで、ホッチキスで紙片を留めさえしたら教室に帰す。第二カバンで登校してきたからといって保護者を学校に呼ぶ。服装違反のことで朝早くから保護者に電話をする。

だが、五月の修学旅行を境に、そのような指導も成り立たなくなってしまった。修学旅行の最中に変形服に着替え、持って行ってはいけないはずのおやつを食べ、ヘッドホンステレオを聞き、教師の指導に従わない生徒が続出したのだ。こうして前年度ほどではないにしても「荒れ」の状態がつづき、教師たちの昼夜を分かたぬ努力は並大抵のものではなかった。

服装頭髪に関する厳しい規制、これらの規制に反する生徒は帰宅させて直させるという校門指導。おやつを持たせない遠足や修学旅行。囲い込み「管理」しようとするこうした指導方針は、むしろ生徒を物理的にも精神的にも閉塞された状況に追い込んでいったのではないかと思われる。

私は、津久野中の生徒指導の困難な状況を一言で括れば、「管理主義的な指導とその破綻」ではないかと考えた。その前の学校創立後最初に荒れだした学年にしても、結局どこかの時点で破綻をきたし、「荒れ」の状態がつづいたと思われるし、私の所属した二年生にしても、もうすでに一年生の時点で破綻していたと思える状態であった。

自分さえよければ

二年生の状態もかなり悪かった。彼らは前年度、つまり一年生当時、ちょうど向かい側の校舎の廊下で当時の

三年生が教師たちとトラブルを起こすのを、鈴なりになって見ていた。そしてそういうことをすぐに真似たようだ。授業を平気でつぶす。注意した教師のその仕方が悪いと言って食ってかかる。言葉の端々に教師をバカにしたような気持ちが滲み出る。そういう生徒が目立った。

このように当時の二年生たちはその当初、学校の秩序を何かと破壊しようとした。それでいて多くの生徒や親は異常に成績にこだわり、塾通いも多かった。「先生、これ点に入るん？」とよく聞かれた。他教科の提出ノートや塾の宿題さえ、平気で授業中にやっている生徒が何人もいた。

ツッパリ連中のことを何とかしなければ、と考えている生徒はほとんどいないように見えた。もちろん流されずにまじめに学校生活をしている生徒も多かったが、生徒たち自身に自分たちが学校の主人公であるという意識は希薄であった。

流れを変えよう

津久野中は分離校であったので、教師たちは、ほぼ全員がよく知りあっている仲である。

組合離れが一般化していて、分会は壊滅状態に近かった。校長―教頭―主任―一般教員といったタテの統制が強く、ものを言える雰囲気があまりないように感じた。お伺いをたてないと新しいことは何もできないような体制であった。また、教師たちのなかでも「服装違反は非行である」「学校の秩序維持のためにはどうしても変形服は学校のなかに入れない」という見方が主流であった。

しかし、次のように述懐される教師もいた。「自分たちはほぼ全員、上野芝中学校からやってきた。上野芝中は日本一のマンモス校ではあったが、マンモス校であるからこそ生徒指導は大変ラクであった。問題行動が起こってもクラス分けでその問題生徒たちをバラすことによって、ほぼ解消されていった。べつにことさら管理主義的な生徒指導を、という意識はなかったが、生徒たちは素直によく従ってくれた。生徒たちはたぶん、その管理主義的な指導に過剰に適応していたのであろう。そして株分けのように教師たちがこの津久野中学校にやってきて、初めのうち、ラクをさせてもらっていたのかもしれない」と。

何もかもを一からつくり上げなければならない草創期の中学校が「ラク」なはずはないのだが、しかし、このように率直に語る教師たちも多かった。それは大変ありがたいことだった。少しずつではあるが「流れを変えよう」と考える教師たちが学年を越えて増えてきたのである。

2「なかま」と「めあて」

「ひとりでは何もでけへんねんで」

どこからどう取り組めばいいのだろう。学年の教師たちで何度も何度も話しあった。そのなかで私たちに少しずつ見えてきたのは、「自治活動の創造」と「進路指導」ということであった。「あの子たちに自治の力をしっかりと身につけさせてやることによって初めて、自らの進路を自らの手で切り拓いてゆくことができるのではないか」ということである。大切なのは「なかま」と「めあて」である。

生徒会は教師たちの努力にもかかわらず、まったく低調だった。各種委員会も活動停止、生徒議会も開けないような状態であった。そこでまず私たち生徒会顧問会は何度もリーダー学習会を開いた。「この学校を何とかしようや」とひとりでも生徒に思わせることができたら、と考えたのである。生徒会執行部と全クラスの学級代表を招集して、生徒会顧問とともに学校・学年の現状分析や自分たちが何をしなければならないかを学習しあおう、

という場である。次の文章は第一回リーダー学習会で私が話した内容である。

君たちはいま、それぞれに学級代表とはどんなことをする人のことかを考え、発表してくれましたね。その一つひとつに、なるほどと思いました。僕のほうからひとつだけ付け加えさせてほしいと思います。

それは「なかま」という視点です。

君たちは学級代表として、自分のクラスの人たちを「ひっぱって」いかなくてはならないと、さっき何人かの人も言われました。でもそんなことできるのでしょうか。

たくさんの人が掃除をさぼっている。なあ、一緒に冷水飲みに行こう、と友だちに言われたら、うん、行くわ、と言ってしまいませんか。遠足におやつ持って行ったらあかんと言われた。帰りのバスのなか、先生は前で寝ている。うしろのほうでみんなくちゃくちゃガムやアメを食べている。あんたも食べり、言われたら、うん、ちょうだい、と言ってしまいませんか。授業中しゃべりまくっている子がすぐ横にいてる。あんた静かにしいや、と言えますか。でけへんのです。そんなこと絶対でけへんのです。

しかも君たちのなかには、おれ、学代（学級代表）なんかなりたくなかったのに無理やりやらされたんじぃえ、と思っている人がいませんか。みんなかっこよく学代の仕事をあげてくれたけど、そんなもん誰がやるかいな、と心のなかで思っていた人も多いでしょう。

だからいま、自分のクラスを、自分のクラスのみんなの顔を思い浮かべて、さっきのようなことがほんまにできるんかどうか、考えてほしいです。答えは、「でけへん」のです。でも、たったひとつだけできる場合がある。そのことを僕は話したい。

それは、あいつらとまったく同じ土俵で、しかしちょっとだけいま何をせなあかんのかに目覚めたお前たちが、そいつのことをほんまに真剣に考えて言うときだけ、ぜったい聞いてくれる。そら一回、二回は、どつかれるかもしれん。無視もされ、嫌がらせも受けるかもしれん。せやけどほんまにそいつのことを考えて、言うたれ。そしたら絶対いつか、きっとわかってくれる。タバコ吸うてる奴らに、泣きながら言え。あんたほんまに、タバコやめときや、て。お前のそばに座っててしゃべりまくってる奴が、一時間目から六時間目まで勉強わからんとどんな気持ちでおるんか、考えたれ。あほや、て思うな。自分はかしこいんじぃえて思うな。いまここやってるんやで、言うて本開けたれ。鉛筆貸したれ。ちゃんと聞こや、て、小さい声でええから、言うたれ。

そんなことできるかえ！　てか。あほ！　初めからクラス全員にできるかい。自分の一番言いやすい子からやったらええねん。ひとりでもええ。おれ、こいつと一緒に生きていこう、と決めるんや。

リーダーとは何か。そんなこと俺にもわからん。けどこれだけは言える。ほんのちょっぴり、ほかの奴のことを考えはじめたやつのことや。そんな程度でいい。大きなことなんかでけへん。でもお前たちには少なくとも今日集まったこんだけの仲間がいるやないか。ひとりでは何もでけへんねんで。

転勤したての私が「こいつ、どこのオッサンじぃえ」みたいな視線を突きつけてくる生徒たちの多い前で、半分泣きながらこんな感じのことを喋ったとき、この子たちの心と私の心との間に「水路」がさーっと開けたのを感じた。生徒会執行部と学代たちのなかに、明るい雰囲気が盛り上がってきたのである。

生徒会執行部は七月一〇日の堺空襲慰霊祭への参加と、生徒会による平和登校（生徒会執行部と学代有志が、三年生のナガサキ修学旅行、堺空襲慰霊祭参加などの報告を八月初旬に行った。）の実施に向けて動き出した。

おやつ闘争

また、執行部の活動以外に二年生だけの学年生徒会をつくった。二年の学代会議（学級代表による会議）をひんぱんに開き、君たちは二年の学年生徒会の執行部なのだ、と教えた。生徒会活動こそは学校をつくり変える原動力だろう。しかし、最初から学校全体を動かすのはむずかしい。

手始めは二年生六月の林間学舎である。この行事を自分たちで盛り上げ、自分たちで成功させた、という意識を生徒たちに持たせられるかどうかが鍵だと、私たちは考えた。林間学舎の計画立案もまだの段階だったので、学代会議を林間学舎実行委員会とし、学年生徒会担当の三人の教師たちと共にままごとのような活動を開始した。きまり、持ち物、向こうでの行事計画、その他をできるだけ生徒の手によって話しあわせた。そのなかでとくにここでふれておきたいことは「おやつ」の問題である。

本来生徒たちにとって楽しみであるはずの林間学舎なのに、さほど生徒たちが心待ちにしていない。「どうせ、おやつも持っていったらあかんのやろ」「でも隠れて持っていったるねん」「どうせ、向こうで違反した奴がおる言うて何時間も集会するんやろ。怒られてばっかりの林間やと思うで」「あれもしたらあかん、これもしたらあかん……そんなんこりごりや」そんな話がポンポン出てくる。

たしかにそれまでは禁止事項ずくめの、そして教師の決めたとおりに生徒を動かすだけの林間学舎であったようである。林間学舎はもともと集団訓練という意味合いが強い。物見遊山ではない。それはそのとおりだろう。けれど、たとえば「おやつ」を禁止しても、現実に過半数の生徒は持って行くだろうことは目に見えていた。なぜなら、毎日の学校生活のなかでもアメやガムのかすが散乱していたのだから。そんな状態の学年であったのである。

だから大事なことは、「みんな、学校ではおやつを食べるのをやめようや。そのかわり、先生、林間学舎には

1991年５月、雨のナガサキ修学旅行。

おやつを持っていかせてくれ」と、生徒たち自らの言葉を出させることだと思った。そして林間学舎に対して生徒たちが持っている切実な要求は「せめておやつを持っていかせてほしい」なのだから、その要求を自分たちのなかでまとめ、その要求を教師側につきつけさせることだと思った。活動開始である。

学代会議が動き出した。署名運動、学年教師集団への陳情運動、さらには林間学舎まではおやつを学校に持って来ない、という自主的な運動を展開し、教師集団に対し、自らの要求の切実さと誠意を示すことによって譲歩をかち取るという「戦術」が考えだされた。この運動は要求が切実なだけに、日頃、生徒たちについては無気力・無感動という印象しか持ちえなかった教師集団の目を見張らせる高まりを見せた。圧巻は、自分たちの手だけで学年生徒総会を開いて決議をし、教師たちを呼んで学年生徒総会として正式に陳情をしたことである。

結果、二年生の校舎内からアメやガムのかすが消えた。ところが、林間学舎直前に学校におやつを持って来ている子が見つかったので、私たちは林間学舎のおやつを結

局許さなかった。学年の教職員が一致して、断固あかんことはあかん、今回は認められない、と宣言した。しかしこの高まりによって林間学舎そのものはかつてない大成功であったと思う。

そのあとも二学期の文化活動発表会でこの学年は全クラスで舞台発表をして盛り上げ、三年に進級してすぐのナガサキ修学旅行でも子どもたちの実行委員会が中心になって、生涯忘れることのできないほど感動的な旅行をした。三日ともすべて雨、という異例の天候だったが、平和学習とレクリエーションとスタンツに彼らは燃えたのである。そのような高まりのスタートになったのがこの林間学舎であった。

おそらく、生徒たちは全員で取り組んだ「おやつ闘争」のなかで、結果は失敗に終わったとはいえ「自分を変え」「仲間を変える」ことで「このクラスをこの学校を自分たちの手で変えていく」ことができるのだということを初めて実感したのだと思う。自治活動はお仕着せではなく、生徒たちの要求や必要に基づくものでなければならない。自治とは、自分たちの必要、課題、目的を達成するために、自分たちの集団を自分たちみんなの力で組織し、管理し、維持することであり、そのことを抜きにして本当の自治活動の発展はありえないのである。

教師も行事をやるかぎりは、必ず成功させなければならない（つまり終わったあと学年集団がまちがいなくひとつ高まること）ということ、そして自分たちもその行事に没頭して本気になることの重要性、そのようなことを学んだように思う。林間のスタンツ大会で、教師たちは裸になって生徒たちがつくってくれたミニスカートをはき、ランバダを踊り狂ったのである。この頃から学年の教師たちの絆がしっかりとつながっていった。

涙と太鼓の応援合戦

動き出した車輪はとまらない。翌年、三年生では体育大会で初めて応援合戦に取り組み、この学年が下級生を

ひっぱってユニークで楽しい応援合戦をくりひろげた。体育大会の成功は応援合戦だけではないが、紙幅の都合で応援合戦のみ述べることにする。

なぜ応援合戦をやろうとしたかというと、三年生がリーダーシップを発揮して、全校生徒が縦割りで団結し、一体感や充実感を味わうことができるからである。ただし、もともと津久野中には悪い方の伝統も多いから不安もあった。中学生が大人たちに混じって「青年団」に組み込まれている地域のだんじり祭りや、暴走族グループによる問題生徒たちのタテのつながりが大きく、問題の根が断ち切れずにいた。

しかし学年生徒指導担当教師のとことん生徒にかかわる、生徒を愛する生徒指導が、他の教師たちの子ども観、生徒指導観を大きく変えていった。またある女性教師も体当たりの学級指導で、みごとなクラスをつくりあげた。

そんななかでこの時点までにツッパリグループの数が激減していた。これなら応援合戦ができるのではないか、と私たちは考えたのである。応援リーダーたちの実技指導は、学年生徒指導担当教師があたった。服装もガクランは認めず、体操服のみ。男子のなかには短パン、上はだか、裸足でがんばった団もあった。例年なら服装や行動面での指導に終始し、大会当日やそれまでの全体練習のなかで、むしろ上級生の悪いところを見せつけられるような体育大会であったが、この体育大会では三年生が良い面で下級生をひっぱっていけたと思う。閉会式で何人もの三年の生徒や父母、教師たちがさめざめと涙を流した。以下に生徒の作文を紹介する。

体育大会で一番印象に残っていることは、やっぱり、応援合戦です。オレたちはできるだけのことをしました。練習の時、何回もやめようと思いました。だけどオレがやめたらみんなもやる気がなくなると思った。

そして本番が近づくにつれて、だんだん緊張してきた。……そして応援合戦がきた。ちからいっぱい声を出した。みんなも声を出してくれた。でも結果は四位だった。もうめっちゃくちゃくやしかった。くやしく

て泣いた。だけど、めっちゃいい思い出になった。めっちゃよかった。みんなにありがとう、って言いたい。

§

体育大会でやっぱり一番心に残ったことといったら、応援合戦。私はただひたすら太鼓をたたいて声を出すことで精一杯で頭の中はまっ白だった。だから自分が応援している時は優勝のこととか、まったく頭になかった。ただただその時は無我夢中だった。自分たちの応援が終わったとき、私は、ああ終わったんだという気持ちと自分の思うような太鼓がたたけなかったくやしさで、涙があふれてきた。でもこんなに一生懸命になれることってそうたびたびはないんだから、涙があふれた時のあの時の気持ちは忘れたくないと思った。

また次の文章は体育大会のあとでいただいた保護者からの手紙の一部である。

……入場行進での緊張感、競技での真剣な取り組み、我を忘れての応援でした。

一番感動したのは、やはりあの『応援合戦』でした。「すごい！　ようこれだけのことできたね！」応援団長のお腹の底からしぼり出すような声、団員のひとつになった声、しっかりとこの耳に残っています。「点なんかつけられへん。どの軍もすごいやん……」と、心のなかでそうつぶやきました。

お昼に玄関のところで、「武先生、生徒たちよくがんばりましたね」と私。「ほんとうに、ようここまでやってくれました」と言った武先生の声が震え、目には涙がにじんでいました。

先生方と生徒が一体となって、ある日は早朝練習、またある日は放課後暗くなるまでの応援旗づくりにとがんばってきました。点数によっての順位は一応つけられましたが、どのクラスも『優勝』だったと私は思っています。

三年生にとっては中学生活においての最高の思い出となり、また『何事もやればできるんだ！』という自信につながっていくことでしょう。

先生方と生徒たちに、

「今までにない最高の体育大会を見せてくれて、ありがとう！」

新時代にエールを

また、三年秋の文化活動発表会（全校文活）では企画運営のかなりの部分を生徒会で担い、オープニングセレモニーでは初の和太鼓団技に生徒会が取り組んだ。そして全校全クラスあげて舞台発表に取り組んだ。

生徒会がつくり出した文化活動発表会のテーマは、「君は燃えているか？――津久野中の新時代にエールを」というものだった。管理されることに慣らされ、その鬱憤をいままでは無秩序な反抗（規則違反や教師への反抗・暴力）で晴らすしかすべを知らなかった生徒たちの目には、この起こりつつある自分たちの学校の変化はまさに

1991年11月、文化活動発表会での和太鼓団技。

「新時代」と映ったのであろう。以下、学年文活（学年文化活動発表会）で代表に選ばれ、全校文活でも劇発表をした私のクラスの生徒の作文を紹介する。彼らは熱血教師を主人公とした創作劇を演じたのである。

先生、私、あの劇に出演できて本当によかったと思う。今までは文活なんか……と思って、まわりの照明とかしかやったことなかった。あんなに感動できるんやったら、もっと早くからやっとけばよかった。ありがとう。三年一組のみんな。すっごい楽しかった。よかった。成功やな。大成功やな。台本、大道具、音響、照明……すべてがこの成功につながったと思う。みんな、一組、最高の劇やったと思えへん？

§

俺は二年の文活が終わってから、めっちゃ後悔した。というのも去年、いろいろ協力できなかったからだ。だから来年は絶対がんばって後悔せんようにしようと思った。そしてその時がきた。

自分なりに精一杯やった。だんだんみんなも協力してくれてきた。そして本番、今までで一番うまくできた。ぼくはなんかしらんけど、なみだが出そうになった。これで中学で最後の秋が終わるんやなぁ〜と思うと心に何かジーンとくるものがあった。

3　自分の手で扉を開く

真夏の高校訪問

林間学舎の事前指導と並行して、私たちは「二年生による高校訪問」を準備した。自治活動と進路学習を結び

つけようという最初の試みである。

夏休みに生徒たちだけで高校を訪問するということが本当にできるのかどうか、正直言って賭だった。班の全員がそろうのか、問題や事故を起こさないか、いいかげんな態度で先方の印象を悪くしないかなど、不安材料はいっぱいあった。けれど彼らを信頼して送り出そう、と学年教師一致で決めたのである。

俺はあほや、俺らの学年は悪いねん、とサジを投げている生徒たちに目標を持たせるには、やっぱり「高校」である。自分たちで班をつくり、調べる内容を班で企画し、実際に電車に乗り高校に行く。津久野中の代表として高校の先生方にお会いし、いろんなことをお聞きする。校舎のなかも見せてもらう。

子どもたちに高校のイメージ、自分たちも高校生になるんだ、という意識を持たせようというのが私たちの願いであった。もちろん、「みんなそろって高校に行こう！」と呼びかけた。現実には全員が高校進学するわけではないが、二年生の夏の時点では、この呼びかけはすっと彼らのたましいに届いたようである。

また三年生の切羽詰まった時期でないので、割り当てられた高校に抵抗感もなく行けたように思う。

結果は、病気以外の欠席はなく、私たちが聞いたかぎり何の問題行動もなかった。

班ごとにつくった新聞と作文によって、『私たちの高校訪問』という数十枚におよぶ冊子を作成した。生徒たち自身による進路選択の資料ができあがったのである。四二校の高校が、いや高校そのものが親近感をもってあの子たちに迫ってきたようだ。父母からの反響も大変なものだった。二年生による高校訪問は、以来ずっと次の学年に受け継がれ、津久野中の進路指導の重要な柱となっている。

また三年生の二学期には、それぞれの志望校の訪問を個別に実施した。高校選びを偏差値と知名度だけで決めてもらっては困るからだ。自分の青春時代の、たぶんもっとも輝かしい三年間をあずけるところの学校である。悩み、考え、何度も足を運ぶなかで「ひょっとしたらこれがぼくの高校かな」と思えるような学校を見つける。

のでは、当然それに拍車がかかるわけである。

学校の荒廃と、いわゆる学級指導の面での私学との格差でもあろうと考えられる。公立学校、とくに公立中学校に対する親の幻滅の原因は、校内暴力・いじめ等の問題になった。津久野中は荒れて話題になった。

近年の価値観の変化には乗れないものがある。そのなかに「公立学校に対する幻滅」や「教師に対する信頼感の喪失」がある と思われる。公立学校、とくに公立中学校に対する親の幻滅の原因は、校内暴力・いじめ等

しかし私たちにはもうひとつわらいがあった。それは公立離れ・私立志向のさきやかな抵抗である。

以来ずっと津久野中の重要な生徒会行事となっている。

これは各小学校に圧倒的に喜ばれた。不安いっぱいの小学六年生にとって良きガイダンスとなったようである。

活の楽しさを発表させることによって、さらに津久野中生としての自覚と自治意識を高めようとしたのである。

ジョンソンーや十勝に取り入れて三小学校を訪問したのである。生まれ変わろうとしている津久野中の学校生

プ、部活動の紹介など、数十人ーズにおよぶものである。この中学校にはテキストとビデオ、スライドを持ち込み、制服のファッ

「学代になって」というような作文や体育大会、文化祭など行事や日常の学校生活、きまり、校区のトラブル、ストーム

小学校へ出張ガイダンス

三月、私たちは生徒会で校区の三つの小学校を訪問した。

生徒会執行部と一、二年生の学代たちが前もって学校紹介の申子を編集した。これは「生徒会執行部になって」

「学代になって」

「一生懸命頑張って勉強して、一生懸命頑張って決めた学校が、君のめざす学校なんや」「一般的に

そのとき心に電気が走る。それは「出会い」以外の何ものでもない。

良い学校、なんてない。良い学校というのは、自分にとって良い学校というのが本当ならだけや。それを見つけるんや」と、私たちは訴えた。

府立　（普通科）
東百舌鳥

5組　多喜　知恵
高校訪問をしてまず初めに思ったことは、通学に時間がかかってしんどいなあ、と思ったことです。そのためには早く起きて、朝のラッシュ時に電車やバスに乗らなければいけないと思うとぞっとしました。
校舎をみて「きたないなあ」とみんなで言っていました。いつも、新設のきれいな学校にいるから、そのギャップがすごかったです。
東百舌鳥高校は公立なので、校則もあまりきびしくなく、クラブの人たちもリボンをつけたりして、中学と比べると自由でいいなあと思いました。
けど、テストで欠点を取ると落第になるので、勉強はしっかりしなくてはいけないみたいです。
クラブ活動がさかんな高校で、私が行ったときにもサッカー部やラグビー部や水泳部が練習していて、中学よりも厳しそうでした。近畿大会へ行くぐらいのクラブもあって、すごいなあと思いました。
高校訪問に行って、ずっと先だと思っていた受験があと一年に近づいてきたことを実感しました。

§

5組　中井　智子
…頭髪検査はない、ということでした。髪型は自分で判断しなければならないそうです。あまりひどいときだけ注意して散髪しに行かせるそうです。そこが中学とは全然ちがうなと思いました。

東百舌鳥高校

5組2班
西脇・冨川・鈴木
中井・多喜・山口

〒593
堺市土塔町2377-5
TEL 0722-35-3781

学校に行くまで
津久野駅 →JR阪和線→ 三国ヶ丘駅下車 →南海線→ 大野芝下車 →徒歩5分
（市内電車）

どんな学校??
・平年16期生をむかいいれる。
・知、徳、体、これが教育方針だ!!
・校則は『きもちよく生活するための最低限のもの』 創立記念日 6月16日
・授業料は、年額 82800円
・AM8:35までに登校 PM5:00までに下校。
・生徒現員は1693人（定員1700人）
・定期テスト5回 他宿題テストや実力テストetcがあり、40点以上が合格。
・自転車通学は許可制。今約1300台。
・普通科だけ。週34時間。
・食堂のメニューは、ふつうで弁当の人が多い。昼休みは45分。

学校行事
(4月) 入学式、健康診断
(5月) 遠足、スポーツテスト
生徒会研修、進路講演会
(6月) 学校祭(体育の部)芸術鑑賞
(7月) 夏期講習、水泳講習
(9月) 学校祭(文化の部)
(10月) 校内大会、進路説明会
(11月) 進路講演会
(1月) 修学旅行(志賀高原スキー)
(2月) 耐寒訓練、卒業式

クラブ活動がさかん
学校内には、作法室や柔道場がある。とくに、バスケ、バレー、水泳は近畿大会出場。他にけん道、陸上もつよい!! 野球部なし。

陸上　テニス(女)
テニス(男)　卓球(男)
卓球(女)　サッカー
剣道　柔道、バレー(男)
バレー(女)　バスケ(男)
バスケ(女)　ハンドボール(女)
体操、山岳
水泳　ラグビー
ジャズダンス

美術工芸、放送、ESS
茶道、華道、オーディオ生物
演劇、写真、コーラス、オーケストラ、ブラスバンド、アニメマンガ
アマ無線、書道、軽音楽
図書、ボランティア、化学
数学研究、社会問題研究会
家庭科、鉄道研究会

・身体障害者はうけいれます。義援学級はない。てすりはあるがエレベーターはない。
・進路は、2割が就職
8割が進学。（4年制大学、短期大学、専門学校）
・夏休み、図書室で勉強できる。（冷ぼうあり）

生徒たちの手による『私たちの高校訪問』の一部。

また教師に対する信頼感の喪失の原因は、一言でいうと、管理主義教育の破綻による教師に対する幻滅ではないか。親の高学歴化も根底にあるだろうし、「金八先生」との格差、というのもあるかもしれない。

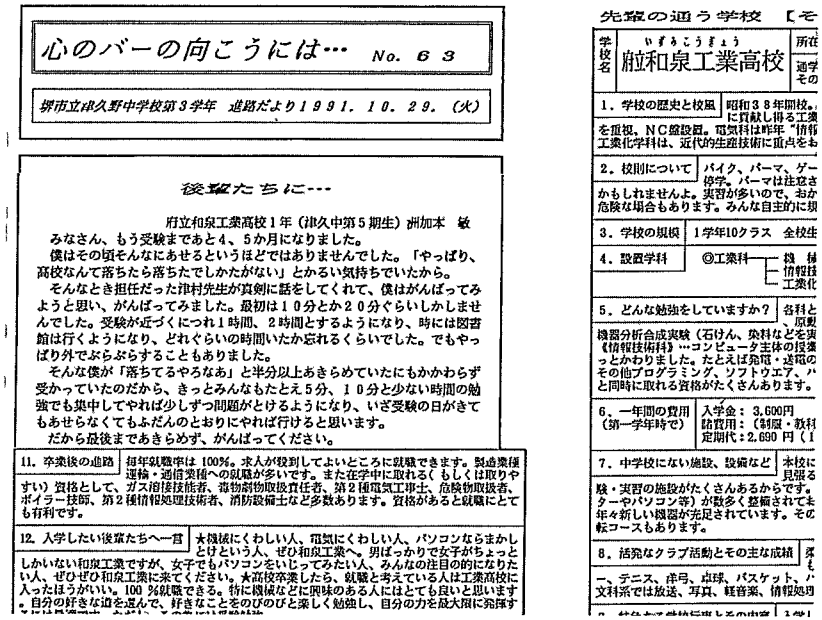
私立中学校独特のすばらしい教育があるのは事実だし、私立の良い面はいくらもあるだろう。けれど公立中学校の良い面だってあるはずだ。私はそれを、学力で子どもを切り捨てていないこと、さまざまな子がクラスにいることだと考える。たしかにそのことによる困難も多いけれど、さまざまな子がいるからこそさまざまな子の良さを知ることができるのではないか。そういうことを知らないで、風評だけで公立中学校はすべて悪い、私立中学校はすべて良い、あるいは公立中学校ではいじめられる、私立中学校ではいじめがまったくないなどという発想には疑問を持たざるをえない。

良い学校というのは、その学校を卒業するとき、ああ私はここに来てほんとうによかった、良い仲間がいた、良い先生と巡り合った、三年間が充実していた、ほかでは学べないようなことを学べた……そのように思える学校のことなのではないのか。

私たちは変わりつつある津久野中学校、公立中学校の本当の姿を見てもらいたかった。それもまったく生徒たち自身のアピールによって。

進路だより『心のバーの向こうには…』

三年生になった。私たちは進路だより『心のバーの向こうには…』を発行した。内容は教師たちの熱い想い、子どもたちの作文、先輩からの手紙、先輩の手による学校紹介、その他、そのときそのときに必要な進路情報を掲載して、一年間で一二三号発行した。中心は教師たちの人生を語る進路指導と、先輩の手による学校紹介である。これによって日々の終礼（終わりの会）で継続的に進路学習ができるようになった。



心のバーの向こうには…　No. 63

堺市立津久野中学校第3学年　進路だより1991. 10. 29.（火）

後輩たちに…

府立和泉工業高校1年（津久中第5期生）洲加本　敏

みなさん、もう受験まであと4、5か月になりました。

僕はその頃そんなにあせるというほどではありませんでした。「やっぱり、高校なんて落ちたら落ちたでしかたがない」とかるい気持ちでいたから。

そんなとき担任だった津村先生が真剣に話をしてくれて、僕はがんばってみようと思い、がんばってみました。最初は10分とか20分ぐらいしかしませんでした。受験が近づくにつれ1時間、2時間とするようになり、時には図書館は行くようになり、どれぐらいの時間いたか忘れるくらいでした。でもやっぱり外でぶらぶらすることもありました。

そんな僕が「落ちてるやろなあ」と半分以上あきらめていたにもかかわらず受かっていたのだから、きっとみんなもたとえ5分、10分と少ない時間の勉強でも集中してやれば少しずつ問題がとけるようになり、いざ受験の日がきてもあせらなくてもふだんのとおりにやれば行けると思います。

だから最後まであきらめず、がんばってください。

11. 卒業後の進路　毎年就職率は100%。求人が殺到してよいところに就職できます。製造業種運輸・通信業種への就職が多いです。また在学中に取れる（もしくは取りやすい）資格として、ガス溶接技能者、毒物劇物取扱責任者、第2種電気工事士、危険物取扱者、ボイラー技師、第2種情報処理技術者、消防設備士など多数あります。資格があると就職にとても有利です。

12. 入学したい後輩たちへ一言　★機械にくわしい人、電気にくわしい人、パソコンならまかしとけという人、ぜひ和泉工業へ。男ばっかりで女子がちょっとしかいない和泉工業ですが、女子でもパソコンをいじってみたい人、みんなの注目の的になりたい人、ぜひぜひ和泉工業に来てください。★高校卒業したら、就職と考えている人は工業高校に入ったほうがいい。100%就職できる。特に機械などに興味のある人にはとても良いと思います。自分の好きな道を選んで、好きなことをのびのびと楽しく勉強し、自分の力を最大限に発揮す

先輩の通う学校

学校名　産和泉工業高校

1. 学校の歴史と校風　昭和38年開校。に貢献し得る工業を重視。NC盤設置。電気科は昨年"情報工業化学科は、近代的生産技術に重点を

2. 校則について　バイク、バーマ、ゲー停学。バーマは注意さかもしれませんよ。実習が多いので、おか危険な場合もあります。みんな自主的に規

3. 学校の規模　1学年10クラス　全校生

4. 設置学科　◎工業科―機械 情報技 工業化

5. どんな勉強をしていますか？　各科と、原動機器分析合成実験（石けん、染料などを演《情報技術科》…コンピュータ主体の授業っとかわりました。たとえば発電・送電のその他プログラミング、ソフトウエア、ハと同時に取れる資格がたくさんあります。

6. 一年間の費用（第一学年時で）　入学金：3,600円　諸費用：（制服・教科定期代：2,690円（1

7. 中学校にない施設、設備など　本校に見張る験・実習の施設がたくさんあるからです。ター・パソコン等）が数多く整備されてま年々新しい機器が充足されています。その転コースもあります。

8. 活発なクラブ活動とその主な成績　ー、テニス、庠弓、卓球、バスケット、文科系では放送、写真、経音楽、情報処理

進路だより『心のバーの向こうには…』（一部）。

なかでも「卒業生による学校紹介」と「卒業生の手紙」という記事は、先輩―後輩のつながりのなかで進路を考えさせようとのねらいがあった。これは「小学校訪問」ともつながっている。「進路」というのは、何も塾が言うような偏差値で決めるものではない。先輩たちから高校のことを聞く、後輩たちに中学校のことを教えてあげに行く、そういうことなのだ、と。異年齢集団との接触を通して、自らを変えてゆく契機をつかみ取ってほしいという私たちの願いである。

こうして各学校のくわしい、しかも先輩の手による紹介を読むことによって、少しずつではあるがランクにこだわらない進路選択をする子が出てきた。普通科ばかりでなく、職業学科や専門学科を希望する子も増えた。ほうっておけば普通科ばかり、しかも「だるまさん落とし」のごとく偏差値順に並んでいく進路先が、幾分変化してきたのである。

大阪府の第八学区の進路状況は、細かい偏差値の違いによって一八もの公立普通科高校が序列化

された「輪切り・選別」の受験体制である。「この偏差値で〇〇高校へ行くのはもったいない」とか、「ランクを落として受験させる」とか、「うちの中学は、偏差値の高い高校にたくさん毎年送り込むから進路指導はうまくいっている」とか、そんな会話が日常的にかわされているのである。

だが、塾などが与える偏差値情報以外に、進路だより連載の生の情報を与えていくことと、自らの目で高校を見てくる指導によって、「偏差値の呪縛」から少しは解き放たれるのではないか。わずかなりとも、振り分けられる進路選択から、自ら選び取る進路選択への転換が可能になったのではないかと思う。

私が、前任校の仲間とともにこのような進路だよりの実践を開始して七年、津久野中で二年生による高校訪問を始めて三年になるが、その間堺市内の各中学校でも同種の実践が少しずつ増えてきた。ささやかな実践が、この受験体制をつき崩していく第一歩になればと思う。

なぜ学ぶのか

私たちは、「なぜ学ぶのか」という勉強することの意味を九教科にわたって進路だよりで連載した。また『学習について』という冊子をつくって進路学活で活用した。

また私は社会科の教師として、とりわけ社会科が暗記中心の受験学力に偏りがちな傾向を打破するために、定期テストに「論文問題」をはじめとする記述式問題を多く取り入れてきた。社会科は丸暗記教科にも流されやすいが、学ぶことの意味、社会を見る目を養う最適の教科であると私は考えている。

教科のことなので詳述はさけるが、以下に問題のひとつの例と、生徒の答案を紹介する。

【問題】

一九二八年、普通選挙制実施後初めての総選挙が行われました。警察による激しい選挙妨害・弾圧にもかかわらず、京都から山本宣治が当選しました。彼は四六六人の代議士のなかたったひとり治安維持法改悪、いや治安維持法そのものに反対して活動するのですが、国会開会中、宿舎にしていた東京の旅館で右翼団体の一人に暗殺されるのです。

治安維持法＋特高警察によって国民は基本的人権を剝奪（はくだつ）され、個人の尊厳を蹂躙（じゅうりん）され続けました。治安維持法の最高刑を死刑にするという改悪に賛成（積極的、消極的をふくめて）した四六五人が正しかったのか、それとも非国民・国賊・アカとののしられ、殺されても反対した山本が正しかったのか……。山本は殺される二日前大阪で行われた全国農民組合の大会で、集会を弾圧するために来ていた警官隊と群衆がもみあうなかで演説をしました。その最後が次の言葉だったといわれています。「山宣ひとり、孤塁を守る。だが私はさびしくない。自分の背後にはこんなにも多くの大衆が支持してくれているのだから……」。怒号と喧騒（けんそう）の中で、しかしこの彼の言葉はしっかりとその集会につどった人びとの心に残り、記録されたのでした。

＊これを読んで、いままでならった歴史や公民の知識をフルに活用しながら自分の意見や感想を自由に述べなさい。（四百字程度）

【答案】

……ほんま、こんな人がいるから日本がかわる、いや歴史がかわるといってよいのではないやろうか。でもほかの代議士はこれに気づかへんかってんから、それはかなしいことやと思う。非国民、国賊、アカとののしられた山本さんのほうが、ぼくから見たらなんかしらんけど勝ちといっていいんとちゃうやろうか。こ

の先生が書いてくれた問題の文の下から五行目の最後のところから下一行、めっちゃ感動した。

この論文問題予告のプリントをもらったその夜、俺は机の前にすわりこんで、日本のきたならしさに腹がたって腹がたってもう歯をくいしばっていたら、いつのまにか目から涙が出ていた。この時、俺らがしょってたつ世の中はこんなん絶対にしたらあかん、いやもう二度とこんな社会にしたらあかんねや、とぼくは手をにぎりしめながら心にこう問いかけました。「ほんま、最低や、この世の中、みんなちょっと過去を忘れすぎてへんか？」

§

この文章を読んでまず不思議に思ったことは、なぜ四六六人のうち四六五人もこの治安維持法に賛成していたのか、ということだ。

それは小さいころからそのような教育を受けてきているからだ。一八九〇年からはじまった「教育勅語」を中心に、個人は国家のためのもの、いや個人は天皇のためのもの、という教えをうえつけてきたからだ。「教育」は一歩まちがえばおそろしい。小さな子どもは大人のいうことを何でも正しいと信じるからだ。そして小さいころに身についた考え方は、ずっと大人になっても同じということが多いからだ。

またこの時代の人たちは「自分の意思」がなかったように思う。…（略）…

けれども山本宣治はちがっていた。こんな世の中でも、自分の意思をきっちりと主張できたのだ。これは今の時代でも、すごいことなんだ。ましてやこんな時代に……。…（略）…

山本宣治はひとりぼっちだったように最初は思ったが実はちがった。人びとはこんな心をだれしも持っていた。それはいつの時代でも同じ。ただ口にガムテープをはられて、何も言えない、また何も思えない人ばっかりを政府はつくり出していた。だから山本宣治は決してひとりではない。言ってみればみんなが山本宣治の味方だったのだ。ただそれは表面的には現れなかっただけだ。

今の時代に自分たちが心の中で思っていることを言えるのは、この人たちのたたかいのおかげだということも「公民」でならった。世の中がかってに今のような自由な世の中になったのではない。人びとの努力がここまで自由をおしすすめてきたのだ。

……だからもっとちゃんと世の中を見て、いやなことはいやといい、いいと思うことはいいといい、自分の体をはっても自由をまもっていかなければならない。山本宣治の精神を受けついでいかなければならないと思う。

最後の「授業」

進路指導とは「〇〇高校に何人合格させた」とかが問題ではなく、一番大切なのはどのようにこの中学校を卒業していくのか、ということを深め、つきつめていくことではないだろうか。

公立中学校は高校へ行くための単なる通過点なのではない。この公立中学校で、もし彼らをしっかりと主人公として位置づけ、育てることができたなら、きっと彼らは卒業式で熱い想いをかみしめるだろう。

私たちは卒業間近のなにかと慌ただしい時期に、単に受験指導のみに振り回されないで、「卒業指導」を大切にしようと話しあった。中学校を卒業するというのはどういうことなのか、を繰り返し繰り返し、考えさせたのである。

そして三年生全員に「私のわかれのことば」を書かせた。卒業式は私たちの熱く長かったかかわりの最後の場面である。最後の「授業」である。そこで君は何を語るのか、と突きつけたのである。

この二五〇人それぞれの宝石のような言葉をすくい上げ、各クラスから選出された卒業式準備委員会のメンバーたちの手によって、「わかれのことば」が作成された。それを以下、抜粋して紹介する。

第六期生　わかれのことば

―フレー、フレー、津久野っ！
―声出してくれや！
―たのむわ、手、たたいてくれや！
応援合戦は、そんな団長の叫び声から始まった。
リーダーたちが懸命になって、
みんなを引っぱっていった。
バラバラだったみんなの気持ちが
しだいに一つになった。
いよいよ本番
各軍の考えに考え抜いた独自の演技は、
どの軍も優勝だった。
澄み切った空。
響きわたる拍手。
押しよせる歓声。
真剣なまなざし。
あふれるほどの思いが込み上げてきた。

思いおこせば、入学したとき
私の空には
たくさんのしゃぼん玉が浮かんでいた。
がんばろう。自分を変えよう。
色んなことをしよう。もっと素敵になろう。
だけどそんな心のしゃぼん玉は、
感動という風も吹かない
協力というあかりも灯らない
そんな学校生活の中で
一つ一つ消されていった。
一年生のあの頃は、
むなしさばかりがながれていった。

だが、僕たちの学年が、大きく変わった。
みんなでおやつを持っていこう。
楽しい林間学舎にしよう。
学代が中心となり、みんなに呼びかけ、
遅くまで討議し続けた。
僕たちだけの力で、
学年集会をひらいた。
みんなの力を合わせて頼もう！
初めは頭を下げなかった友だちも、
声を出さなかった友だちも、

力を合わせ必死に頼んだ。
生徒会は自分には関係ないんだ。
そう思っていた人はたくさんいた。
でも、一人ひとりが生徒会なんだ。
みんなが一つにまとまれば
物事を変えていけるんだ。
それが僕らの自信になった。
僕らの心に火がついた。

心の火はさらに燃え上がった。
雨雲に覆われた長崎の街は、
私たちに何かを訴えているようだった。
傘をさしながら見上げた平和像
たくさんの人々の願いが、
この大きな像に込められている。
力強さの中に感じた悲しみ。
原爆資料館で目をそらさずに
しっかりと胸に焼きつけた数々の写真。
旅館で聞いた下平さんの話。
こんな目にあいたくない。
戦争なんかしたくない。
みんなの心に生まれたたくさんの想い。

…（略）…

今にも泣き出しそうな私と、
うつろな顔をした親と、
成績表とにらめっこしている先生と……。
重苦しい空気の漂った小さな教室で、
これから歩む新しい世界を、
いろいろな気持ちを込めて決定したあの時。
励ましてくれた友の顔が浮かんだ。
どうしても行きたい方向へ進めず、
くやしい思いでいっぱいの心が、
私の中に生まれた。
でも、
今日、この日から、
進んでいく新しい世界へ、
新たな気持ちで、入っていきたい。

言われたことしか出来なかった私たちを、
心から訴えて、必死に訴えて、
少しずつ変えて下さった先生方。
反抗したり、やつあたりをする私たちを、
優しく、暖かく見守ってくれたお父さん、お母さん。

私たちを陰から支えてくださったすべての人たちに、
いつもはずかしくて言えなかった言葉。
今までの気持ちを伝えるには
短すぎる言葉だけど、
感謝の気持ちを込めて言います。
―本当にありがとうございました。

在校生のみなさん、
僕たちは津久野中学校が大好きだ。
だから、つぶさないでくれ！

今、私たちは、
胸に込みあげてくる
三年間の熱い思いと共に、
新たなる人生に向かって、
今、自分の手で扉を開く、
自分の夢に向かい、
限りない可能性を信じ、
自分の進路に誇りを持って、
自分の手で扉を開く。
くじけそうになった時でも、
仲間と共に歩んで行こう！
そして、
人の痛みがわかるような人になろう！

一九九二年三月一三日　　卒業生一同

おわりに――「日の丸」「君が代」のこと

一九九二年一月の末、分会長であった私は校長先生から呼ばれた。先生はこう言われた。「今日の卒業式検討委員会やけどな、『君が代』斉唱、あれ、はずそうと思うのや。ぼくはこの三年の先生方ががんばってきてくれたことをものすごく感謝している。そんな先生らと一緒になっていまの津久野中をつくってきたと思っている。その先生らの気持ちを踏みにじって『君が代』を歌え、というのは、ぼくは人間としてよう言わん」と。

前年から卒業式の「日の丸」「君が代」のことで何度も職員会議を開いてきたが、私たちはただ単に「日の丸」

や「君が代」の歴史やその意味を訴えるだけでなしに、卒業式とは何か、ということを話しあいつづけた。

「卒業式は最後の授業です。私たちがあの子たちに三年間くたくたになるまでかかわって、その最後の学活であり、最後の学年集会であり、最後の授業が卒業式なんです。そのときに最終的に、ああ、おれは津久野中学校に来てよかった、ここで仲間たちと出会った、先生たちと出会った、生涯忘れられないような多くのことを学んだと、もしあの子らがそう思ってくれたら、私たちの苦労の大部分は溶けてゆくのです。なのにその一番大切な最後の授業で、私たちが一番歌いたくない歌を、あの子らと一緒に歌え、と言うのですか。私たちの大切にしてきた言葉を掲げるならいざ知らず、つらい『日の丸』を正面中央に張りつけるのですか。私たちはその方向にむかって頭を下げるのですか。生活指導や進路であの子らと本気に泥まみれになってやってきたことの最後の最後がそれなんですか……」と。

校長先生はその言葉を一年間考えつづけた、というのだった。「ぼくは校長としては、とくにいま、『日の丸』『君が代』を皆さんにお願いせなあかん立場やけど、せやけど人間としてはやっぱりそれはようせん」と。

私は泣いた。六十近い先生が、こんなことを言われるのは、ほんとうに偉い先生だと思った。たしかにいまの時代は大変な時代である。公立の中学校はとくに全身傷だらけだ。けれども、やっぱり子どもを信頼し、仲間を信頼し、人間を信頼したい、私はそう思った。

こうして彼らは、私たちと熱い二年間を共に生き、卒業していった。私たち教師は、「自治活動」を土台にして「進路指導」を展開してきた。それは「子どもたちに自治の力をしっかり持たせることで初めて自らの進路を自らの手で切り拓いてゆくことができる」と考えたからであった。

自分を変え、仲間を変え、学校を変え、社会を変える。その一歩を踏み出した子どもたち。私は彼らにエールを送りつづけるだろう。

第四章　どうでもいい子はひとりもいない

――東大阪市立玉川中学校――

松井　登（まつい・のぼる）

八六年から三年間、教師たちは、いじめや暴力、生活のくずれに必死に取り組んだ。しかし、気がつけば叱責や「きびしさ」に頼っていた。生徒たちの否定的な面ばかりに目を奪われていたのだ。

「自分を大切にし、他人を大切にする」――新たな三年間が始まった。

1　熱意だけでは救えない

東大阪市立玉川中学校（以下「玉中」）は、創立四〇周年を超える歴史を持つ学校である。当時二八クラス、約千百人の生徒と五十名ほどの教職員が在籍していた。東大阪の真ん中に位置し、教室の東の窓から生駒の山が緑色にくっきりと見える。校区には、旧い家並みと田んぼや野原が残っている。石田神社の夏祭や秋祭、墓地周

辺の道路に露天が立ち並ぶ八月の岩田の墓市は、毎年どっと繰り出した人びとで賑わっていた。父母のなかにも玉中卒業者が多数いた。一方で、この地域も都市化の波で、大小のマンションや文化住宅、一戸建の建売住宅が空き地に建ってきており、入居者は他地域から転入してきた人が多かった。これらの新居住者に比べて古くからの居住者は親戚や知人も多く、横のつながりも強かった。彼らは、同窓会や歴代ＰＴＡを通じて学校とのつながりを深めていた。

「低学力」「いじめ」「生活の乱れ」

当時、Ｚ小学校からの申し送りで新一年生の各クラスのようすを総合すると、低学力の状態である子が一三・五％、「いじめられっ子」で今後もいじめられるのが心配な子が三・九％、家庭環境などから生活の乱れが心配な子が七・八％であった。そして、小学校担任が「低学力」「いじめ」「生活の乱れ」などのうちひとつでも心配だとする子は、入学予定者の二三％を占めた。これはＹ小学校でも同様の状態であるので、これらの生徒を中学校の四四人クラスに編成すれば一クラスに「心配な状態の子」が十人ほど在籍することになる。

年度当初に、どの教師が何学年を受け持つかを決める校内人事は、ほとんどの場合学年持ち上がりで、その学年教師集団が入学してきた生徒を卒業まで受け持つ体制があった。毎年学校全体の目標や計画もたてられていたが、学年の教師集団によって教育論はそれぞれ異なっていたので、教育目標や方法も少しずつちがっていた。このようにして、学年を構成する教師により、三つの学年がそれぞれ独自の方向に進むようになった。このため自分たちが受け持った生徒集団が、三年間でどのように育つかによって、その学年の生徒観や目標・方法まで問われることになった。

「荒れ」の裾野は広がった

一九八六年度入学の一年生は、入学当初より学校生活にけじめがなく、馴れ馴れしさが目立った。新しい中学生活のなかで、授業やクラブ・生徒会活動、学校の規則を新鮮な気持ちで理解して受け入れようとする姿勢は、集団全体としてはあまり見られなかった。とくに授業態度に落ち着きがなかった。子どもたちは、授業が始まっても集中できず私語が多い。そのうえ教師の説明を最後まで聞かずに、授業に関係ないことまで口ぐちに思いついたまま質問することも多いので、教師が真剣に話していることも、なかなかまじめに受け止められない状態であった。一年生の一学期も終わる頃になると、勉強をあきらめる生徒がぽつぽつ出てくる。クラス全体がけだるい雰囲気になり集中力がなくなる。やがて気にいらない教師への集団的反抗となる。二学期以降になると、教師によって授業のやりにくいクラスが出てきた。

この間、いじめや器物破損なども何度か起こった。これらの指導を通して教師をがく然とさせたことは、関係した生徒に事実関係を問い質しても平気でうそをつき、なかなか本当のことを言わないということだった。彼らは、事実を正直に述べて教師と共に間違いを正していこうと思うほど、「教師」というものを、最初から信頼していないようだった。しかし、生徒たちが信頼していないのは「教師」だけではなく、仲間や友だちなど「人間」一般に対しても同じであると思われた。

周囲の人間との心のふれあいが希薄な集団のなかに、力に憧れるグループがあらわれる。一部の女子グループが、パーマ・授業エスケープなど目立った行動をするようになる。やがて、ケンカ・他校との交流へと発展していった。そして男子のなかにも、変形ズボンを履いたり、ほかの生徒に暴行を加えたり、教師をからかったりするものが出てきた。

ここで、学年が荒れだすと「あの学年はなんで、ああなるんや」「あんなことしてるからあかんねん」と、管

理職や他学年の教師たちからの批判は吹き出し、父母は不信を募らす。だからどの学年でも、生徒たちのエネルギーを引き出す余裕もなく、まず「他学年に迷惑のかからないように」「とにかく荒れさせないように」と気を遣う傾向があった。

ところで、この頃ほとんどの上級生はおとなしいものだったのである。ベテラン教師は、生徒の声が小さくて意欲が乏しい状態について「本当は生徒の憤懣もあるはずなのに、反発も返ってこないのはやはり不満だ。しかし、これはわれわれがこんな子にしようと育ててきた結果ではないか。実は、このような教育をわれわれは『成功』させてきたのではないか」と嘆いた。

この学年集団が二、三年生と進むにつれ、学校生活でいろいろな行事の経験を通し生徒会自治にふれながら友だちや教師に対する一定の信頼感や集団意識が育ってきた。しかし反面、問題行動も広がってきていたのである。

授業中に教師の指導を挑戦的に無視し、公然と漫画を見る子があらわれたり、配られたばかりのプリントが紙吹雪や紙飛行機になって教室や校庭を舞うようになった。こうしてクラスによって授業態度がきわめて悪くなり、騒がしくて成立しない授業も出てきた。教師に対する反抗やからかいも露骨で多くなってきた。彼らは、教師からの強圧的な指導を嫌い、教師の「力」を見て従うかどうかを決めていった。このように、生徒は教師を「強い先生」と「弱い先生」に分け、後者に反抗やからかいが集中するようになった。さらに、アメ・ガム・喫煙・授業遅刻が増えてきて、これに対する個人の罪悪感もあまり感じられない状態で、「荒れ」の裾野は広がっていた。

他方では、授業態度などに出ない深刻な「荒れ」が進行した。生徒の一部に他校生との交遊・バイク・シンナー・喫煙を繰り返す男女それぞれのグループができた。彼らはよく授業をエスケープして校舎の片隅で、漫画を見たりタバコを吸ったりして、親や教師の指導も無視しつづけた。

そのうち、校舎の片隅で行われていた喫煙がやがて放課後の教室で行われ、ついには休み時間にほかの生徒の

いる前で堂々と行われるようになり、喫煙者の数も増えていった。また、シンナーは校内に持ち込まれ、トイレや教室でも見つけられるようになった。吸引者の数も増えた。卒業生・下級生とのつながりも強め、放課後卒業生のバイクに乗って校庭に入ってくる生徒もいた。さらに、不登校生徒も増加傾向を示し、これには、怠学的なものだけでなく、登校するエネルギーがなかったり、神経症的なものも増えてきていた。

このように学校で問題行動が続出していくと、職場では、教師の本音が出なくなり笑顔が消え、罵りあいがときどき起きるようになった。

三年生の終わり頃には、生徒たちは落ち着き、思いやり・友情・信頼・真面目さなども育ってきたが、教師が目指していたものとは大きな隔たりを残したまま、時間切れで卒業していった。中学時代、学校生活のなかで自分をしっかり成長させられなかった子どもたちのなかには、進路先で挫折していった者も少なからずいた。

「体罰や管理主義はダメ」とは誰でも言えるが……

以上のようにこの生徒集団は、入学してきたときからけじめがなく教師に対する不信が強かった。授業態度も悪く、教師が優しく言いきかせても指導を聞き流してきた。一方、教師集団は前年の痛恨の体験から、今年こそまともな教育がしたいと思い、生徒にけじめある態度を身につけさせようとしていた。そのために「ダメなことはダメ」と強く迫ろうとした。しかし教師の対応に差ができてきた。このとき教師のなかで、誰が注意しても聞ける生徒集団に育てたいという声が強くなってきた。それは「強い指導」を求める声となった。「体罰や管理主義はダメ」とは誰でも言えることだが、生徒の現状を目の前にして、多くの人が教師の権威や生徒を強制する必要があると考えていた。

さらに生徒のなかにも「ごちゃごちゃ文句言われるんやったら一発殴られた方がまし」という声が出たり、親

に反抗する子どもが問題行動を起こしたとき、その母親が「先生も生徒を殴るぐらいの勇気を持ってください」と学校の指導の「甘さ」を指摘したりした。このように体罰や管理主義を容認する環境があった。しかし、暴力否定のための体罰など何の説得力も持っていないということは共通の認識であった。

ところで、教師も生徒の暴力の被害にあう危険性にさらされていたのである。ここで、教師が毅然とした態度がとれないと、学校は生徒の暴力が支配する無政府状態になるかもしれない。荒れている生徒たちとの一触即発の状態のなかで、教師集団はいじめや暴力・生活のくずれに必死に取り組みながら、今後どのように指導していくか苦悩している状態だったのである。

卒業生たちの背中が語るもの

あの生徒たちが一九八六年に入学して卒業するまでの三年間を振り返ってみると、私たちの取り組みの弱点が見えてきた。

①私たちが生徒集団を分析するときその否定面ばかり強調し、生徒たちが本来持っている「まっとうに生きていこう」とする可能性や成長の展望について教師の共通認識にしていくことが弱かったのではないか。

②生徒はたしかに落ち着きがなく馴れ馴れしくて教師不信が見られたが、私たちは生徒の現状を受け入れ、生徒の成長に合わせたきめ細かい取り組みが不十分だったのではないか。生徒を理解するよりも、まず、生徒に中学校の規範を理解させることを急いだのではないか。

③中学校の規範を生徒に教えるとき、生徒集団にけじめをつけさせることばかりが前面に出た。そのため、生徒たちは叱責や「きびしさ」は体験したが、生徒集団としての達成感や自信を十分に持たせられなかったのではないか。

④生徒の人権を本気で考える立場で生徒指導をしてきたか。指導のなかで、生徒が自分の大切さに気づき、他人の大切さに気づく指導を貫徹したか。

⑤生徒集団づくりに計画性はあったか。三年間の見通しもなく、行事ごとに学級まかせになっていなかったか。

⑥学年の教師集団の連携が不十分で、担任まかせ、係まかせのところがあったために「やりにくい授業」や「しんどいクラス」が出てきたときに対応できなかった。学年内に学級のでこぼこをつくらず、どのクラスも同じように指導していける体制が必要だった。

以上の反省にたって、分会役員・生徒指導担当者・生徒会担当者・学級活動担当者らが意見交流を重ねて新しい学年、一九八九年度をスタートさせた。この学年は、ほとんどその年の三月に三年生を卒業させた教師で構成されていた。

2　新たな決意

「荒れ」は引き継がれていた

新しい学年が始まっても、玉中では相変わらず生徒の問題行動は続発していた。

始業式の翌日から、便器破損・喫煙・シンナー・野球部倉庫破壊・放水・職員更衣室盗難などが次から次へと毎日のように起こった。

このように「荒れ」は引き継がれてきていた。上級生の悪い影響は引き継がれやすいが、良い影響は引き継が

れにくい。上級生の悪い影響を断ち切るために、毎年一年生を受け持った教師集団は腐心してきたのである。

ところで、その年入学してきた生徒たちも、低学力・いじめ・家庭崩壊など例年同様のしんどさを持っていた。一部の生徒たちは、すでに小学校から喫煙しており、入学後二週間もしないうちに、集団で無断欠席したり、ライターを万引きするなど問題行動を起こしはじめていた。親たちは、わが子が悪くなることを心配して、親同士お互いに不信感を持っていたが、生徒同士の結束は強かった。また、いじめられっ子は中学校でも言葉の暴力を浴びていた。

この生徒集団に対し、私たちが生徒を理解してお互い信頼できる関係をつくるよりも、生徒に中学校の規範を理解させることを強引に進めればどうなるか。それは、卒業していった子どもたちが示していったばかりである。私たちは、生徒の自治を育てることと、一人ひとりの生徒の人権を守り人権意識を育てる方向を確認した。

信頼しあう関係づくり

そして、上級生が荒れているなかで、その影響をはね返し自主的民主的な子どもに育てていくには計画的な集団づくりの方針が必要であった。この年四月、生徒会顧問・学活担当が「集団づくりにおける行事の位置づけとねらい」を提案し、集団づくりをこの方向で進めた。

▨集団づくりにおける行事の位置づけとねらい

①行事の位置づけ

・各自の存在感とお互いの連帯感が認識できる場とする。

・それぞれの個性や能力が発揮できる場とする。

・正しい相互理解ができる場とする。

・自分の弱点が克服できる自己変革の場とする。

・核づくり、リーダーづくりの場とする。

②行事での指導のねらい

・創作過程を重視するなかで、クラスの問題を浮き彫りにする。

・その問題を生徒に返し、みんなで考えさせる。

・個々の存在価値を各自が自覚し、集団の持つ意味をわからせる。

・何のために何をつくるのかねらいをはっきりさせる。

・美しいものに感動する豊かな感性を身につけさせる。

・完成、成就の喜びを経験させる。

＊子どもは、自分たちの力に合った形で企画・立案にも参加し、実践・総括して力をつけていく。

また、生徒指導担当者から、生徒たちの基本的視点と、とくに問題行動を起こした生徒への指導の内容・方向が示されて実施されてきた。

▨生徒たちの基本的視点と生徒指導の内容・方向

①生徒への基本的視点

・どの子も本当はまっとうに生きたい、成長したいと思っている。

・子どもがまっとうに生きて成長する「力」は子ども自身のなかにある。

・子どもがその「力」を発揮するかどうかは、周囲（家庭・学校・地域）からの働きかけによる。

②指導の内容・方向

・生徒が事実を安心して正直に言えるようにすること。

・問題行動について教師の考えをはっきり告げる。「ダメなことはダメ」。

・生徒が自分の本音を言い、自分の問題点に気づき、今後どうすればよいのか方向を自覚できるようにする。

・生徒が方向を示したとき、生徒とともに問題点の克服の援助をしてやる（たとえば、生活点検ノートや進路の展望を与えること）。

規律ある学校生活

四月、この新一年生たちに学年生徒会を組織させた。この学年生徒会は一年生の自治意識を育てるためにつくられたもので、全校の生徒会から独立した組織である。選出された執行部が、一年生の自主活動について原案をつくり、学級討議にかけたのち学年総会を開いて全員で方針を決める方法がとられた。

一年生が入学して十日ほどたつとチャイム着席が乱れてきた。一年生として、「毎朝規律ある学校生活をスタートさせるために、一〇分間の朝学活をどう過ごすか」という問題に取り組んだ。

クラス討論では結局、ゲームや小テストなど独自の過ごし方がクラスで追求されるようになった。この取り組みをクラスで中心的に行った生徒は次のような感想を述べている。

私たちのクラス三組は、週一回の朝学（朝学習）でしたが、その一回をみんなとても頑張り、とても大事にしてくれました。分からないところなどは友達同士で相談し合い、スムーズにやってくることができました。朝学も大事にしていきながら、ゲームなどもみんなで楽しむこともできました。やっぱり、勉強をしているときよりも、ゲームをしているときの方がとても楽しそうでした。…（略）…

このような、朝学・レクリエーションなどを通して、一〇分間をうまく使えるようになり、クラスにまとまりがついてきたように思えます。…（略）…

この活動を通して、生徒たちは朝の一〇分間という時間を気に止めるようになったのは当然だが、同時に民主的討論のあり方や集団規律の大切さを学んだ意義は大きかった。

その後、学年生徒会は全校生徒会の方針も受けて取り組むようになった。合唱祭では、朝の一〇分間の学活で何度も文化委員が学級会を開き、学級目標・自由曲・課題曲・伴奏者・ポスター係を決めている。

そして、この学年生徒会は二年生になって、大縄跳び大会・遠足・臨海学舎への取り組みで大きな力を発揮する。

館内放送のない臨海

生徒たちがひととおりの学校行事を経験し、集団意識ができてきた二年生当初に学活担当から「館内放送のない臨海」の提案があった。

これは毎年行っている臨海学舎で、生徒集団が自由時間の過ごし方や持ち物について自分たちで決めるとともに、スケジュールを自覚して時間を守って自主的に行動するというものである。この取り組みは単にひとつの行

事の成功をねらったのではなく、生徒集団を自主的民主的に育てていく計画のなかの大きな節として設定した。したがって、その成功のためにきめ細かい段階を準備した。

四月当初、教師のイメージを生徒たちに伝えるとともに、教師自身も校内放送を使わないようにした。学年生徒会はチャイム着席運動を始めるとともに、これと並行して行われた学級対抗大縄跳び大会・遠足の班行動・生徒総会などに取り組んだ。

学年生徒会の代表は、生徒たちに「臨海学舎を私たちの手で!!」という次のような呼びかけ文をつくっている。

臨海学舎を私たちの手で!!

二年　学年代表

〝全員が〟泳力をのばそう

臨海というと〝遠泳〟。玉川の遠泳は三キロで、とても立派な伝統のあるものです。しかし、臨海は遠泳だけではありません。遠泳に参加しなくても、全員が泳力を伸ばすのが臨海の目標です。そのためには、自分にあった目標を決めるのが大切です。目標を決め、それを達成するのは自分自身です。「どうでもいいわ」「あきらめよう」と自分に見切りをつけないで、自分の弱さに負けないで、少しでも泳力を伸ばしていきましょう。

〝館内放送のない臨海〟の成功を目指して

館内放送がないということは、風呂や食事や泳ぎに行くときなどの連絡が一切ないということですから、自覚的に動くしかないのです。この目標を達成するために、三日間どういうことを心掛け、実行することが大切なのでしょうか。まずそのためには、自分で時間を判断しなければならないので、常に時計を見ること

が大切だと思います。…（略）…

そのためには、いまから毎日の学校生活のなかで、色々と心掛け実行していくことが大切ですが、やはりチャイム席を守ることがいちばん大切なことだと思います。

…（略）…

一人ひとりの心のなかに、このようなことを日々しっかりとめて実行しながら楽しい臨海にしましょう。

生徒たちは、この臨海学舎のふたつの目標を自分自身の目標として参加している。そして、感想では次のように述べている。

私はこの臨海学舎で泳力を伸ばすことができてとてもうれしかった。一・五キロメートルや三キロメートルに比べると本当に短い距離だけど、自己最高記録を出せたのですごく満足している。一年の時は二五メートルも泳げなくてすごくいやだったけど、臨海学舎のための泳力テストなんかしていたら、五〇メートル泳げてすごくうれしかった。海で泳いだ時はそれ以上に泳力が伸びたので、練習していてよかったなと思った。自分が遠泳にいけなくても友だちが一生懸命泳いでいる姿を見たらすごくうれしくなって、みんなが泳ぎ切ったときは本当にすごいなあと思った。

§

…（略）…

使い捨てカメラ、Tシャツの色、就寝時間などいろいろな提案を許可してもらえたし、館内放送のない臨海というスローガンも成功させることができた。…（略）…

いまから考えてみると、二泊三日を楽しく過ごせたことの理由に、先生にガミガミ長い説教をされることがなかったということがあると思う。もし、何回も先生におこられていたらいやなことばかりが残って、あんなに思いっ切り楽しめなかったんじゃないかな？

このように生徒たちは泳力を伸ばすとともに、全行程通して教師の管理的叱責を受けることもなく、時間とルールをよく守り、自分たちが参加してつくった企画を自分たちの力で成功させた。

臨海学舎は学年単位の行事だったので、この成功は生徒たちのなかに強い学年帰属意識を育てた。この取り組みを通じて、彼らは学級だけでなく学年としても仲のよい団結した集団に育ち、このあとの文化祭・修学旅行・運動会を学年単位で成功させ、自分のクラスを愛せるようになった。

3　認めあい、支えあいながら歩む

「みんな大事な人間だ」

人権学習では、生徒が自分自身の大切さを知り、他人の大切さも知ることができるように育てることを目標にした。そして、実際に起こった問題について生徒全員で考え解決していく方向をとった。

一年生の五月中頃、いじめが発覚した。男子数人がA君から借りたシャープペンシルを隠して返さず、「返せ」と怒るA君に集団で暴行したというものだった。A君は小学校時代からよくいじめられていた。私たちは、すぐにA君と暴行に加わった生徒たちの双方から事情を聞いて、当事者たちの指導をするとともに、生徒全員に事実

関係といじめについての意識調査をした。そしてこの調査結果をまとめ、緊急学年集会をもった。

この学年集会では、教師が事実経過を生徒に説明したのち次のように訴えた。

「Aはおもちゃとちがう。人間の値打ちは、勉強ができるとか、力が強いとか、金持ちとか、顔が綺麗とか、友だちがおるとかで決まるのとちがう。人間の値打ちはみんな同じや。いまここにいる君らのなかで、どうでもいい子はひとりもいてない。ここにおる一人ひとりが主人公なんや。そんな学校にしていこうや」。

こうして、学年として一人ひとりの人権を大切にしていくことを確認しあった。次に、いじめについての意見を書かせ、この作文をプリントして教材をつくり、人権についての学活を行った。当初「いじめられるのはそれなりの理由があるから」といじめを容認していた生徒も少なくなかったが、このようにして生徒同士の意見を交流させていくなかで、いじめはいけないことだと自覚していった。

このように個人指導と集団指導を結合させて、生徒の内面に迫るとともに集団の意識を育てていく方法は、その後も禁煙指導などあらゆる場面で追求した。そしていずれの場合でも「どうでもいい子はひとりもいない」という立場で、人権意識を強調しつづけてきた。このような姿勢で臨み、体罰や威圧による「力の指導」をやめた結果、生徒と教師の信頼関係は築き上げられつつあった。

叱るだけではタバコはなくならない

二年生当初男子グループ九名が、休み時間に他生徒の前で堂々と喫煙するという事件が起こった。この指導について、生徒指導担当教師は次のような禁煙指導の基本方向を示した。

①喫煙生徒への指導は禁煙指導だけにしぼるのではなく、禁煙指導・生活指導・学習指導の三点で生活立て直しをはかる。

②喫煙生徒が属するクラスの学級集団づくりを次の三点で行う。

・個人主義・自由分散主義でなく、一人ひとりをお互いに大切にする仲間集団づくり（「喫煙は本人の勝手、自分は関係ない」という考えをクラスが克服すること）。

・一人ひとりが、自分が何をしなければならないのか自覚できる自主的集団づくり。

・中学生の喫煙は法律上・健康上・精神上害であり、絶対許されないという科学的な世論づくり。

この方針に基づいて、実際の指導は次のように進んだ。

男子の喫煙が発覚したとき、現地指導をしてタバコとライターを没収したあと、生徒それぞれに個別指導を行った。ここでは、喫煙が習慣化しているかどうかを確かめ、喫煙の害について説明する。そして「タバコはやめることができる」ことを言って励ます。本人が反省したあと保護者と懇談し、「本人が禁煙を努力するので応援してやってほしい」と親の協力を求める。そして生活立て直しの援助として、生活点検ノートをつける。これは、本人の授業態度・清掃・クラブ活動・服装などについてチェックし、親と教師が本人の生活態度を知るための連絡帳であるが、本人の自己点検の材料としても有効であった。すなわち、この時点では本人も親も教師も喫煙を「やめたい」「やめさせたい」と思っているのである。

次に生徒集団への指導として、緊急学年集会と学級討論会を開き、いじめのときと同じように生徒の意見交流をする。

このタバコ事件について生徒たちはどう見ているか、生徒たちの作文から拾ってみる。ずばり喫煙を批判したものが多いが、実際に批判することの難しさを述べたものも多かった。

……自分たちは違う道を走っているのに気づいてほしい。とにかく、タバコ・シンナー・変形などはいまの時点でストップして戻ってほしい。友だちもそんなふうになってほしくない。とにかくやりたいんならせめて、大学生ぐらいにしたらいいと思う。一番いいのはもう吸わないことだ。

§

……やっぱり見て見ぬふりは一番卑怯だと思う。友だちが悪いほうにいきかけたときに放っておくのはいけない。絶対に。……こう思っても、わかっていても、はっきり言えば、その子たちに何をしたらいいのかあまりわからない。その子たちがいつでも仲間に入れるクラスづくりとか、かな？　それとかタバコを吸っていたらみんなで注意するとか。私にはこれくらいのことしか思いつかないけど、やっぱり授業を受けたときに変な目で見てあげないってことかな。私は見て見ぬふりはしないようにしようと思う。

このような意見が学年集会のあと寄せられた。喫煙生徒だけでなく、学年の生徒全体に禁煙指導を行った。四八名の生徒の意見を「バイバイスモーキング」という漫画と未成年喫煙禁止法、世界の禁煙の動きを示す資料とともにプリントにし、これを教材に学活の時間に禁煙学習を行った。この学習のあと、喫煙した生徒は次のような反省文を書いている。

僕は、この生徒作文を読んで、みんなにすごく悪いことをしたなあと思いました。僕もはじめのころは、前の三年生を見て、なんで授業を抜け出したり学校でタバコなんか吸うのかなぁと思っていた。けど、一年の二学期ぐらいから、変形ズボンとかを着ているのを見て、かっこいいなぁと思うようになりました。一年

の頃はこれくらいでよかったけど、二年になって変形をはいていって怒られたり、学校でタバコを吸ったりして、みんなに迷惑かけたなぁと思います。それに、タバコとか吸っても学校ではあんまり怒られへんやろうと思って、みんなの前で平気でタバコを吸っていたし、自分のやりたいなぁと思うことを学校でやっていたので、常識はずれやったなぁと自分でも思いました。

タバコなんか吸っていたら、体にも悪いし、大人になったら、絶対にいい大人にならないと思う。けど、友だちが吸ったら僕も吸いたくなって、つい吸ってしまいます。だからこれからは、できるだけタバコも吸わずに、みんなと同じような生活をしていきたいと思います。…（略）…

このように本人の自己変革の努力と禁煙についての世論づくりによって、喫煙は一時とまった。しかし、一、二か月もすると再び喫煙が始まった。再び個別指導を行うが、ここからが厳しさを必要とする本当の自己変革であったと思われる。個別指導では「なぜタバコを吸ってしまったのか」「禁煙の意志が本当にあるのか」「どうすれば禁煙ができるか」を考えさせる。そして自分の生活を見つめさせて、生活立て直しの必要を自覚させる。

さらに「なぜ自分の生活がくずれているのか」「前の禁煙計画に無理はなかったのか」「進路・学習に対する不安はないか」について自己点検させる。この指導を通して、生活立て直しのために、毎日一五分間の昼勉強とクラブ活動への参加を始めることになった。この指導は叱責ではなく、立ち直りのための激励と援助であった。したがって、生徒は自分を冷静に見つめられ前向きの努力ができたものと思われる。取り組みの結果、表立った喫煙はほとんど見られなくなった。

『道しるべ』

ネクタイをキリッとしめた青年が、一年生全員に話しだした。

「みなさん　はじめまして。

僕は、四年前に玉川中学校を卒業した生徒のひとりです。これから僕の学生生活のことと、学校を卒業して社会人として学んだことを、うまく言えませんが、言いたいと思います。

まず、学生生活のことから話したいと思います」。

彼は、Y先生が担任したB君（一九歳）で、中学卒業後就職している。これは、一年生の三学期に、卒業生が来校して生徒たちに自分の進路について語るという企画で「卒業生の話を聞く学年集会」を体育館でもったときのひとこまである。

生徒集団づくりでもうひとつの柱となったのが、進路学習だった。これは、生徒が自分の進路を自分で見つめ、自分の意志で歩んでいくことを目指して一年の三学期から始めた。そして計画として、まず身近にいる先輩は、どんな進路を進みどんなことを考えているのかを知り、いまの自分もやがては必ず中学校を出て、新しい進路を進むことになるのだということを実感としてつかませる。次に、自分の周りにはどんな職業があるのか、働くとはどういうことなのかということを学び、自分が将来就きたい職業を考えさせる。さらにその職業に就くにはどのような道筋があるのかを学ばせる。そして卒業後の自分の進路を考えさせる。

この学習を土台に、三年生になると自分たちが将来進む高校にはどんなところがあって、学科や校風・特色などを知って自分に合っている高校はどこかを考える。こうして、自分の進路選択を生徒が主体となって決める力

1991年７月18日「卒業生の話を聞く学年集会」。

をつけさせていくというものである。

この学年集会に参加できなかった大学生のC君は、三か月後に二年生になる中学生たちに、次の手紙を届けてくれた。

…（略）…

僕も、二年生の時にクラブをサボリだして、結局そのままクラブに出なくなってしまいました。そのことをいま大変残念に思い、後悔しています。中学の三年間を三段跳びに喩えてみると、二年生はステップにあたります。ホップやジャンプに比べて、一番距離は出ませんが、このときにバランスを崩してしまうと、最後の結果が出るジャンプが全然ダメになってしまいます。だからフワフワした気持ちではなく、気を引き締めて生活してください。

僕の経験から、中学で学んだことで、さまざまな障害を乗り越えることができました。そのなかで一番大きな障害となったことは、勉強への意欲がなくなってしまったことです。中学のときに、勉強でなんとしても勝ってやろうと思う友だちがいました。当然、一番の友だちでしたが、お互いに競いあって目標の高校に入学しようと頑張りました。ふたりで競い合っての勉強は、全然苦になりませんでしたので、ふたりとも目標の高校に入ることができました。しかし、高校に進学すると、そのような友だちにも恵まれず、全然勉強ができなくなって、成績は落ちる一方でした。しかし、中学のときのことを考えると「違う高校に行った奴や、就職した奴がみんな頑張っているんだろう。このままではいけない」と思い、一生懸命勉強するようになりました。そして大学へ進学できるようになりました。

中学ではたしかに勉強を教わりますが、そのほかにも集団生活のなかの自分、つまりどのようにして他人と共同してひとつの事をやるかなど、大切なことも学びます。そのようなことは、中学を卒業して進学しても、就職しても、必ず学びつづけなければならないことです。

また、僕は中学時代、病気で休んだことはありましたが、無遅刻でした。そして高校に入っても、無遅刻無欠席でした。多くの人が、遅刻や欠席をするのに、僕がしなかったのは、中学のときからきちんと学校に行っていたからです。決められた時間が守れないと、他人との信頼関係が悪くなります。だから、中学生の間にきちんと時間を守るクセを身につけておいて下さい。

この日、来校した卒業生は、中卒で就職して四年目の男子、クラブと学習で選んだ東大谷高校一年生女子、加納高校に誇りを持つ三年生男子、大阪教育大学Ⅱ部の男子、高校卒業後職人になった男子、一浪して関西学院大学へ進学した男子で、それぞれいまの自分の心境や中学時代を振り返って生徒たちに伝えたいことを講演した。これらの先輩の話を聞いた一年生からは、次のような感想が寄せられた。

一年生最後の学年生徒会の人たちの取り組みで、こんなためになることを話してもらってとても良かったです。今回は「進路」というテーマでしたが、いつもよりずっと考えることが多く、まだ高校を目指すのに二年もあるという考えがふっ飛んだような気がします。自分はいま、何をなすべきかを考えなくてはいけないと感じました。いつもは集会が終わっても、私たちの方から意見や感想が出にくくて、静まりかえるだけだったのに、私たちの方から感想を発表する人もたくさんいた。本当によかったと思いました。

二年生になると、進路学活で「何のために勉強するのか」をシリーズで学習したり、「私の興味と関心」「進路に関する不安・悩みの調査」「進路をめぐる親子の対話」のアンケートをとって、学習を積み重ねていった。

……私は、この〝机に向かって…〟の勉強をなぜするのかなと自分で考えてみたら、結局〝受験のため〟となってしまったけど、よく考えたら〝自分の夢のため〟となった。なぜかというと私は高校に行きたい。高校生になったらやりたいことがいっぱいあって、そのやりたいことや夢を実現させるための下調べという感じかな。つまり、高校生活を踏み台にして、夢を実現させていきたいから〝受験のため〟＝〝自分のため〟となった。…（略）…

そして、二年の二学期、文化祭がすんでから三学期末にかけて取り組んだのは、世の中にはどんな職業があるのかという学習である。

まずいろいろな職業を知り、その職業に就くための道筋や資格を学んでいく。さらに、冬休みを通して身近な

大人（家族・親類の人・近所の人・知人など）からその人の職業について聞き取りを行う。これをまとめて職業調査票をつくり、生徒に配布して進路選択の資料にする。

三年生では、修学旅行が終わるとすぐに、各クラスから二名の進路委員を募り、進路委員会を発足させる。この進路委員会の仕事は、生徒が自分にあった進路選択ができるような情報提供などをすることである。具体的には、次のような活動を行った。

①機関紙『道しるべ』を発行し、生徒の要求を集めたり、進路委員会で得た情報を知らせたりする。

②高校三年生の卒業生全員にアンケート調査を行い、高校の内容や高校生活についての情報を生徒自身の手で得る。

〈アンケートの項目〉

・校風や特色について
・行事について
・クラブについて
・校則について
・授業のようすについて（時間割りも送ってください）
・入学する前と比べて、印象は変りましたか
・私たち玉中三年生に一言メッセージを

次に、それを公立編・私立男子編・私立女子編に分けて手製の高校案内冊子をつくり、生徒に配布する。

③七月に「学科別――先輩の話を聞く会」を開く。

さまざまな職業に就くためのルートと高校の学科について学習したのち、七つのコースにそれぞれ通う高

『道しるべ』（特別号）～職業の聞き取り調査（一部）

領域	職業	仕事の内容	働く時間	資格・技術	楽しいこと・やりがい	つらいこと・いやなこと	この職業につきたい人へ	インタビューした感想
1 農林漁業	農業	米、麦の生産 ビニールハウスによる切花生産	時間は不規則である	資格は必要なし。技術はそれなりに必要	種子を播き育て、実ったとき。（収穫の喜び）	冬の寒い日の野良仕事	経済的には厳しい職業である 体力は必要	専門学校ていうのがあるんだなぁと思った
	ブリーダー	子犬の繁殖	24時間	特になし	生命の誕生を目のあたりにした時。成長して手を離れて巣立っていくとき	出産の時、徹夜しなければならないこと。子犬が死んだとき	自分自身との葛藤が多いため心身が必要なので、本当に動物が好きでないとできません	すごく大変そう
2 運搬・加工・組立（簡易なもの）	公務員（郵便局）	郵便・速達	8時間	特になし	合格通知の配達 お年寄りの話相手になって あげられる	外部作業なので雨や寒い日 郵便物を間違えたこと	想像力（アイデアや夢）を持つこと	寒い日や雨などの日は大変だと思う。でもみんなのために一生懸命配達しているからえらいと思う
	港湾運送業	輸出入貨物の港における作業及び税関の手続き	9時～5時半	英語読解力が必要	新しい仕事にトライして、成功したとき	苦しいこと、嫌なことは避けて通ることは出来ないので苦しいことと嫌なことは感じない	地味な仕事だが貿易立国である日本を支える大切な仕事であるというプライドが必要。幅広い知識も必要	インタビューをしてサラリーマンの楽や苦をあらためてしった
3 加工・組立・造形などの熟練技能	大工	主に家をたてる	普通8時～5時頃には時間の都合で早朝、夜間もある	特に資格はないが技術は必要	自分の手がけた仕事が完成したとき 思ったとおりに出来たとき	外での仕事が多く、夏は暑く冬は寒いのでつらい時がある	つらいことが、多くあるがやりがいがある	
	瓦販売施工業	屋根瓦を葺く 古い屋根の修繕をする	8時～5時 雨の日は休み	技能試験	大きな寺などの仕事があるとき	冬の寒いとき、夏の暑いとき	技能取得者が少なくなっているのでいいと思う	瓦屋の仕事は体力とかはやっぱり必要なんだなぁと思った
	クシ製造業	手作りでつげクシをつくる	9時～夜10時 家内工業	特になし	まるで芸術品みたいなクシを作った事や女の人が使っているのを見たとき	つげ材を買っても10年ほどねかしておかなければならず使えないこと 歯がおれたりして製品にならないこと	忍耐強く細かいことに注意をはらうこと がまん強く手先が器用なこと	作ったクシを見ると作ったさんの工程があるとは見えず大変だなぁと思う
	かばん製造業	かばん製造	8時間	特になし	出来上がったとき	売れなかったとき	特になし	特になし
	尺八製管所	尺八を作る	9時～5時	特になし	自分で作った笛を吹いているとき	仕事をやり終えて家にふすまを入れるとき	地味な仕事だが、仕上がった時とてもうれしい	とても技術のいる仕事だと思った
	表具店	ふすまを作る	残業もある	技術が必要	仕事をやり終えたとき	冬、水で障子を洗う時		
4 機械・装置の保守管理	電気工事士	電気工事 超高圧ケーブル工事（第1次）ケーブルを接続し送電できるようにする	8時～6時	電気工事士免許	仕事をやり遂げたとき	寒い日外でやるとき	電気関係の道具を使っているので危険。落ち着きが肝心	とても危険な仕事なので僕には向かないと思った
5 運転・操縦	タクシーの運転手	ジャンボタクシーの運転をする	9時～5時 夜勤もあり不規則	大学卒 機械工学部	全国の観光地に行けることお客さんとうまく応接できた時	夜行の長距離走行	厳しい勤務である 人との対話がスムーズに出来る	ただ1日中車に乗っていて、行くだけで歩くんだけど、たまにどこかに見えたりやすそうやすやすと出来る仕事じゃなかった
6 工学・技術	地方公務員	技術吏員	9時～5時	特になし	病人がうまく回復し、感謝されるとき	特になし	多種多様な職種があるため配属時の対応がおのずと必要	職場が近いのはいいけれど、楽しいのはいやいけれしいことが特にないということはしんどいことだと思う
7 研究・医療 学術・法務	医師	治療		医師免許	社会に貢献でき、仕事納いろんな人々と接することができ、患者さんの痛みがとれたときの笑顔がうれしい	一生懸命やったが、結果が悪いとき	他人のために、自分の欲望を捨てる	患者の気持ち、痛みをわかってあげられる人でないと駄目だなあと思った。すごく大切な仕事だと思った
	歯科医師	歯の治療 歯並びの矯正	朝9時30分から夜8時	歯科医師の資格 矯正の認定医	休日、深夜の急患	休日、深夜の急患	人間相手ですので、常に安全を心がけなければ事故がありますので冷静な判断力と技術が必要だと思います	
8 教育関係	教師	教師 勉強をおしえる 学級経営	9時～5時	教員免許	今まで分からなかった事を理解してくれたとき。目の輝きを見るとき	評価をつけること	子供が怪我をしたとき	子供といっしょに学び、成長することが大切だと思う
	保育園の保母	子供と遊んだり教えたりする	8時半～5時 15分。時間外勤務あり	保母資格が必要	子供といっしょに遊んでいる時	精神的に疲れる	しっかり勉強すること 人の前できちんと話が出来るように心がける	子供と遊ぶだけではなくていろんな事で大変な仕事です
	公務員 高校教諭	勉強などを教える	朝8時30分～夕5時	教員免許	みんなが理解したとき		この仕事は楽しそうに見えるんと思いますが、表に見えてはいるのは一部分で裏方の仕事や行事の準備や行事の雑務とかもあるし、大変なこと、気持ちわるいなければいいなどもいいえ汚ない仕事ですし	
	幼稚園の先生	幼児の年齢個人差に応じて各方面にわたる豊かな経験をさせやる活動をさせる。集団生活における行動や態度などを適切に指導する。	朝8時30分～夕5時30分。ッ早出よって分、30分の出勤もある	幼稚園教諭免許	やはり子供たちの成長が、また自分の指導してきたことが分かっていることが分かった時にとてもうれしく思います	子供たちを叱ることが一番つらいことですね。その子のためとはいえ、やはりつらいものがあります		本当に子供が好きでないとできない仕事だと思った

領域	職業	仕事の内容	働く時間	資格・技術	楽しいこと・やりがい	つらいこと・いやなこと	この職業につきたい人へ	インタビューした感想
4 機械・装置の保守管理	電気工事	電気工事 超高圧ケーブル工事（第1次）ケーブルを接続し送電できるようにする	朝8時、夜勤、徹夜勤務もあり	1種大型運転 高圧電気 鉛作業 足場組立 酸欠1・2種 5t未満クレーン 玉掛	世界中の女性と友達になれる事 大事業に参加できる（本四架橋・鳴門大橋）	クリスマスの夜に人が酒を飲んでいるのに街中で作業すること	3K（汚い、きつい、危険）の仕事ですが人が足りない事を経験できる（暴力団との話し合いから外国人との付き合いまで）	作ったクシを見ると作ったさんの工程があるとは見えず大変だなぁと思う
5 運転・操縦	タクシーの運転手	ジャンボタクシーの運転をする	8時～6時	電気工事士免許	仕事をやり遂げたとき	寒い日外でやるとき	電気関係の道具を使っているので危険。落ち着きが肝心	とても危険な仕事なので僕には向かないと思った
6 工学・技術	地方公務員	技術吏員	9時～5時	特になし	病人がうまく回復し、感謝されるとき	特になし	多種多様な職種があるため配属時の対応がおのずと必要	職場が近いのはいいけれど、楽しいのはいやいけれしいことが特にないということはしんどいことだと思う
7 研究・医療 学術・法務	医師	治療		医師免許	社会に貢献でき、仕事納いろんな人々と接することができ、患者さんの痛みがとれたときの笑顔がうれしい	一生懸命やったが、結果が悪いとき	他人のために、自分の欲望を捨てる	患者の気持ち、痛みをわかってあげられる人でないと駄目だなあと思った。すごく大切な仕事だと思った
	歯科医師	歯の治療 歯並びの矯正	朝9時30分から夜8時	歯科医師の資格 矯正の認定医	休日、深夜の急患	休日、深夜の急患	人間相手ですので、常に安全を心がけなければ事故がありますので冷静な判断力と技術が必要だと思います	
8 教育関係	教師	教師 勉強をおしえる 学級経営	9時～5時	教員免許	今まで分からなかった事を理解してくれたとき。目の輝きを見るとき	評価をつけること	子供が怪我をしたとき	子供といっしょに学び、成長することが大切だと思う
	保育園の保母	子供と遊んだり教えたりする	8時半～5時 15分。時間外勤務あり	保母資格が必要	子供といっしょに遊んでいる時	精神的に疲れる	しっかり勉強すること 人の前できちんと話が出来るように心がける	子供と遊ぶだけではなくていろんな事で大変な仕事です
	公務員 高校教諭	勉強などを教える	朝8時30分～夕5時	教員免許	みんなが理解したとき		この仕事は楽しそうに見えるんと思いますが、表に見えてはいるのは一部分で裏方の仕事や行事の準備や行事の雑務とかもあるし、大変なこと、気持ちわるいなければいいなどもいいえ汚ない仕事ですし	
	幼稚園の先生	幼児の年齢個人差に応じて各方面にわたる豊かな経験をさせやる活動をさせる。集団生活における行動や態度などを適切に指導する。	朝8時30分～夕5時30分。ッ早出よって分、30分の出勤もある	幼稚園教諭免許	やはり子供たちの成長が、また自分の指導してきたことが分かっていることが分かった時にとてもうれしく思います	子供たちを叱ることが一番つらいことですね。その子のためとはいえ、やはりつらいものがあります		本当に子供が好きでないとできない仕事だと思った

校三年生の卒業生を招いて、学科の具体的な内容について聞く。

来校したのは、私立男子校普通科・私立女子校普通科・公立普通科・公立工業科・市立工芸・公立体育科であった。

④夏休み以降『道しるべ』で高校体験入学や見学会の案内をする。見学会のなかった高校へは、生徒のなかに希望するものがいれば高校に見学会を申し込んで、直接訪問できる機会をつくっていった。

この取り組みのなかで、生徒たちは内申書や偏差値で振り分けられる受け身の進路選択ではなく、自分の将来を自分で見つめ、どのような進路を選んだらよいのか考えるようになってきた。高校を選ぶときも、自分の受ける学校はどこにあり、どんな校風で、そこの生徒はどんな生活をしており、卒業後の進路はどうなっているのかなど内申書や偏差値以外の要素を材料にすることができ、生徒自身が主体的に進路選択に取り組めた。

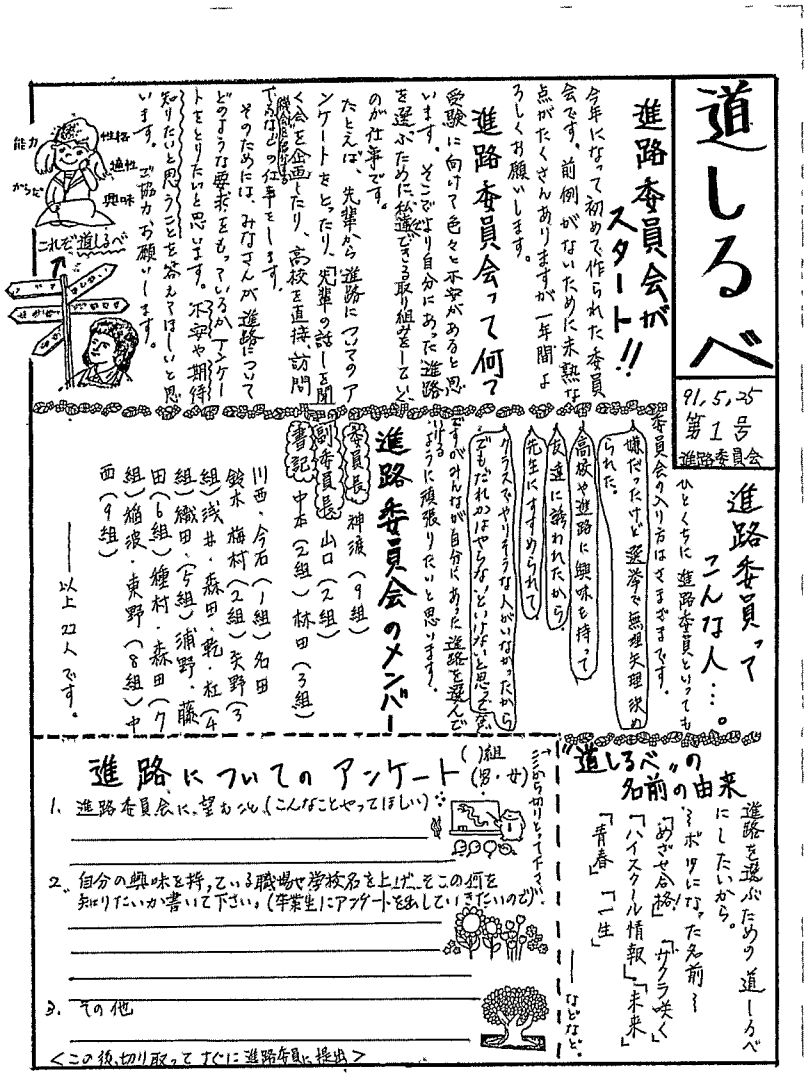
学力を保障する

進路学習の一環として、二年生全員からとった「進路に関する不安・悩み」のアンケートでは、七割以上の生徒が「成績が伸びない」「進学できるか不安」「学習の方法がわからない」「特定の教科がわからない」などの学習に対する不安を持っていた。低学力の生徒ではこれらの不安に加え、学習内容を理解するのが困難なために、勉強すること自体をあきらめている場合もあった。

そこで日々の授業だけでなく、一人ひとりの生徒に学習意欲を持たせ、学力をつける取り組みが必要であった。

私たちは、低学力対策を進めるにあたって、次の点に気をつけた。

・「やる気あんねんやったらちゃんとやって来い。ないねやったら出ていけ」とオール・オア・ナッシングにならないこと。



道しるべ

91.5.25 第1号 進路委員会

進路委員会がスタート!!

今年になって初めて作られた委員会です。前例がないために未熟な点がたくさんありますが一年間よろしくお願いします。

進路委員会って何？

受験に向けて色々と不安があると思います。そこでより自分にあった進路を選ぶために、協議できる取り組みをしていくのが仕事です。

たとえば、先輩から進路についてのアンケートをとったり、「先輩の話」を聞く会を企画したり、高校を直接訪問できるように機能作りの仕事をします。

そのためには、みなさんが進路についてどのような要求をもっているかアンケートをとりたいと思います。不安や期待、知りたいと思うことを答えてほしいと思います。協力お願いします。

進路委員会のメンバー

委員長　神波（9組）
副委員長　山口（2組）
書記　中本（2組）林田（3組）
川西・今石（1組）名田
鈴木・梅村（2組）矢野（3組）浅井・森田・乾・杠（4組）織田（5組）浦野・藤田（6組）煙村・森田（7組）猪浪・東野（8組）中西（9組）

――以上22人です。

進路委員会の入り方はさまざまです。

ひとくちに進路委員といっても…こんな人…。

・嫌だったけど選挙で無理矢理決められた。
・高校や進路に興味を持って
・食堂に誘われたから
・先生にすすめられて
・クラスでやりたがる人がいなかったから
・どうせだれかがやらなければいけないと思ったから
・みんなが自分にあった進路を選んでいけるように頑張りたいと思います。

進路を選ぶための道しるべにしたいから。

〜ポリになったる名前〜

「めざせ合格」「サクラ咲く」「ハイスクール情報」「未来」「青春」「一生」――などなど。

進路についてのアンケート

（　）組（男・女）

1. 進路委員会に、望むこと（こんなことやってほしい）：

2. 自分の興味を持っている職場や学校名を上げ、そこの何を知りたいか書いて下さい。（卒業生にアンケートをお願いしたいので）

3. その他

<この後、切り取ってすぐに進路委員に提出>

進路委員会の発足を伝える機関紙『道しるべ』の創刊号。

・生徒にとって「有り難迷惑」となる押しつけをしない。
・あきらめない、あきらめさせない。
・もし時間切れで学力が十分育たなくても「人間は信用できる」「自分は大切な存在なのだ」という民主的人間観が育つ。これが生きていく力になることに確信を持つ。

実際の取り組みとしては、朝の学習会の体制を確立し、学習係の生徒による点検活動を重視した。学習係の会議を定期的に開き、学習会の点検活動が三年生全体にとって、とても大事な仕事なのだということを何度も確認した。内容は学習係が小テストをクラスで配り、受験者を点検表に記入する。小テストは理科・社会を中心として、定期テストの試験に向けての基礎知識を問う内容のものとし、小テストの内容に関心が持てるようにした。

しかし、この朝学習も遅刻してくる生徒には対応できない。そこで、低学力であきらめかけている男子グループには試験前に特訓学習を行い、それと並行して教科担任や学級担任による補習も行った。

父母は教育のパートナー

生徒たちのなかには、中学校に入ってから急に問題行動を起こす者もいたため、その親は学校に対する不信を募らせ、学校の荒れた現状を指摘して激しく攻撃してくることもあった。

このような状態でも、教師集団が指導の方向と姿勢を実践で示していくと、少しずつ理解されていった。教師に強い不信を持ち、激しく学校攻撃を繰り返していた父親は、娘が問題行動を起こして来校したとき、多くの教師が指導のために残っているのを見て感心したという。教師集団は徐々に信頼を回復し、親との協力関係はつくられていった。「私の仕事中に、家が子どもたちの溜り場にならないように」と鍵を担任の教師に渡して協力を頼む父子家庭の父親もいた。この担任の教師は、昼、その家にようすを見に行き、夜は家庭訪問をして父親と情

報交換をしながら、非行の泥沼にいる女生徒を立ち直らせる取り組みを父親とともに進めた。

私たちは、問題行動を起こした生徒の親に次のような懇談を行ってきた。これが信頼と協力の関係をつくり上げる力となったと考えられる。

①問題行動の事実を報告する。
②生徒の問題行動には、親も胸を痛めていることを理解する。
③生徒本人も本当はまっとうに生きたいと思っており、親も教師もそれを願っている。しかし現実にはそう簡単にいかないという認識の一致。
④だから、今後も子どものことで親と教師が協力しあっていくことの大切さを理解しあい、子どものことで困ったことがあれば遠慮なく相談してほしい、一緒に考えていきたいという呼びかけをする。

親の会

一年生の夏以降女子グループが、二年生になってからは男子グループがそれぞれ問題行動をつづけるようになってきた。この生徒たちは、すでに親の指導が通じない状態になっていた。疲れ果てた親の一部は、学校やほかの親への不信を深めるようになった。学年の教師集団は、親を「教育のパートナー」としてとらえ相互理解に向けて努力する方向をとった。そして、親と協力関係をつくりながら、生徒指導を進めてきた。しかし、対症療法的指導では解決せず、問題行動は繰り返されエスカレートしていった。そこで、同じ悩みを持つ親が集まって教師とともに子育てについて考える教育懇談会―親の会を二年生の七月から月一、二回のペースで定期的にもつようになり、卒業までつづいた。

親の会は、ふたりの親と学年生徒指導担当の教師が中心になって進めた。親・教師とも参加は自由で、親は八

人、教師は六人が参加した。そこでは、子どもの状態を情報交換してその対応を探るとともに、それぞれの参加者が親の気持ちを共感的に理解して親の不安を解消するようにした。そしてそのことによって、親が子どもをゆとりをもって見ることができるようになり、親子間の葛藤を緩めて家庭内の力を引き出すことがねらいだった。

この親の会をつづけた結果、親同士のヨコのつながりも強くなり、悩みを出しあい励ましあう協力関係ができた。そしてこの取り組みを通して、問題行動を繰り返していた生徒たちも親や教師を信頼するようになり、自分自身を見つめる余裕が持てるようになった。その後、生徒たちは学校生活のなかで自分の課題を見いだし、部活・補習・行事などに積極的に参加して学校生活を取り戻していった。

夜の会議室、母親三人と教師二人が話をしている。三年生の一〇月。

子どもの「荒れ」を体をはって食い止めてきた母親たちが、わが子のようすを話す。「あの子も家にいるのが多くなってきましたね。五ツ木（模擬テスト）も自分で受けてるし、塾にも行ってる。あの子『昔のこというたらあかん』言いますねん」「運動会で応援する姿を見たときはホントうれしかったですね」「以前に比べたら、安心してみてられるようになりました。友だちを毎日迎えに行ってます。生活も正しくなってきました」。

これから進路選択に向けて、子どもたちはまた揺れるかもしれない。しかし、母親も教師も子どもの揺れを受け止めようとしている。子どもの自立を待ちながら。

おわりに――さらに深い信頼を

子ども一人ひとりに、社会の主人公として生きていく力をつけることは、生徒自身も父母も教師も望む共通の願いである。だから、「荒れ」を克服し、生徒がいきいきと学べる学校をつくることを目指して協力しあえるはずである。しかし現実には、お互いに不信が生じやすく、それが、学校教育の現場を難しくする一因となってい

た。教師たちが生徒や父母の願いを学校教育で実現するためには、生徒や父母の力を引き出し協力しあうとともに、支えあい認めあい、総力を出せる教職員集団が必要であった。

生徒集団づくりや父母との連携については述べてきたとおりだが、教職員集団はどうであったか。

これらの行事の取り組みで一部の形式は引き継がれていったが、全体的な精神は学年や生徒会顧問以外にあまり浸透しなかった。立場や考え方の違う教師たちが民主教育の実現を目指して、協力しあう集団になるには時間がかかる。教育現場では、論争があって、結論がでて、方向が定まって、実践が始まるのでは遅い。生徒は待ってくれないのである。まず、できるところから実践を進め、成功させることが求められる。

ところで学年の教師集団が総力を出せるようになったのは、次のことを大切にしてきたからだと考えられる。行事の方針について教師の民主的討論が必要なことはいうまでもないが、とくに行事を具体的に取り組むにあたって大切にしてきたことは、教師一人ひとりが自分の能力を生かす分掌につき、その分掌が全体の企画の単なる下請けでなく独立性を持っており、しかもほかの教師との協力体制を持つことである。そして、ほかの教師や生徒とともに成功感や達成感を共有できることである。さらにこのようにして、成功した実践を全体で総括し、自分たちのやった行事の全体像がわかることであった。臨海学舎・文化祭その他大小さまざまな行事一つひとつを通して、その共同行動と総括を行い、そのことによってさらに実践は進み、教師集団の確信は深められたのである。

教職員の集団においては、「荒れ」を克服し民主教育を守る立場が多数になった。要求闘争においても民主的学校づくりと結合して大きな力になっていった。

今後の学校づくりにおいては、「どうでもいい子はひとりもいない」を私たちの合い言葉に学年間の連携をさらに強め、全校的な実践と総括に加え生徒が入学して卒業するまでの三年間の学校教育の方針を教職員の総意でつくり上げることが求められる。その方針は、自主的民主的な生徒集団をつくるとともに、一人ひとりの生徒に

基礎学力を保障する目標と計画を示したものである。そのためには、生徒と教師や教師同士のさらに深い信頼が必要となるだろう。